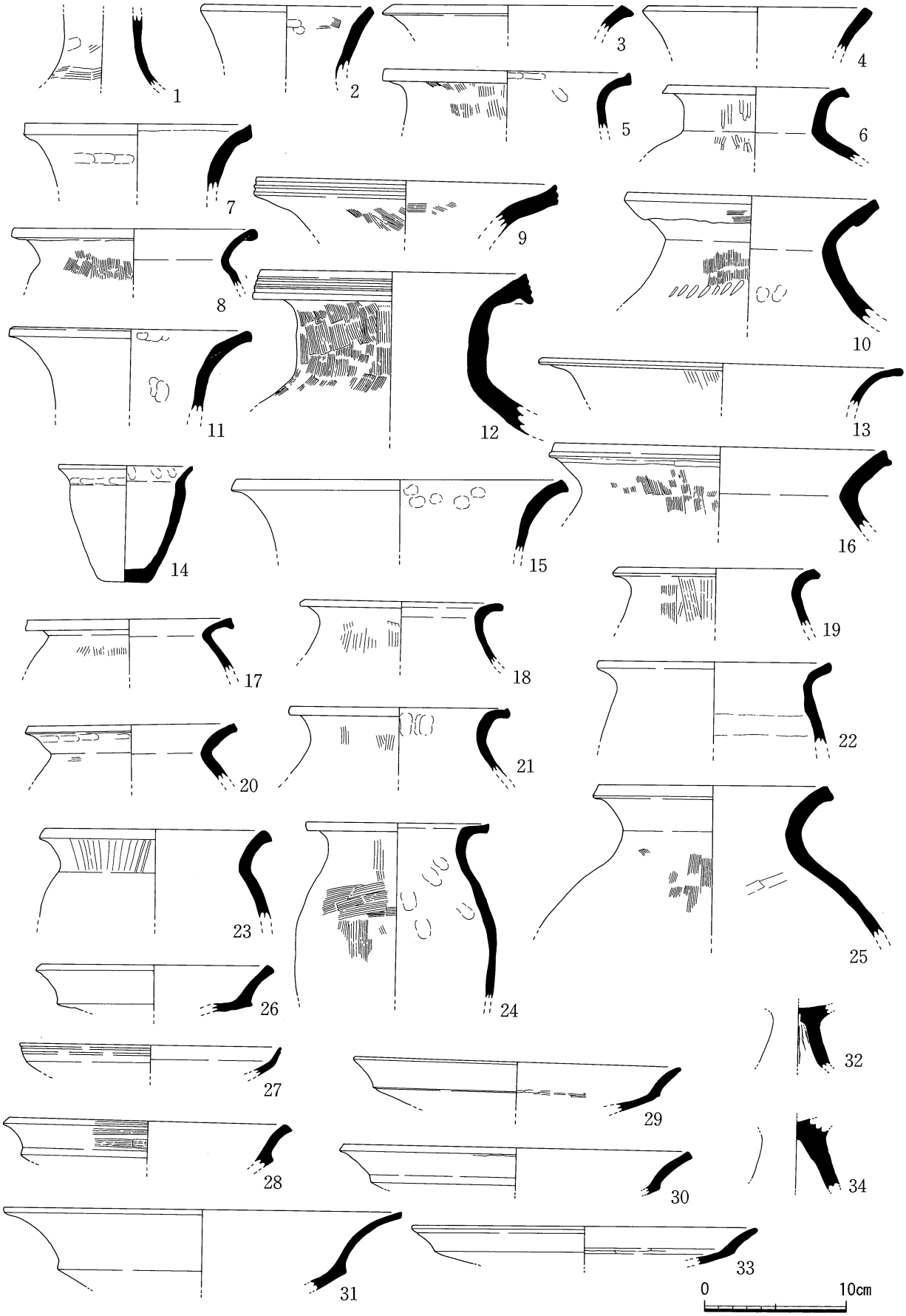


Fig. 107　ST 11出土遺物実測図（壺：1～13・15・16、甕：14・17～25、高杯：26～34）

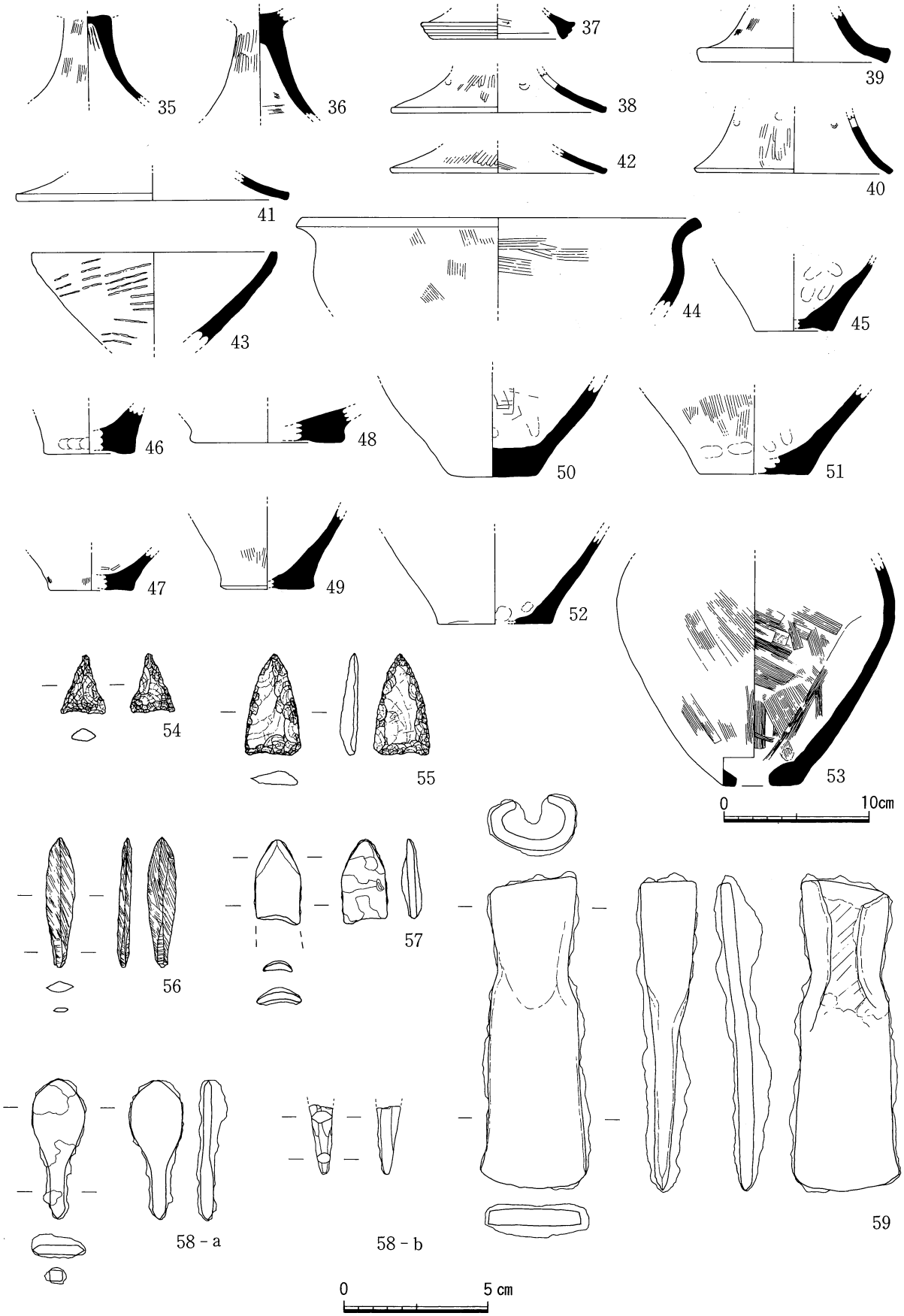


Fig. 108　ST 11出土遺物実測図（高杯：35～42、鉢：43・44、石鏃：54～56、
鉇：57、鉄鏃：58 - a、銅鏃：58 - b、鉄斧：59）

表７　ST 11ピット・土坑計測表

遺構 No.	平面規模(cm)	深さ(cm)	遺構 No.	平面規模(cm)	深さ(cm)
P 1	54×43	23	P 13	32×28	40
P 2	74×46	19	P 14	32×28	48
P 3	50×40	7	P 15	24×22	49
P 4	44×34	19	P 16	18×18	36
P 5	36×28	9	P 17	28×20	44
P 6	58×42	63	P 18	22×20	33
P 7	50×32	36	P 19	26×22	31
P 8	72×52	64			
P 9	60×42	64	SK 1	54×40	20
P 10	38×30	17	SK 2	50×48	32
P 11	28×26	24	SK 3	84×69	30
P 12	26×26	48	SK 4	80×94	81

②　掘立柱建物

SB 27（Fig. 109）

調査区西寄りに位置し、SK 42、SK 10と近接する。確認部は１間×２間である。柱間距離はＰ１～Ｐ２が1.84m、Ｐ２～Ｐ３が1.78m、Ｐ３～Ｐ４が1.6m、Ｐ４～Ｐ５が2.1m、Ｐ５～Ｐ６が1.9m、Ｐ６～Ｐ１が1.64mである。北側の柱穴Ｐ１～Ｐ３の埋土は暗褐色（10 YR 3/3）に褐色（10 YR 4/4）をブロック状に含む粘土質シルトで、南側のＰ４～Ｐ６の埋土は黒褐色（10 YR 2/3）ににぶい褐色（10 YR 4/3）をブロック状に含む粘土質シルトである。

遺物は、Ｐ２以外は少量の土器片を含んでいたが、図示できるものはない。

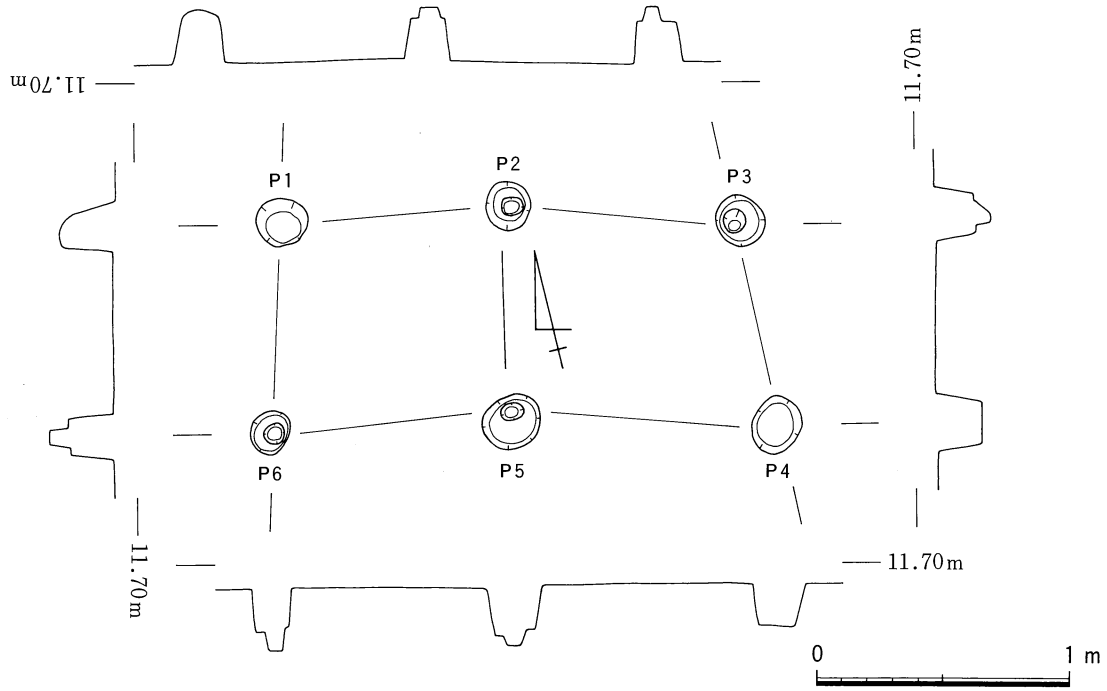


Fig. 109　SB 27平面及びエレベーション図

③　土坑

SK 35（Fig. 110）

調査区東端に位置し、東にST 11と隣接し、北部に多数のピットと近接する。南西方向に細長く長軸は5.72mで、短軸は中央部で1.12mを測る。底部はゆるく窪んだ面を成し、壁は南部が急に立ち上がるが、他はゆるやかに立ち上がり深さは37cmを測る。埋土はⅠ層：褐灰色粘土質シルトと褐色粘土質シルトが混ざる。Ⅱ層：灰黄褐色粘土質シルト、Ⅲ層：にぶい黄褐色粘土質シルト、Ⅳ層：Ⅲ層より明るいにぶい黄褐色粘土質シルト、Ⅴ層：Ⅲ層より明るくⅣ層より暗いにぶい黄褐色粘土質シルトである。

出土遺物は壺（60、61）、甕（62～64）、高杯（67、68）、器台（65）、鉢（70）、砥石（71）である。口縁部数は壺４、甕23、高杯７である。また、出土状況はそのほとんどが埋土上～中層である。後期Ⅱ-１期に属する。

SK 36（Fig. 111）

調査区東寄りに位置し、東部はSX 9を切っている。北部は調査区外に出ており、西部はSK 37に切られており全体の規模は把握できないが、確認部分での長軸は南北に1.42m、短軸は東西に84cmを測り、深さは18cmを測る。壁はゆるやかに立ち上がり一段のテラス状の落ち込みを有する。東部には直径17cm、深さ20cmのピットも認められる。埋土は暗褐色（10 YR 3/3）に極暗褐色（7.5 YR 2/3）を含む粘土質シルトの単純Ⅰ層である。

出土遺物は壺（72、75）、甕（73、74、76、77）、高杯（78、79）、口縁部数は壺２、甕７である。また図示していないが砥石も出土している。土器は器表の荒れが激しく、煤けや被熱赤変したものが目立った。後期Ⅱ-１期に属する。

SK 37（Fig. 111）

調査区の中央東よりに位置し、東部でSK 36を切っている古代の土坑である。北部の半分ほどが調査区外に出ており、その規模は不明であるが確認部分での平面形は半不整円形であり、南北2.5m、東西1.58mを測る。内部には一段の落ち込みがあり、深さ28cmを測る。埋土は落ち込み部に暗褐色（10 YR 3/3）に褐色（10 YR 4/6）をブロック状に含む粘土質シルトが堆積しており（Ⅱ層）、それより上部は灰黄褐色（10 YR 4/2）に褐色（7.5 YR 4/4）を含む粘土質シルトで微量の炭を含む（Ⅰ層）。遺物で図示できたものは土師器杯（81）、須恵器甕（82）である。SK 37は古代に属する。

SK 38（Fig. 112）

調査区中央東寄りに位置する。南北方向に長く長軸2.5m、短軸52cm前後を測る。北部から南部にむけてテラス状の落ち込みを有する。遺物は甕（83）、高杯（84）が出土しており、口縁部数は甕１である。細片が多く図示できるものは少ない。

SK 39（Fig. 113）

調査区の中央部西寄りに位置する。周囲にP 24、P 25が近接し、その北側にも多数のピット群が並んでいる。不整方形の平面形を有し、長軸1.86m、短軸1.2m、深さ８cmを測る。北東部隅にコの字型の落ち込みが確認でき、底面からの深さは５cmを測る。遺物は細片が少量出土しているだけで図示できるものはない。

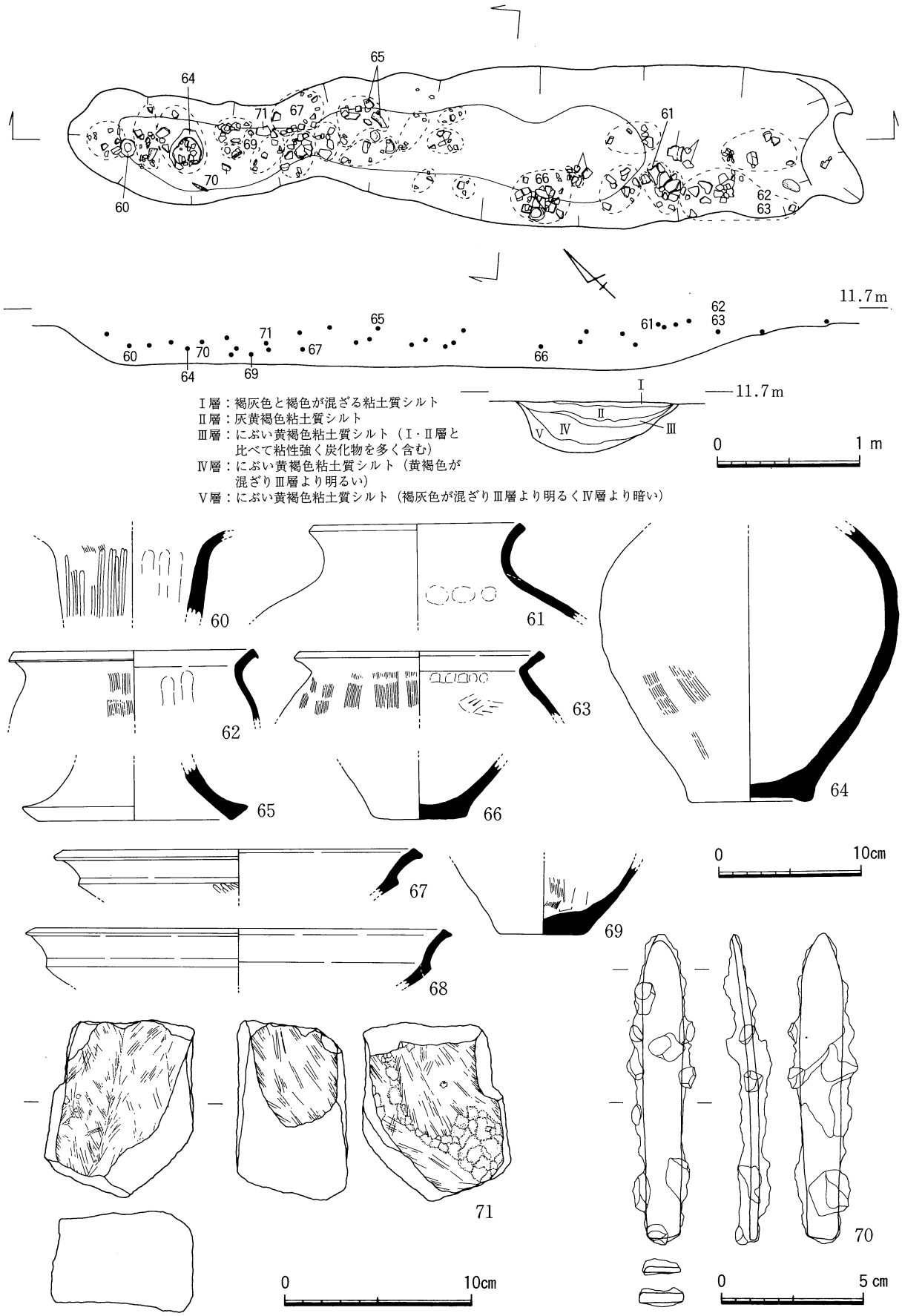


Fig. 110　SK 35遺物出土状況平面・セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
（壺：60・61、甕：62～64、高杯：67・68、器台：65、叩石：71、鉈：70）

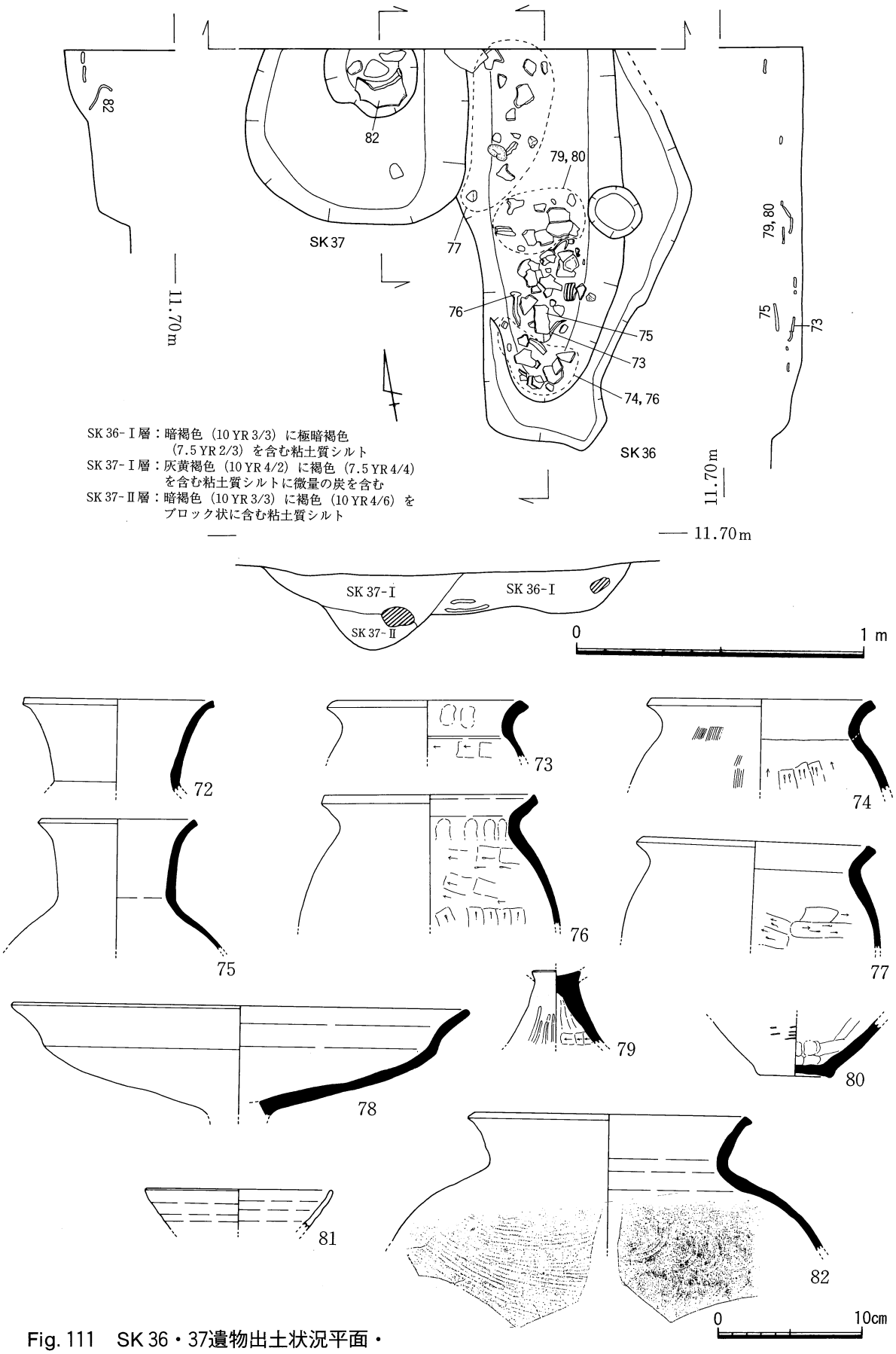


Fig. 111　SK 36・37遺物出土状況平面・
セクション・エレベーション図及び出土遺物実測図
（壺：72・75、甕：73・74・76・77、高杯：78・79、須恵器甕：82、土師器杯：81）

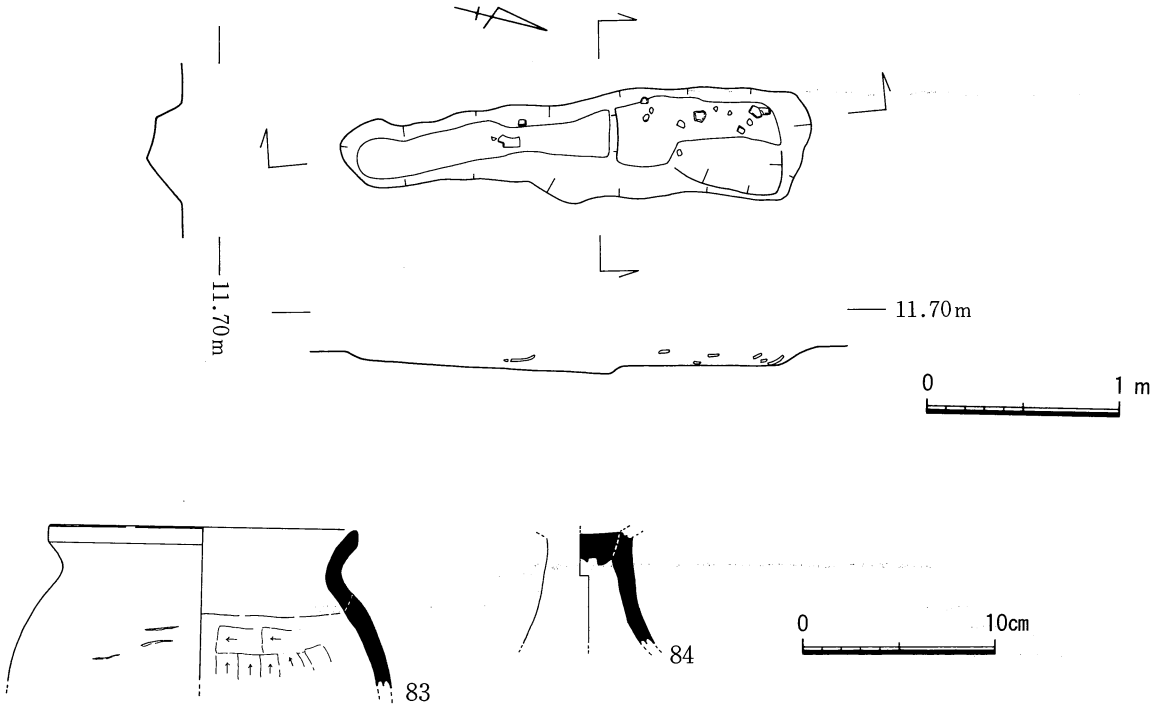


Fig. 112　SK 38遺物出土状況平面・エレベーション図及び出土遺物実測図（甕：83、高杯：84）

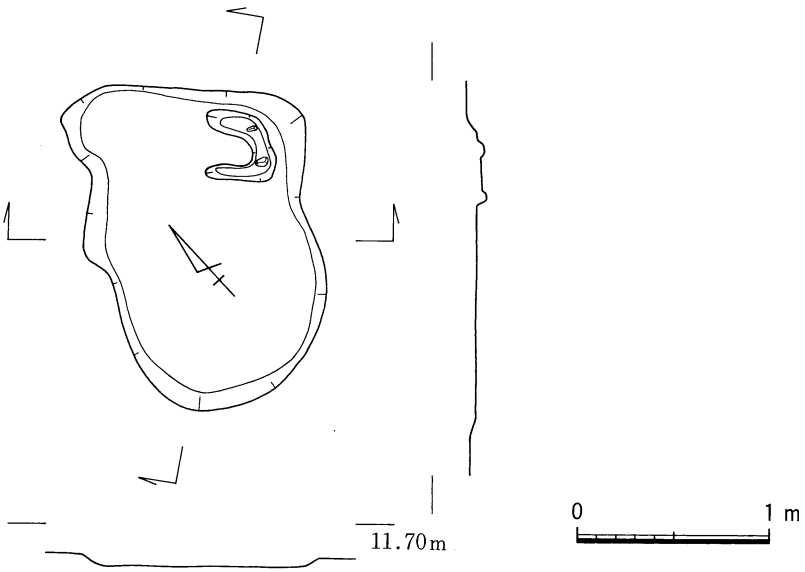


Fig. 113　SK 39平面及びエレベーション図

SK 40（Fig. 114）

調査区中央西寄りに位置し、北部が調査区外に出ており全体の規模は把握できないが、確認部分では東西80cm、南北56cm前後を測り半楕円形を呈する。壁はゆるやかに立ち上がり、深さ22cm前後を測る。出土遺物はない。

SK 41（Fig. 114）

調査区中央東寄りに位置し、東側にP 32が近接する。北東方向に長く、長軸1.06m、短軸は19cm前後を測る。壁はゆるやかに立ち上がり、底面までの深さ6cmを測る。出土遺物はない。

SK 42（Fig. 115）

調査区西寄りに位置し、南部にSB 27が近接する。東西方向に長い楕円形の平面形を有し、長軸1.16m、短軸93cmを測る。壁は南部と東部はゆるやかに立ち上がるが、西部と北部は急に立ち上がり底面までの深さは18cmを測る。

SK 43（Fig. 116）

調査区西端に位置し、南部にSX 11が近接し、西部にSD 54が隣接する。北東に長い不整楕円形の平面形を有し、北東部から南西部に向かって2段のテラス状の落ち込みを有する。長軸は2.82m、短軸は1.6mを測る。壁はゆるやかに立ち上がり、床面までの深さは50cmを測る。遺物は土器が出土しているが、細片が多く図示できるものはない。

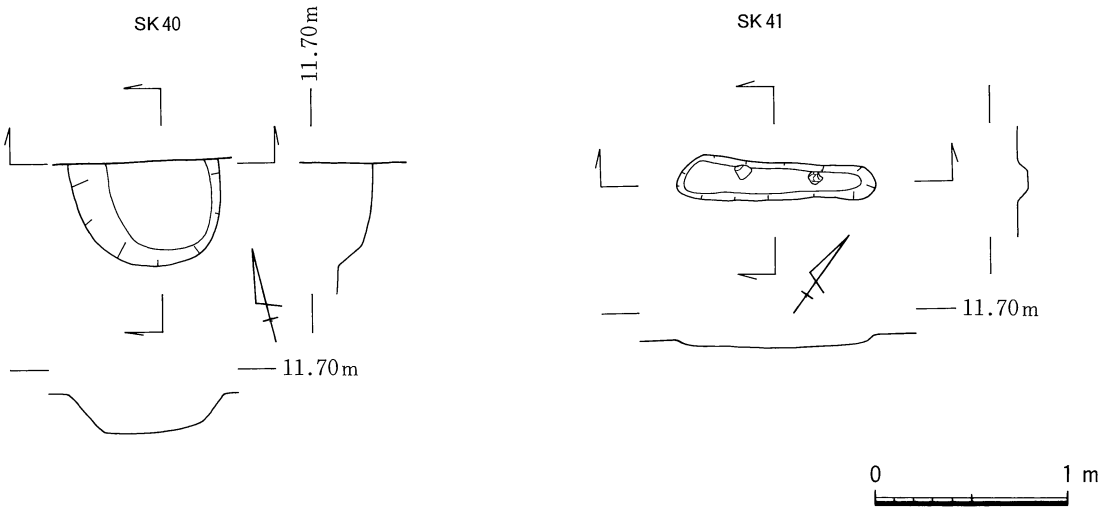


Fig. 114　SK 40・41平面及びエレベーション図

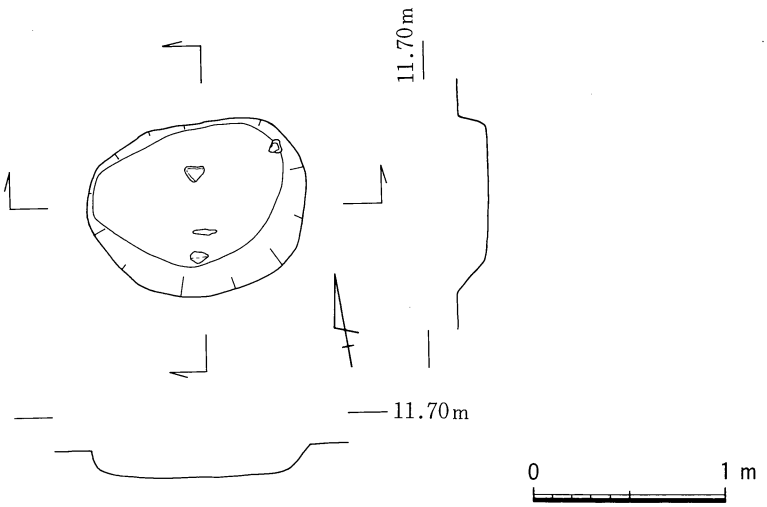


Fig. 115　SK 42平面及びエレベーション図

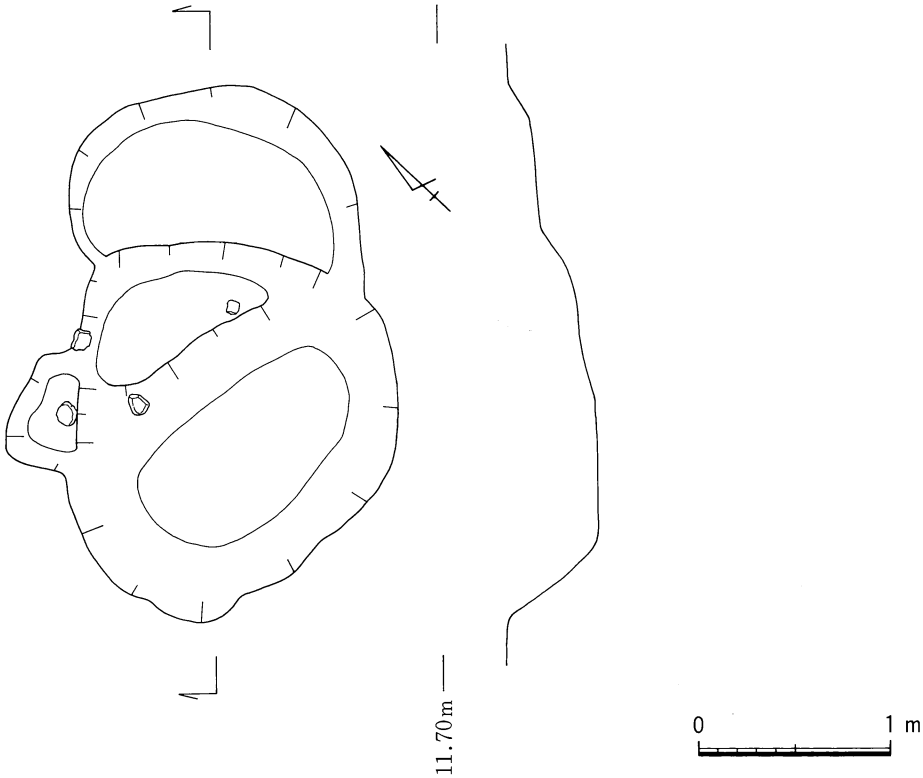


Fig. 116　SK 43平面及びエレベーション図

④　溝

SD 48（Fig. 117）

調査区東端に位置し、ST 11、SD 49が西部に隣接する。北部はSD 49、南部もその後の溝によって切られているため全体の規模は把握できないが、南北に長く確認部の最大幅は60㎝前後である。深さは10㎝ほどで出土遺物は細片だけで図示できるものはない。

SD 49（Fig. 118）

調査区東端に位置し、南東方向にやや屈曲している。北部でK区の溝に切られ、南部は調査区外に出ているため、全体の規模は不明である。東部でST 11を、西部でSD 48を切り、SD 50と近接する。確認部の長さは6.5m、幅72㎝前後である。断面は逆台形で床面はほぼ水平である。埋土はⅠ層：砂に若干の黒色（7.5YR 2/1）、褐灰色（7.5YR 4/1）、灰黄色（2.5Y 7/2）が混ざる粘土質シルト、Ⅱ層：砂に黒色（7.5YR 2/1）、褐灰色（7.5YR 4/1）、灰黄色（2.5Y 7/2）が混ざる粘土質シルト、Ⅲ層：黒色（7.5YR 2/1）、褐灰色（7.5YR 4/1）、灰黄色（2.5Y 7/2）が混ざる粘土質シルトである。

出土遺物は数個の弥生土器が含まれていたが、図示できるものはない。

SD 50（Fig. 117）

調査区西端に位置し、SD 49と隣接する。南部が調査区外に出ているため、全体の規模は不明であるが、南東方向に長く、確認部の長さは2.06m、幅70㎝前後である。全体に一段のテラスを有し、

深さは15cmを測る。埋土はⅠ層：砂礫層、Ⅱ層：黒色（7.5YR2/1）と灰黄色（2.5Y7/2）が混ざる粘土質シルトである。

出土遺物は数個の弥生土器が含まれていたが、図示できるものはない。

SD 51（Fig. 119）

調査区中央東に位置し、SK 36・37が北東にある。基本層準Ⅳ層下で検出したが、南部が調査区外に出ており全体の規模は不明である。南北に長く、確認部分は長さ1.37m、幅23cm前後である。底部形態は船底型を呈し、深さは北部で20cmで南部は12cm前後と浅くなっている。

遺物は壺（85、87、90）、高杯（88）が出土している。出土状況は、図示してあるもの全て上層から出土している。

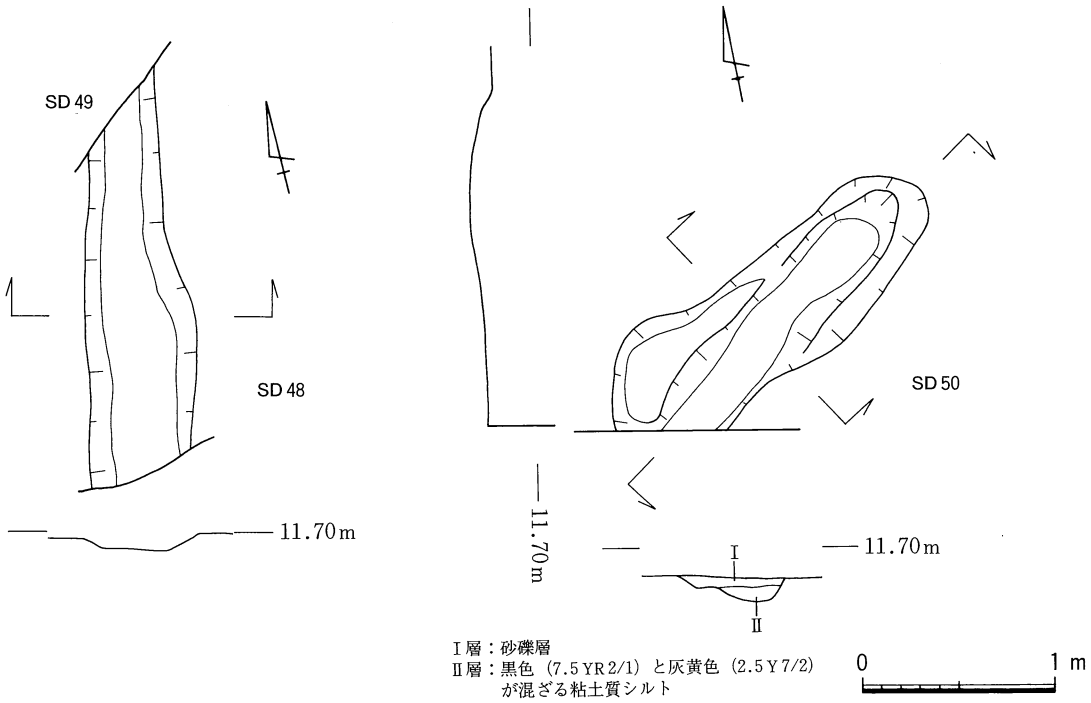


Fig. 117　SD 48・50平面・セクション及びエレベーション図

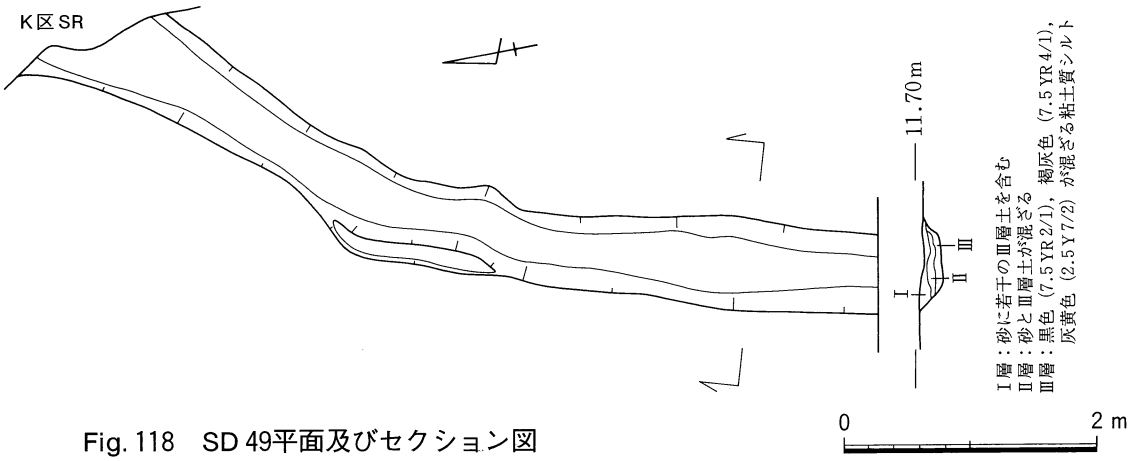


Fig. 118　SD 49平面及びセクション図

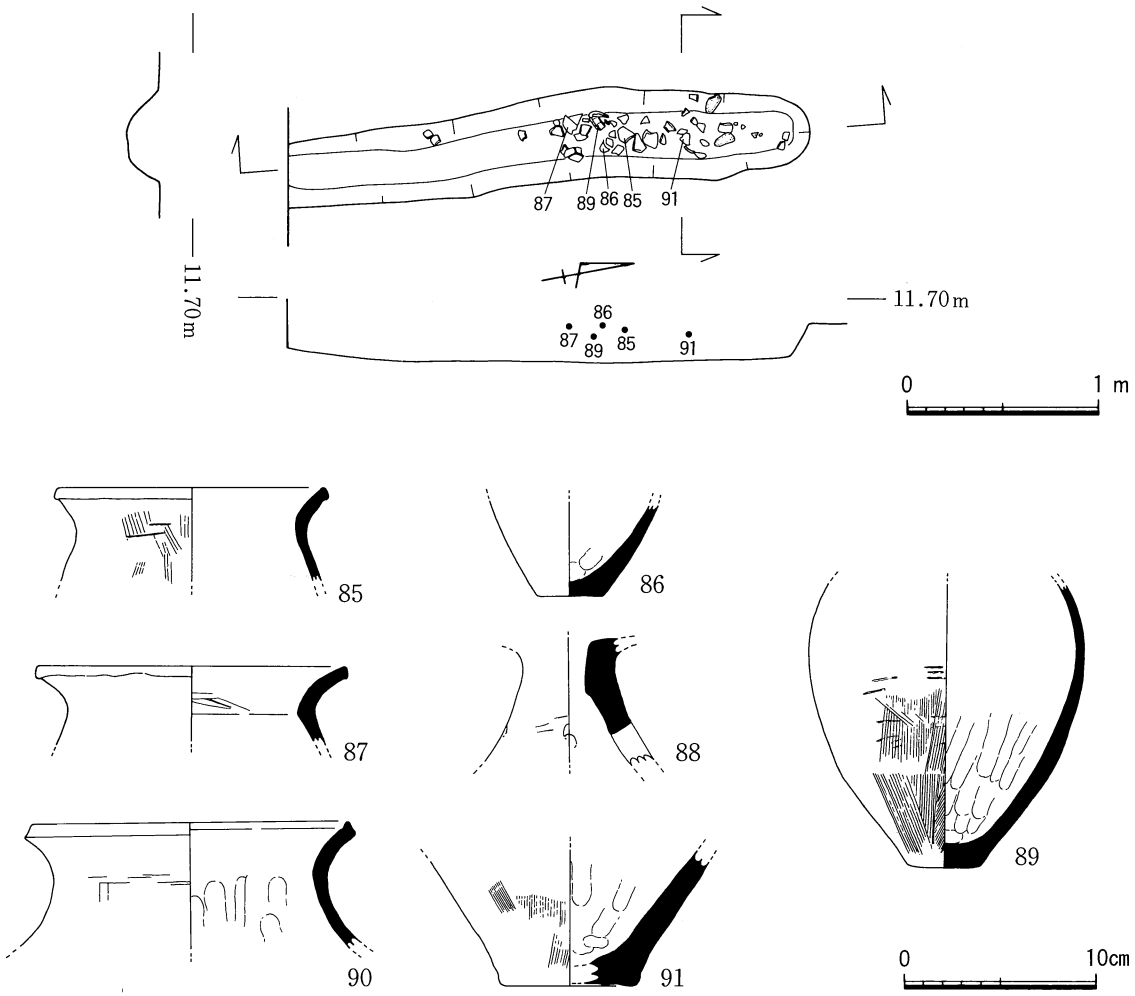


Fig. 119　SD 51遺物出土状況平面・エレベーション図及び出土遺物実測図
（壺：85・87・90、高杯：88）

SD 52（Fig. 120）

調査区中央東寄りに位置し、南北に長い幅40cm前後の溝である。南北が調査区外に出ており、その規模は不明であるが確認部の長さは4.1mで、深さは4cm前後と浅い。

遺物は弥生後期の細片が多量に出土しているが、図示できるのは甕（92）のみである。

SD 53（Fig. 121）

調査区西部に位置する。北東方向に延びるが、南北ともに調査区外に出ているため全体の規模はわからないが、確認部の長さは約4.26m、幅50cm前後を測る。断面は逆台形で深さは18cmを測る。埋土は褐色（10 YR 4/4）と黒褐色（10 YR 2/3）が混ざる粘土質シルトである。

遺物は細片だけで図示できるものはない。

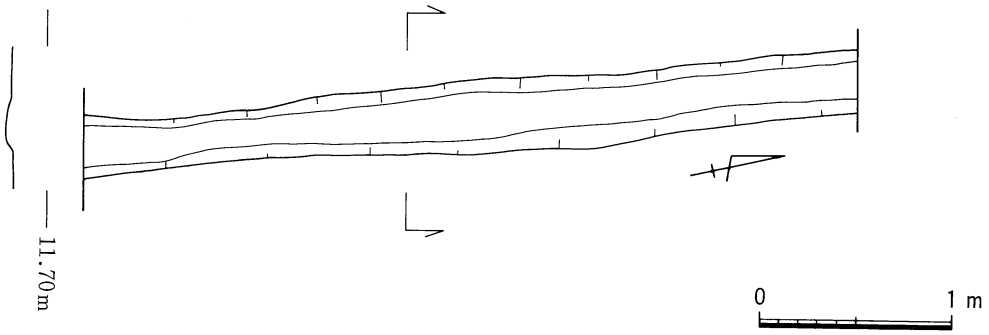
SD 54（Fig. 123）

調査区西端に位置し、西部と東部が調査区外に出ている。東にSK 43、SX 11がある。南北に長いプランで、確認部分は長さ2.66m、幅3.5～5.5m前後を測る。断面は逆台形で深さ22cmを測る。北部には26～34cmの楕円形のピットがあり底面からの深さ12cmを測る。

遺物は壺（93、95、96）、甕（94、97、98）、高杯（99）、鉢（101）が出土している。これらはほとんど埋土上層から出土している。

SD 55（Fig. 122～128）

調査区中央部に位置する。西北西方向に延びる幅約３ｍの大規模な溝である。南北ともに調査区外に出ているため全体の規模は把握できない。遺構は基本層準のⅣ層を除去したところで検出でき、確認部の長さは9.36ｍを測る。壁はゆるやかに立ち上がり、北壁ではテラス状の段が一部みられ、深さ66㎝前後を測る。埋土はⅠ層：黒褐色粘質土に黄褐色粘質土を若干含む、Ⅱ層：にぶい黄褐色粘質土、Ⅲ層：オリーブ褐色粘質土である。Ⅱ層以下は地山土との判別が困難であり、Ⅲ層の中央部から南東部にかけては焼土、炭化物、被熱石が入っていたため水が流れていたものではないと考



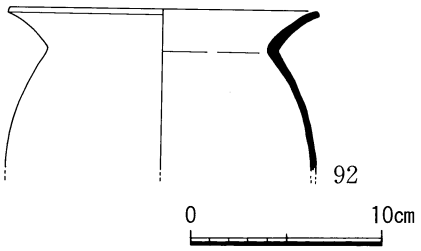


Fig. 120　SD 52平面・エレベーション図及び出土遺物実測図（甕：92）

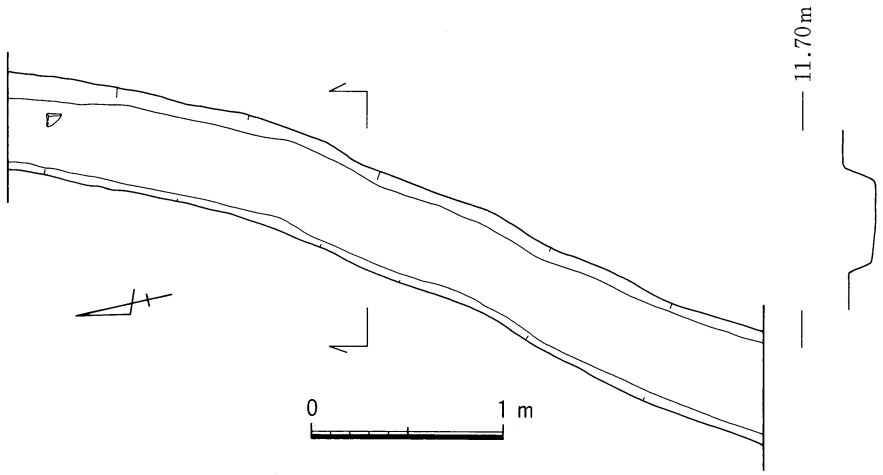


Fig. 121　SD 53平面及びエレベーション図

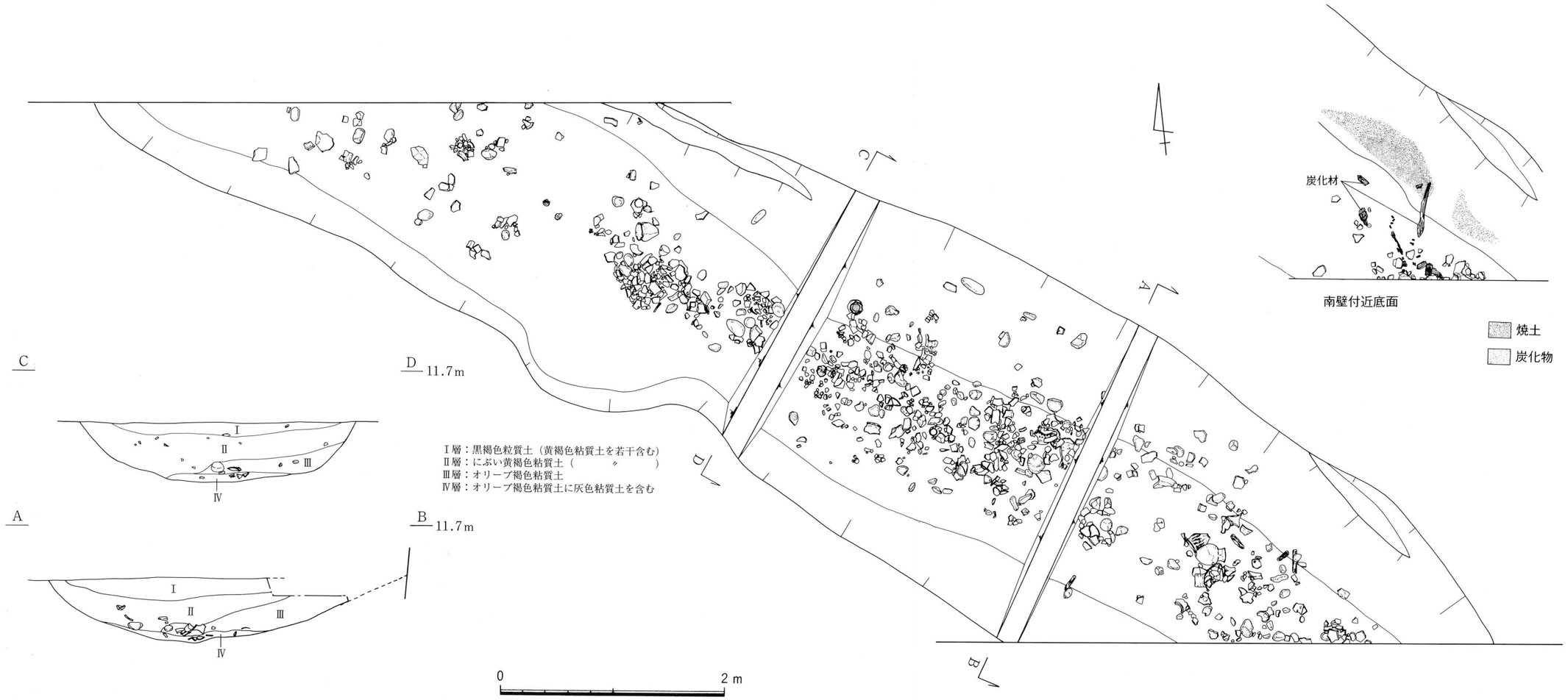


Fig. 122　SD 55遺物出土状況平面・セクション図

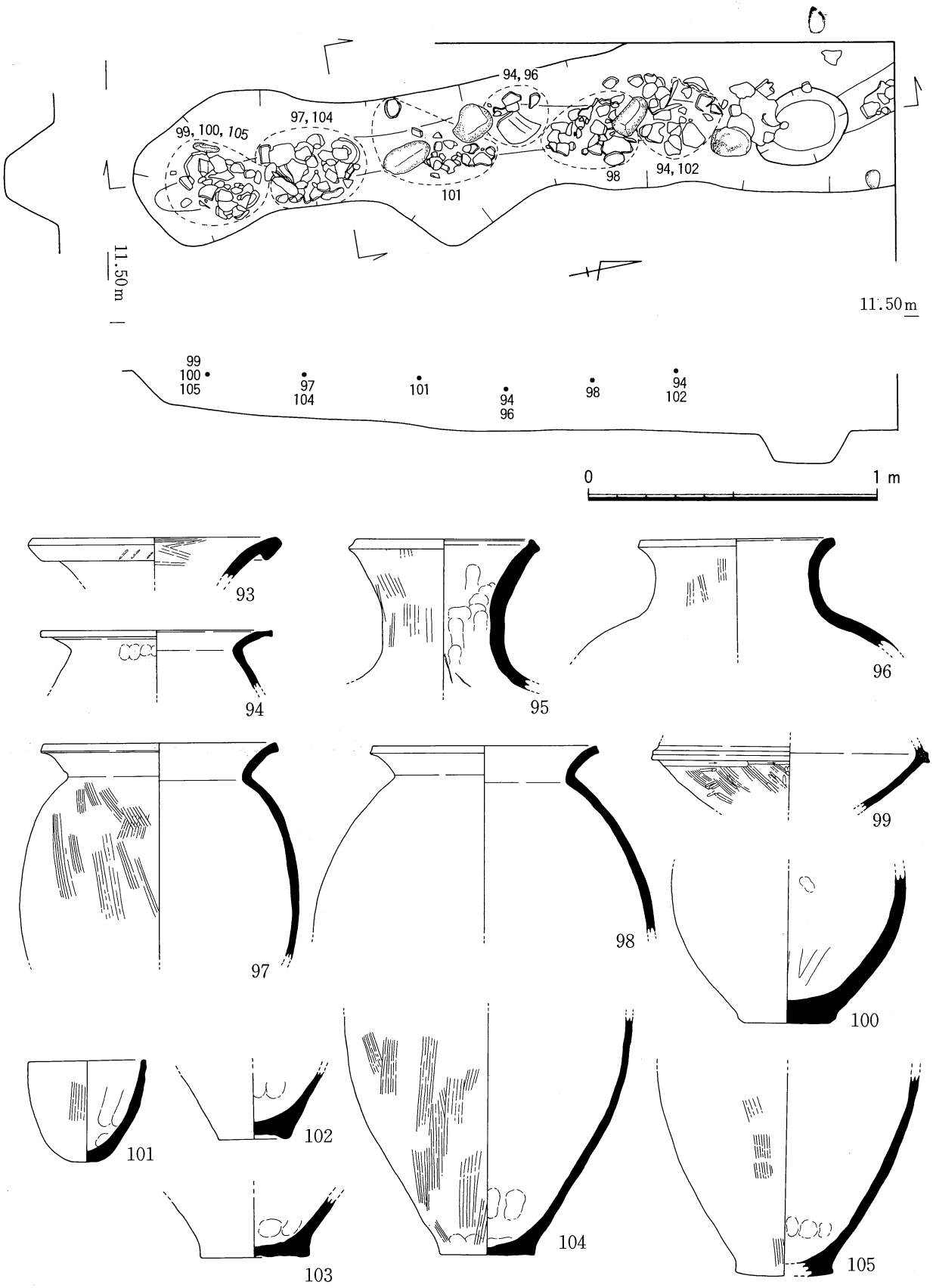


Fig. 123　SD 54遺物出土状況平面・エレベーション図
及び出土遺物実測図（壺：93・95・96、
甕：94・97・98、高杯：99、鉢：101）

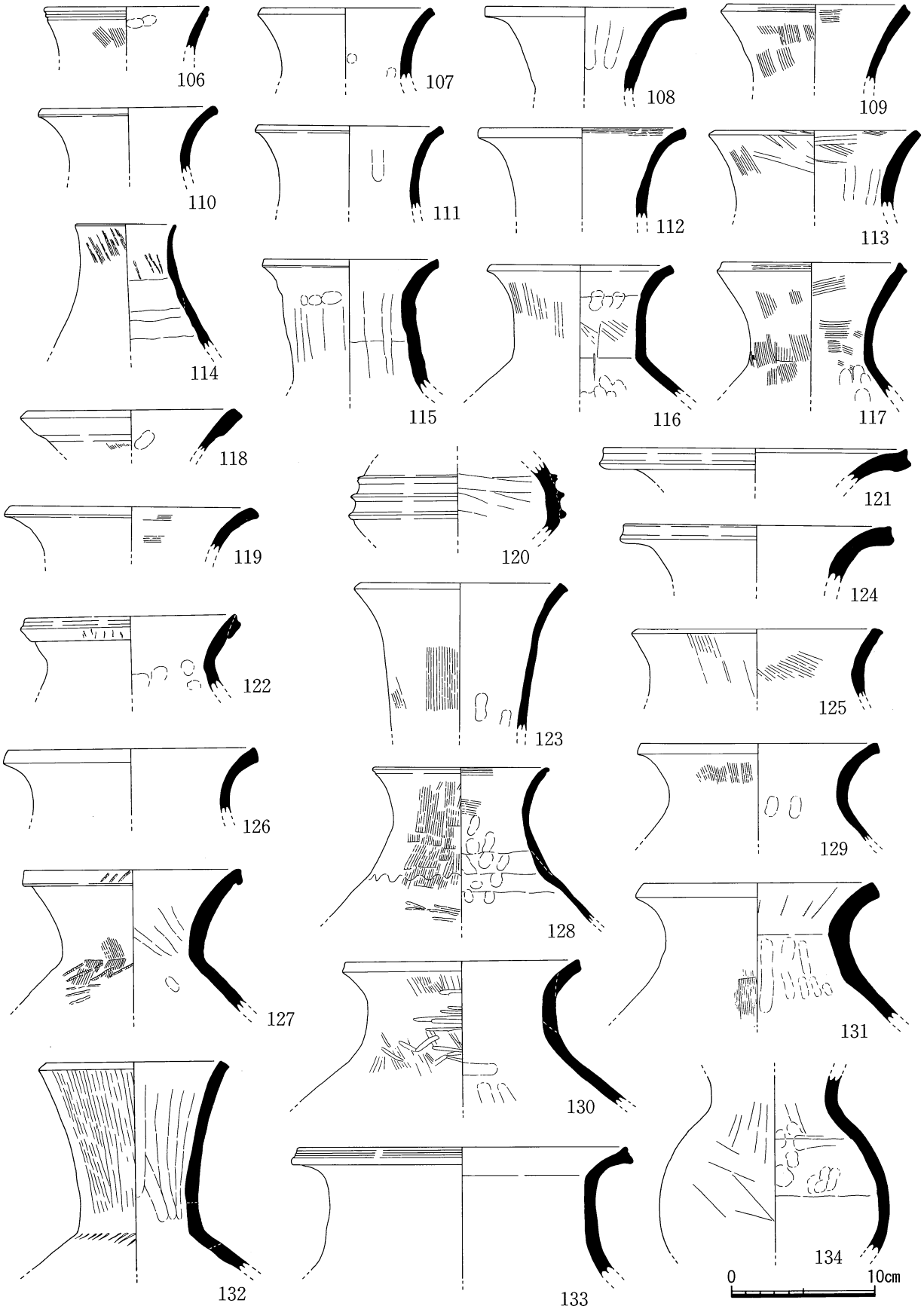


Fig. 124　SD 55出土遺物実測図（壺：106～134）

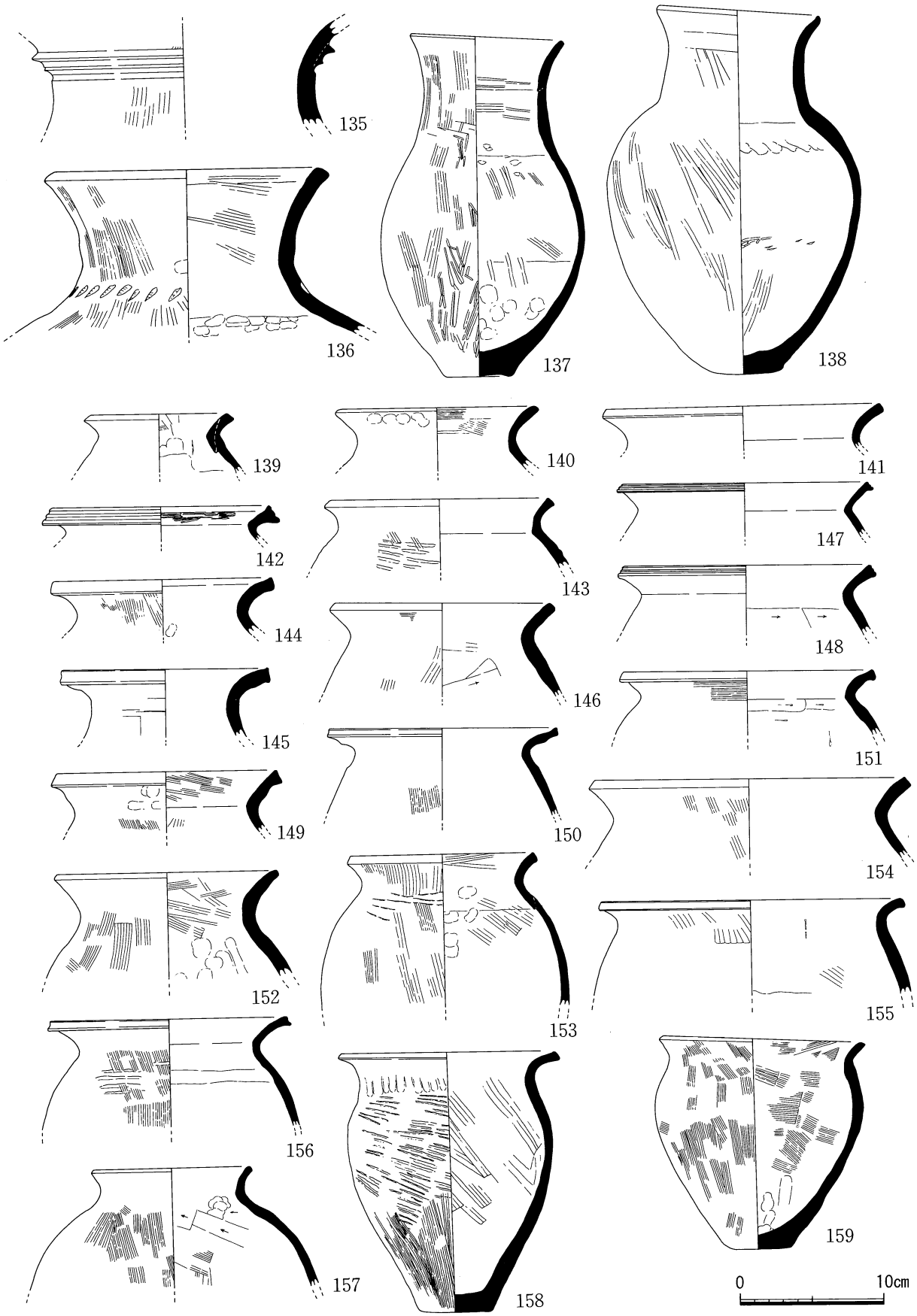


Fig. 125　SD 55出土遺物実測図（壺：135～138・145・149・152、甕：139～144・146～148・150・151・153～159）

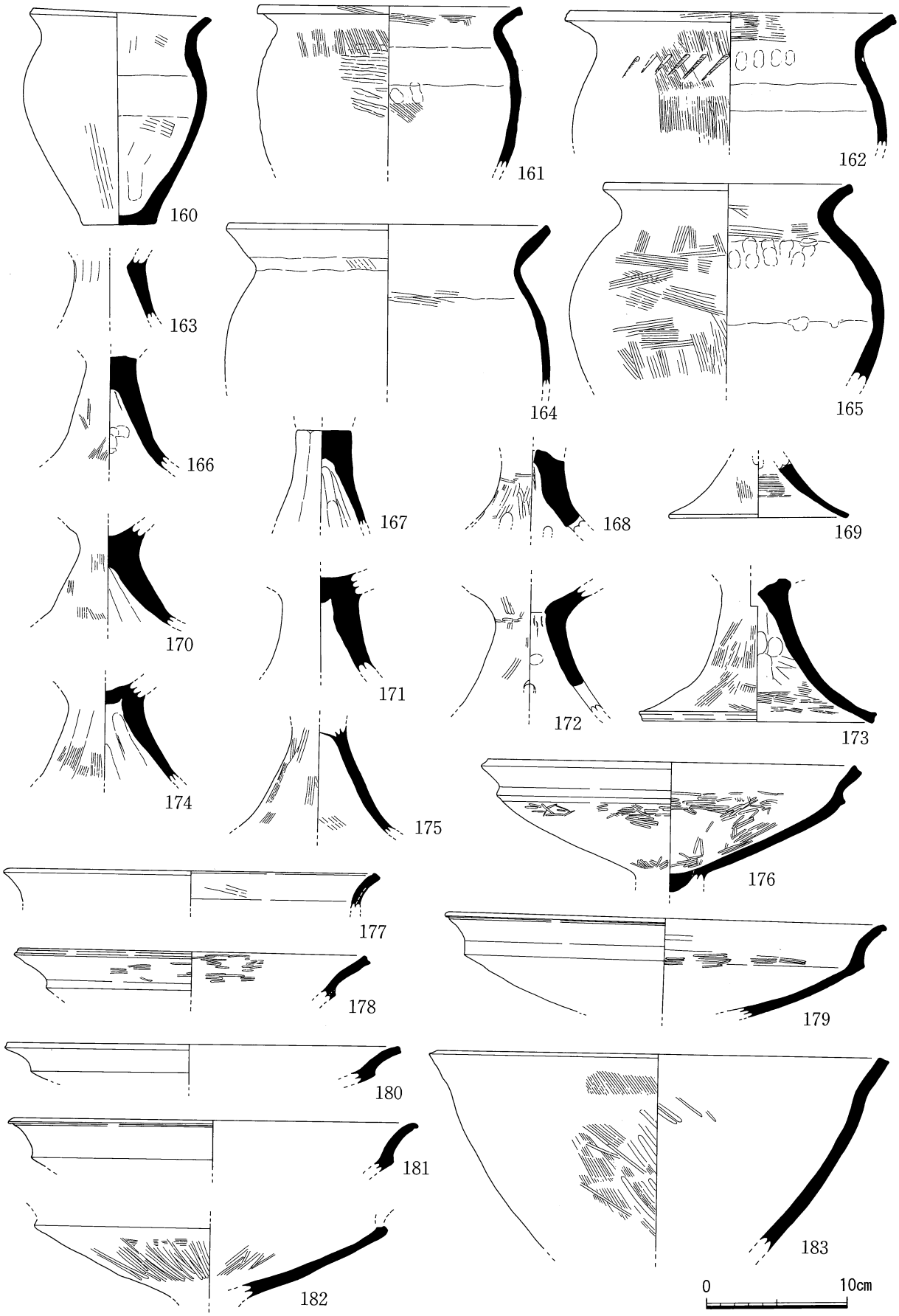


Fig. 126　SD 55出土遺物実測図（甕：160～162・164・165、高杯：163・166～182、鉢：183）

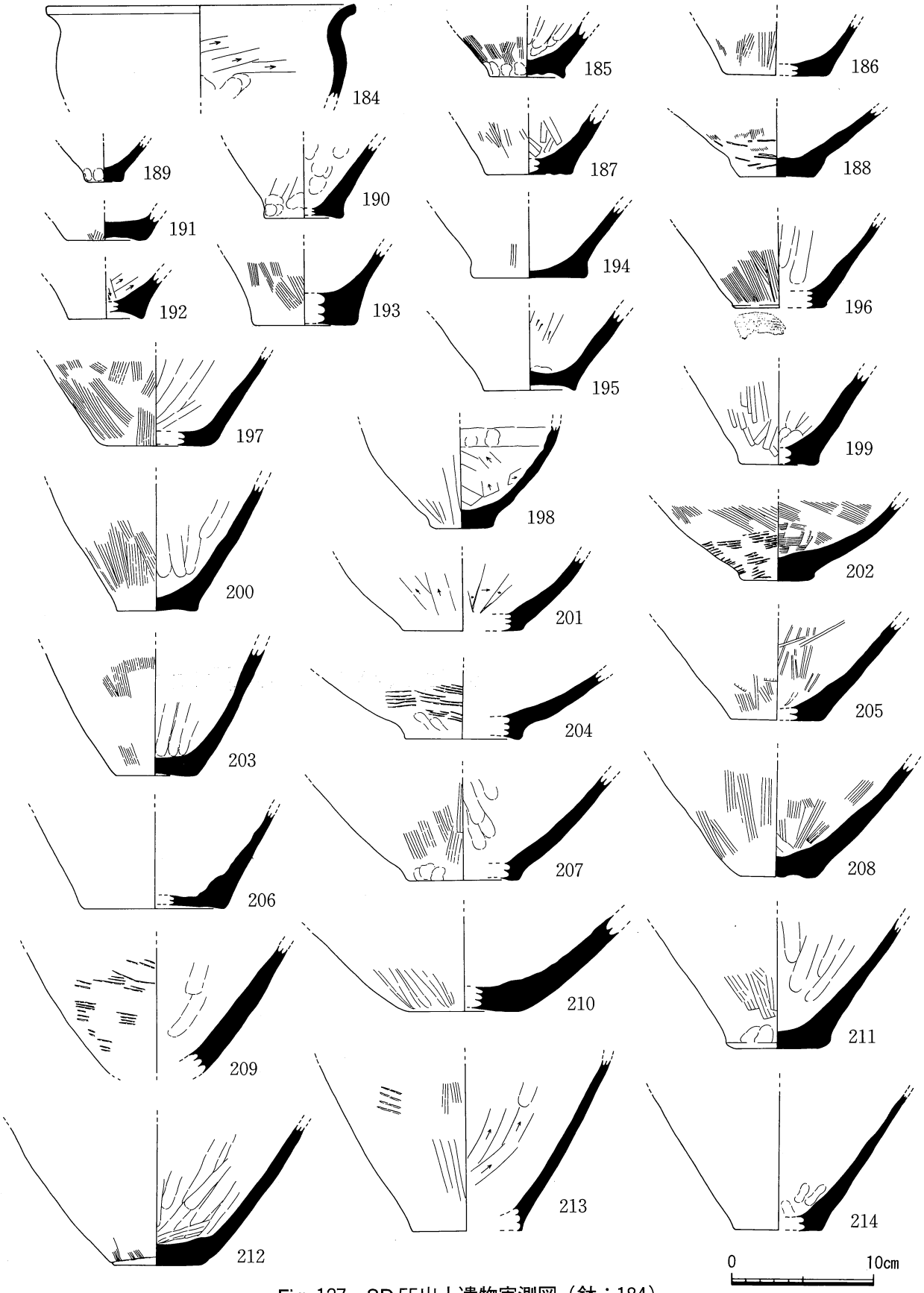


Fig. 127　SD 55出土遺物実測図（鉢：184）

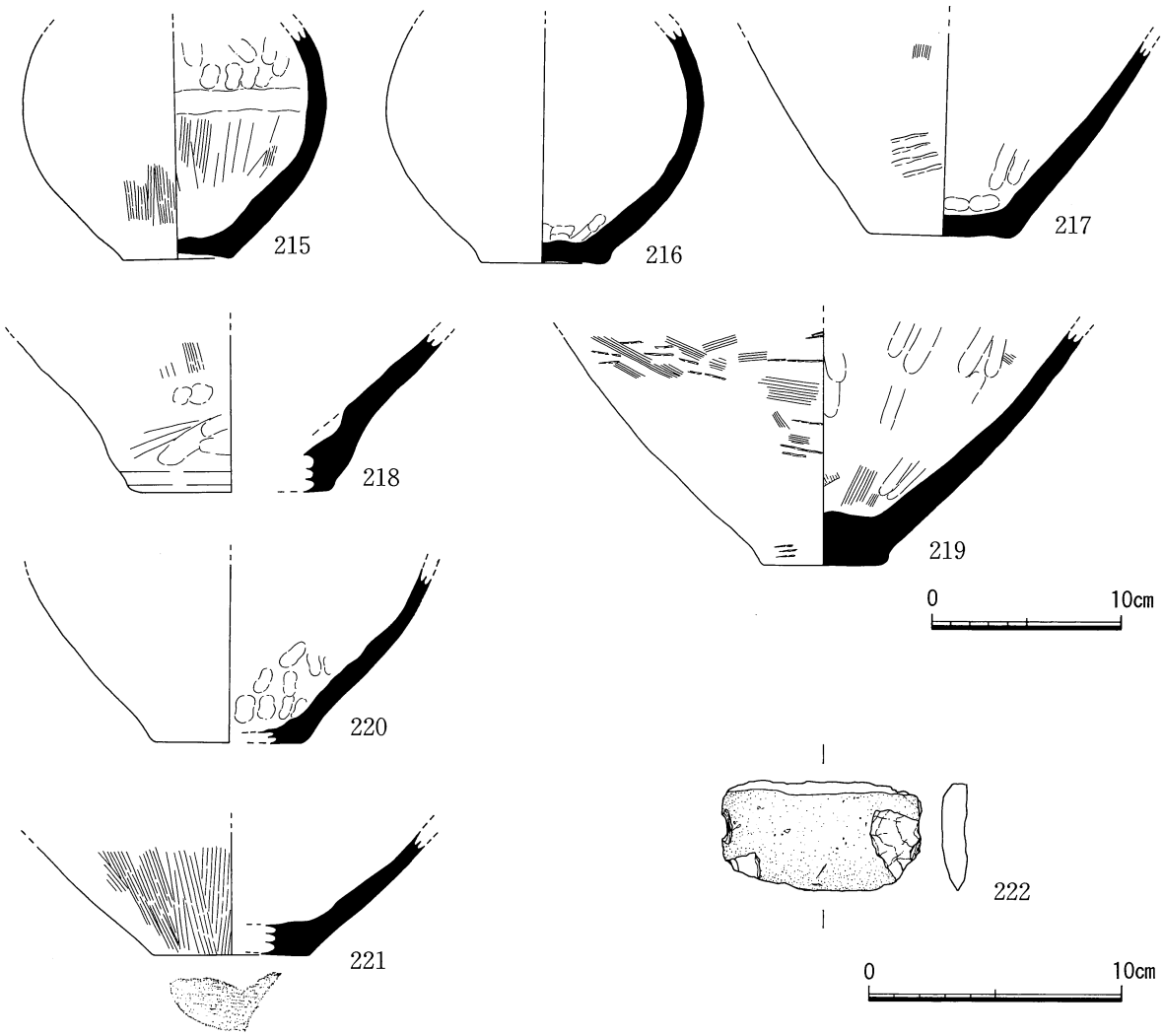


Fig. 128　SD 55出土遺物実測図（石包丁：222）

えられる。また、中央南壁にピットがあり、その埋土は灰色粘質土に暗赤褐色粘土粒を含むものであった。遺物は壺（106～138、145、149、152）、甕（139～144、146～148、150、151、153～162、164、165）、高杯（163、166～182）、鉢（183、184）、石包丁（222）が出土している。出土状況は、全層にわたり多量に検出されているが、上層は細片が多く下層に至るにしたがい残存率の高い良好な遺物が検出された。しかし、遺物の全出土量からすると復元図示できるものは比較的少なかったといえる。

⑤　性格不明遺構

SX 9（Fig. 129）

調査区東寄りに位置し、北は調査区外、西はSK 36に切られている。確認長は東西に4.24m、最大幅は南北に1.4mを測る。基本層準Ⅳ層を除去したところで検出できた。埋土は黒褐色（7.5 YR 3/2）、褐色（7.5 YR 4/3）、にぶい黄褐色（10 YR 4/3）が混ざる粘土質シルトの単純一層で、深さは12cmと浅い。

遺物は細片はあったが図示できるものはない。

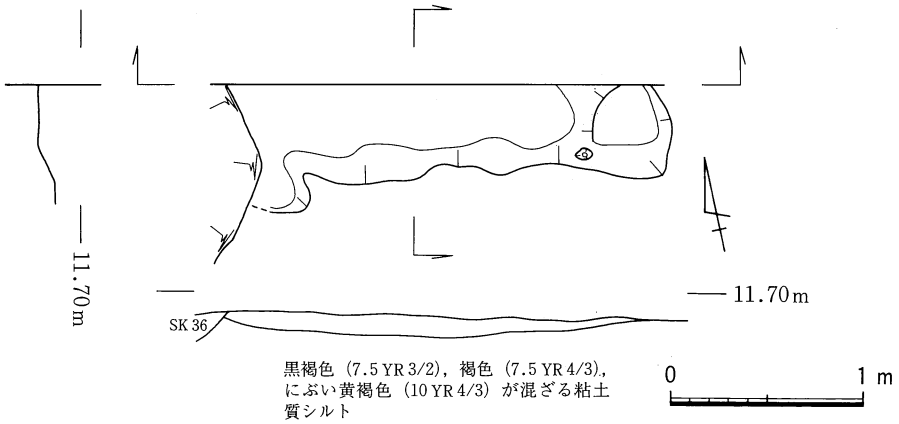


Fig. 129　SX 9平面及びエレベーション図

SX 10（Fig. 130・131）

調査区西寄りに位置し、南にSK 42とSB 27が隣接する。

埋土はⅠ層：黒褐色（10 YR 2/3）粘土質シルトに土器を含む、Ⅱ層：褐色（10 YR 4/4）粘土質シルト、Ⅲ層：褐色（10 YR 4/4）粘土質シルトに炭と焼土を多く含む、Ⅳ層：褐色（10 YR 4/4）粘土質シルトに炭を含む、Ⅴ層：褐色（10 YR 4/4）粘土質シルトに炭を多く含む、Ⅵ層：Ⅳ層と同じ、Ⅶ層：にぶい黄褐色（10 YR 4/3）粘土質シルトである。

遺物は壺（223、225～227、229）、甕（224、228）、高杯（230～237）が出土しているが、そのほとんどが上層より出土している。

SX 11（Fig. 132・133）

調査区西端に位置し、北西部にSK 43が隣接する。南部が調査区外に出ており全体の規模は不明であるが、確認部は直角二等辺三角形の平面形を呈し、確認長は北西方向に2.5m、北東方向に2.68mを測る。埋土はⅠ層：褐色（10 YR 4/4）とにぶい黄褐色（10 YR 4/3）が混ざり暗褐色（10 YR 3/4）を小さなブロック状に含む粘土質シルトで土器片を含む、Ⅱ層：褐色（10 YR 4/4）とにぶい黄褐色（10 YR 4/3）と暗褐色（10 YR 3/3）が混ざり暗褐色（10 YR 3/4）を小さなブロック状に含む粘土質シルトで土器片を含むものである。底面は水平で壁はゆるやかに立ち上がり、底面までの深さは15cmを測る。

遺物は、壺（241、243、244）、甕（242、245、246、251）、高杯（247～250、252、254）、蓋が出土している。弥生後期後半を中心とする土器片が多く、細片ではあるが讃岐の土器片も確認できた。

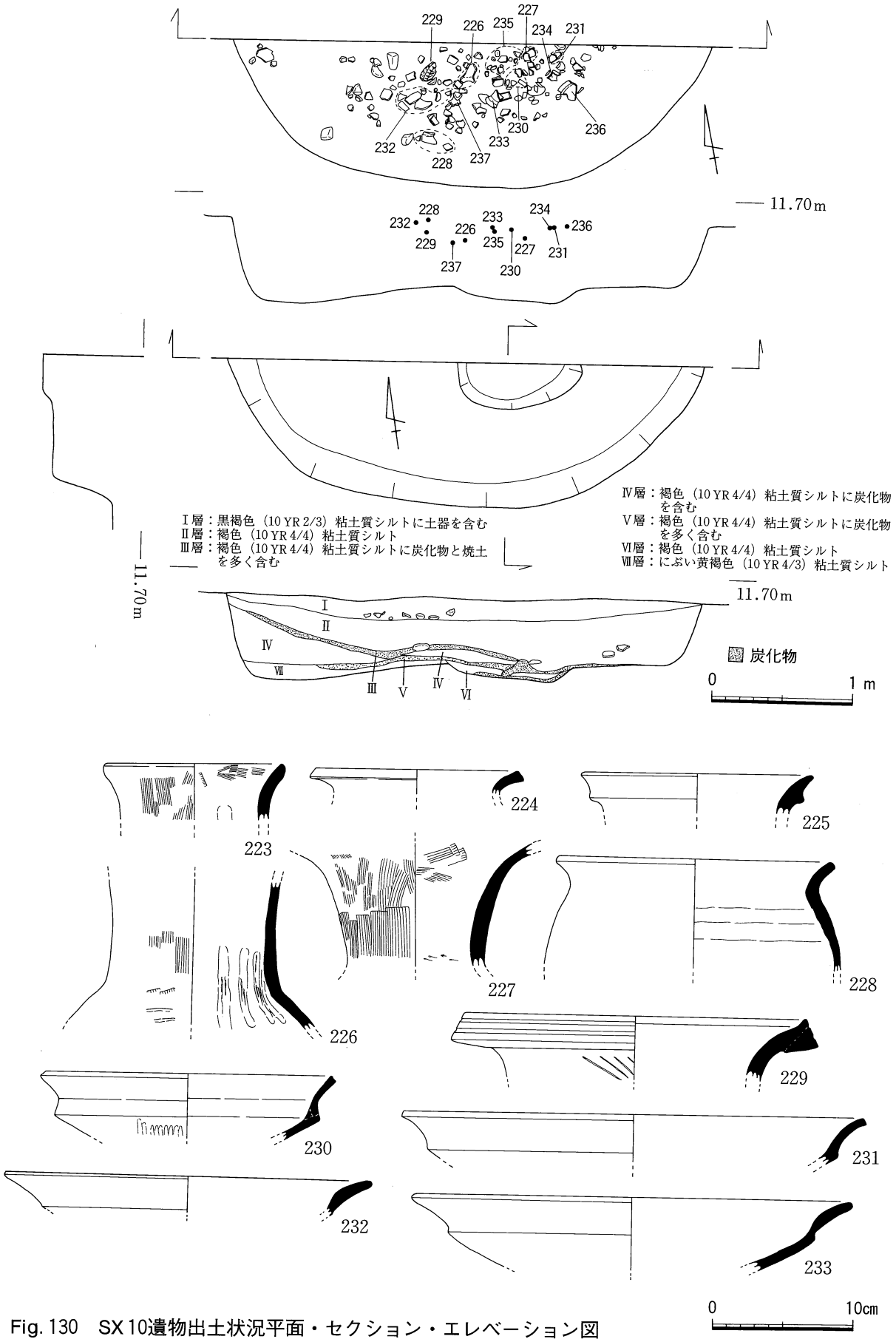


Fig. 130　SX 10遺物出土状況平面・セクション・エレベーション図
及び出土遺物実測図（壺：223・225～227・229、甕：224・228、高杯：230～233）

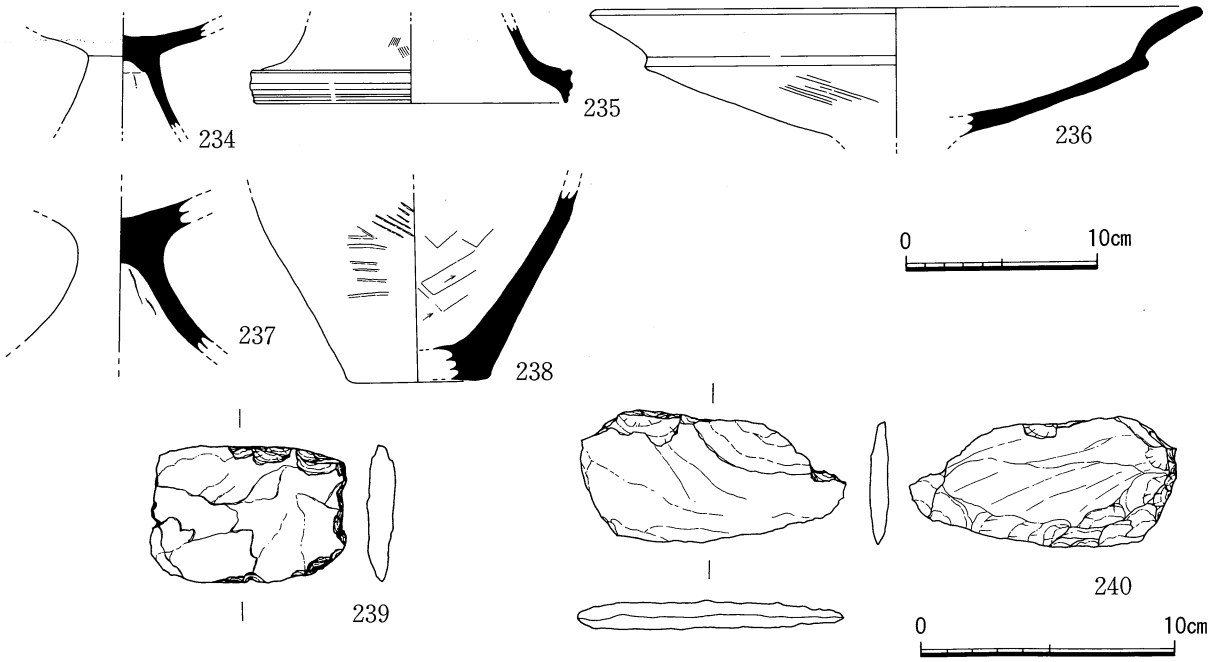


Fig. 131　SX 10出土遺物実測図（高杯：234～237、石包丁：239・240）

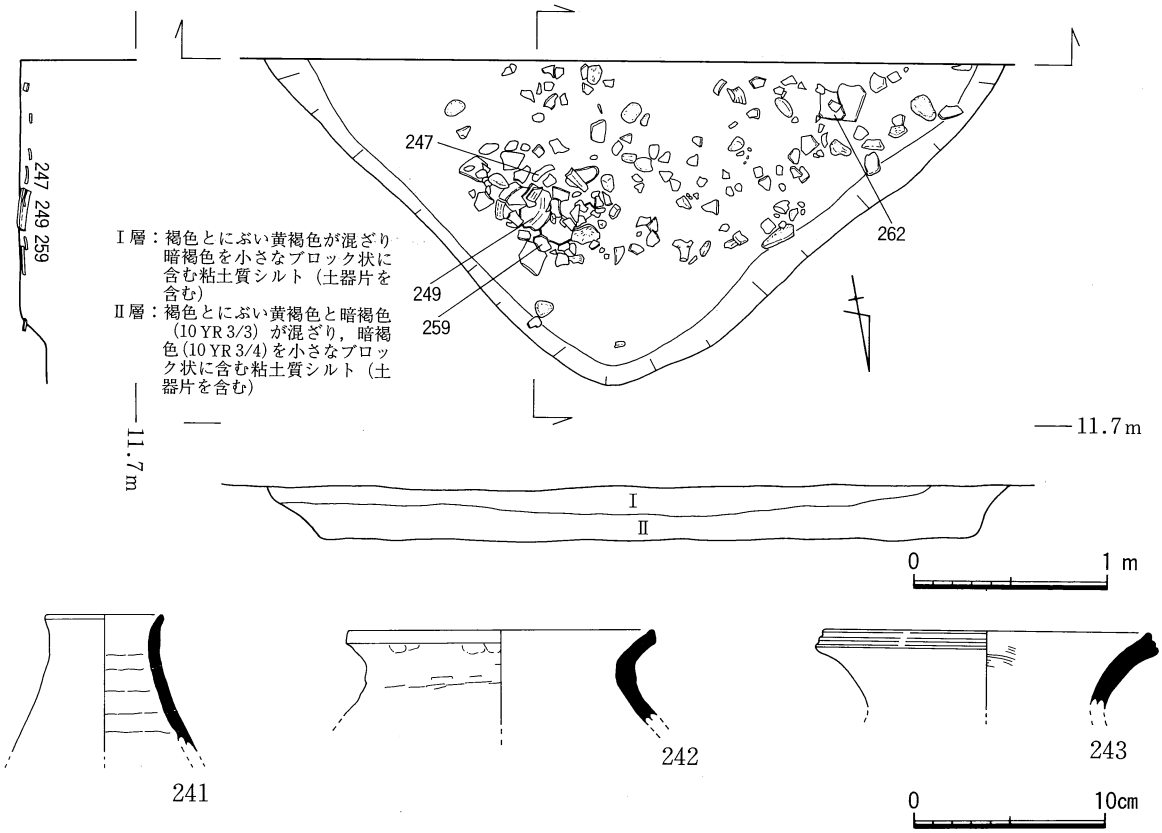


Fig. 132　SX 11遺物出土状況平面・セクション図及び出土遺物実測図（壺：241・243、甕：242）

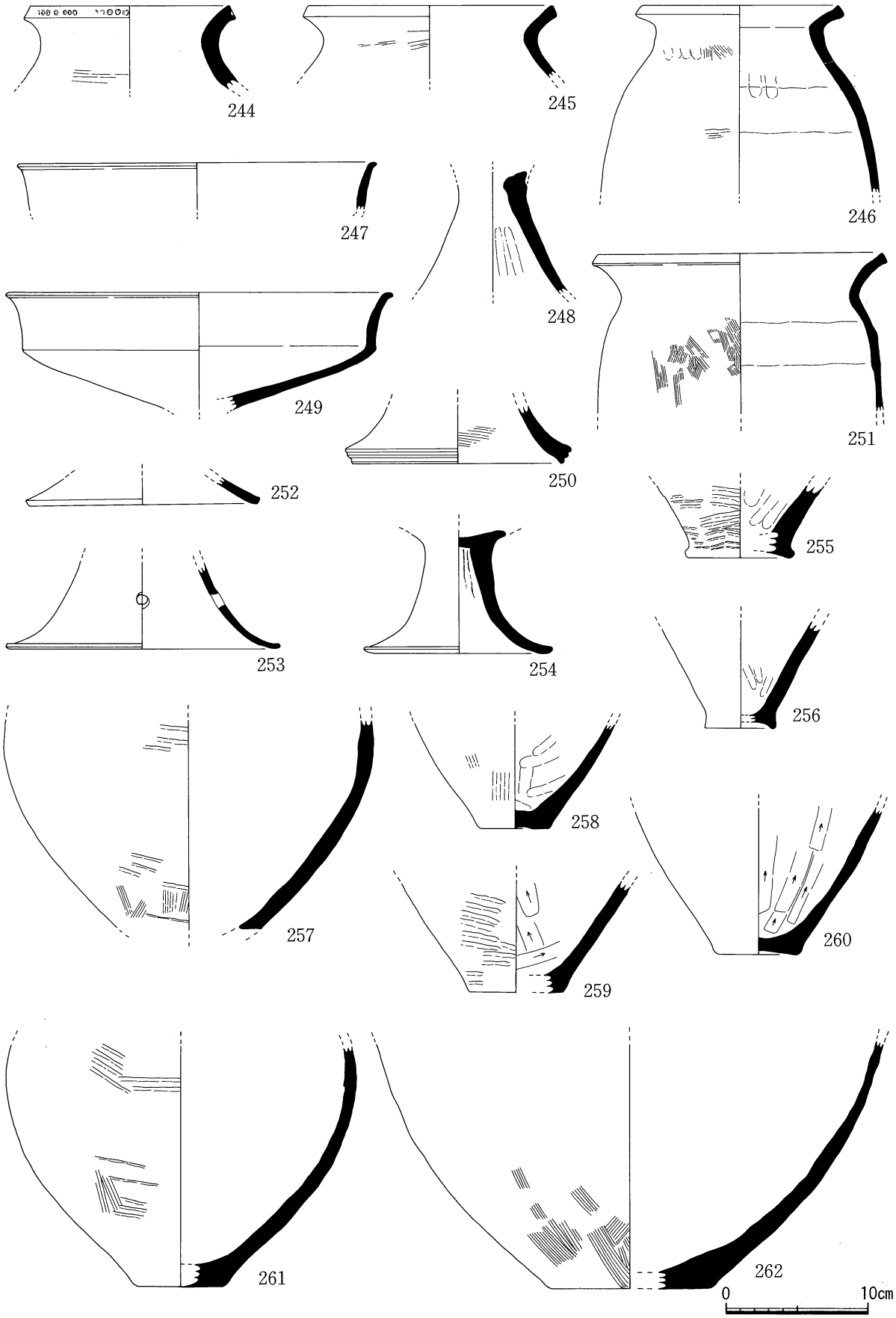


Fig. 133　SX 11出土遺物実測図（壺：244、甕：245・246・251、高杯：247～250・252～254）

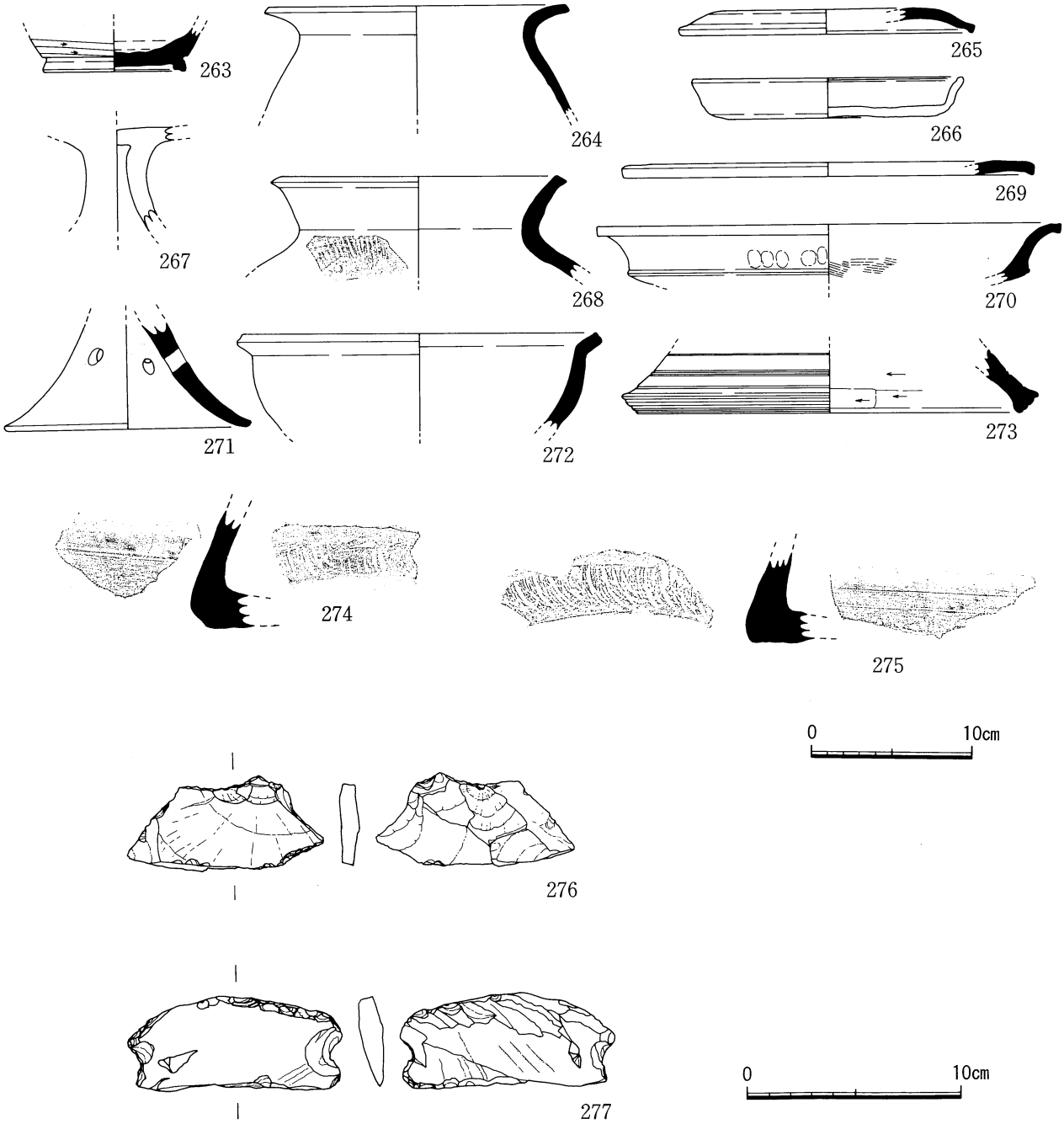


Fig. 134　表土及び包含層出土遺物実測図（須恵器壺：263・268、須恵器甕：274・275、須恵器蓋：265・269、須恵器鉢：272、土師器高杯：267、土師器皿：266、甕：264、高杯：270・271・273、石包丁：276・277）

遺物観察表（土器）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
107	1	ST 11	壺		(5.0)			チャートの細粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面肩部横ハケ。器表の荒れが激しい。	
〃	2	〃	壺	11.8	(4.2)			チャート。頁岩の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。口縁部内面、指頭圧痕、横ハケ。	
〃	3	〃	壺	16.0	(1.8)			チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。橙色。口唇部つまみ出し、横ナデ。内面横ナデ。	
〃	4	〃	壺	15.4	(3.2)			チャートの粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面横ナデか。口唇部面取り。	
〃	5	〃	壺	17.3	(4.0)			チャートの細粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部内面横ナデ。口縁部外面横ナデ＋縦ハケ。口唇部強い横ナデで拡張。	
〃	6	〃	壺	12.4	(5.1)			チャートの粗粒砂含む。明黄橙色。外面横ナデ＋ヘラ磨き。口唇部横ナデし下端部を拡張。	
〃	7	〃	壺	16.0	(4.9)			チャートの粗粒砂を多く含む。明黄橙色。内外面横ナデ。口唇部上方にわずかにつまみ出し強い横ナデ。	
〃	8	〃	壺	17.0	(4.0)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。内面ナデ。頸部～肩部縦ハケ（上→下）。口縁部幅８～10㎜の粘土帯を添付し、口唇部強い横ナデ。	
〃	9	〃	壺	21.1	(4.8)			チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。橙色。内外面横ナデ＋ハケ。口唇部は拡張し、２条の凹線文を有する。	
〃	10	〃	壺	17.4	(8.9)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面縦ハケ、肩部に列点文を有する。口縁部外面に幅２㎝程の粘土帯を添付する。器表の荒れが激しい。	
〃	11	〃	壺	16.7	(5.8)			チャートの粗粒砂を含む。灰黒色。外面横ナデか。内面指頭圧痕。口唇部面取り。	
〃	12	〃	壺	18.8	(11.4)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。口唇部強い横ナデで下垂し、３条の沈線化した凹線文を有する。	
〃	13	〃	壺	24.8	(2.8)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面ナデ＋縦ハケ。口縁部強い横ナデ。器表の荒れが激しい。	
〃	14	〃	甕	9.4	(8.3)			チャートの小礫、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい黄褐色。頸部外面強い横ナデ。口縁部内面指頭圧痕。	底部に黒斑。
〃	15	〃	壺	23.0	(5.2)			チャート、結晶片岩、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。口縁部外面横ナデ。内面指頭圧痕を顕著に認める。口唇部は面をなす。	
〃	16	〃	壺	23.4	(5.9)			チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。明黄橙色。口縁部内外面横ナデ。口唇部強い横ナデをし下端をつまみ出す。頸部外面縦ハケ。	
〃	17	〃	甕	14.4	(3.8)			チャートの粗粒砂を含む。灰黄褐色。口縁部外面強い横ナデ。肩部縦ハケ。内面横ナデ。口唇部に強い横ナデをし下端部をつまみ出す。肩部にヘラ状原体の圧痕が残る。	
〃	18	〃	甕	14.4	(4.3)			チャートの小礫～粗粒砂を含む。橙色。口縁部内外面強い横ナデ。胴部縦ハケ。	
〃	19	〃	甕	14.0	(4.2)			チャートの粗粒砂を多く含み赤色風化礫をわずかに含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。口縁部内外面横ナデ。口唇部横ナデ。	外面煤ける。
〃	20	〃	甕	14.6	(4.1)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄橙色。口縁部内外面横ナデ。口唇部横ナデで拡張しわずかに下垂する。	外面煤ける。
〃	21	〃	甕	15.2	(4.9)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面強い横ナデ＋縦ハケ。口唇部上端部をわずかにつまみ出し横ナデ。内面指頭圧痕。	外面煤ける。
〃	22	〃	甕	16.1	(5.8)			チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。外面横ナデか。内面横ナデ痕顕著。器表の荒れが激しい。	胴部に黒斑。口縁部煤ける。
〃	23	〃	甕	15.4	(6.4)			チャート、頁岩の小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。頸部に強い横ナデ、口縁部ヘラ状原体の圧痕がわずかに残る。内外面器表の荒れが激しい。	
〃	24	〃	甕	12.8	(12.5)			チャートの小礫、粗粒砂を含む。明黄橙色。外面ハケ＋ナデ。内面ナデ、指頭圧痕あり。口唇部上方にわずかにつまみ出し、横ナデ。	胴部に黒斑。
〃	25	〃	甕	16.0	(10.8)			チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面縦ハケ＋ナデ。内面削り＋ナデ。口唇部強い横ナデで面をなし一部下垂する。	
〃	26	〃	高杯	16.0	(2.3)			チャートの細粗粒～粗粒砂を多く含む。明黄橙色。内面ナデか。屈曲部はするどい稜を有する。内外面器表の荒れが激しい。	
〃	27	〃	高杯	18.4	(2.0)			チャートその他の粗粒を含む。口縁部外面に横ナデ風の凹線文２条を有する。口縁部内面横ナデ。	
〃	28	〃	高杯	19.4	(3.1)			チャート。雲母の細粗粒砂を含む。にぶい褐灰色。内外面、口唇部横ハケ。屈曲部は強い稜を有する。	
〃	29	〃	高杯	23.1	(3.3)			チャートの細粗粒砂を含む。明黄橙色。外面横ナデで屈曲部は稜を有する。内面ヘラ磨き。	口縁部に黒斑。
〃	30	〃	高杯	24.3	(3.1)			チャートの細粗粒砂を含む。にぶい黄褐色。外面強い横ナデ、屈曲部は稜を有する。口唇部横ナデで面を取る。	口縁部黒斑。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器　種	法　量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特　徴	備　考
107	31	ST 11	高杯	28.0	(5.6)			チャートの細粗粒～粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面横ナデで屈曲部は稜を有する。	口縁部に黒斑。
〃	32	〃	高杯脚		(4.5)			チャートの細粗粒砂を含む。明赤褐色。杯底部に直径3㎜程度の刺突痕あり。脚上部内面に搾り目顕著。	
〃	33	〃	高杯	24.3	(2.7)			チャートの細粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面横ナデ。内面横ナデ＋横ヘラ磨き。	
〃	34	〃	高杯脚		(4.9)			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を多く含む。明橙色。外面ナデ。内面ハケか。	
108	35	〃	高杯脚		(6.0)			チャート、赤色風化礫を含む。明橙色。外面縦方向にハケ。脚上部内面に搾り目。	
〃	36	〃	高杯脚		(7.3)			チャートの細粗粒砂を多く含む。にぶい黄褐色。外面縦方向にヘラ磨き。内面横方向にハケ。器表の剝離が激しい。	
〃	37	〃	高杯脚		(1.8)		9.0	チャートの細粗粒砂を含む。橙色。外面強い横ナデ。内面ヘラ削り（左←右方向）。口唇部強い横ナデの後上端をつまみ出し、2条の凹線文を認める。	
〃	38	〃	高杯脚		(2.8)		15.0	チャートの細粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ヘラ磨き。脚部に径7～8㎜の小孔。	
〃	39	〃	高杯脚		(3.6)		12.8	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面縦ハケがわずかに残る。内外面器表の荒れが激しい。	
〃	40	〃	高杯脚		(4.2)		13.4	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面ヘラ磨き＋ナデ。裾部に径4～6㎜の小孔。	
〃	41	〃	高杯脚		(1.8)		18.6	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。裾端部外面強い横ナデ。内面ナデ。	
〃	42	〃	高杯脚		(1.7)		14.7	チャートの細粗粒砂を含む。にぶい灰黄褐色。裾部外面横ナデ。脚部外面縦ヘラ磨き。	
〃	43	〃	鉢	17.0	(6.5)			チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい黄褐色。外面叩き＋ナデ。内面ナデ。	外面被熱赤変。
〃	44	〃	鉢	27.4	(6.3)			チャートの粗粒砂、細粗粒砂を含む。明黄橙色。内外面ハケ。口唇部面取り。器表の荒れが激しい。	胴部に黒斑。
〃	45	〃	甕底部		(5.0)		5.3	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい桃色。内外面ナデ。内面指頭圧痕。	外面被熱赤変。
〃	46	〃	甕底部		(3.2)		6.2	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含み、結晶片岩の小礫を少し含む。明黄橙色。外面横ナデ。上げ底。	
〃	47	〃	底部		(2.7)		5.7	チャートの細粗粒砂を含む。灰茶褐色。外面に縦ハケ。内面削り＋ナデ。	
〃	48	〃	底部		(2.5)		10.2	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。内外面ナデ。	外面被熱赤変。
〃	49	〃	底部		(5.6)		6.5	チャートの粗粒砂を含む。明黄褐色。外面ハケ＋ナデ。内面ナデ。	
〃	50	〃	底部		(6.5)		6.0	チャートの小礫を含む。にぶい橙色。外面ナデ。内面ヘラ削り＋ナデ。	底部に黒斑。
〃	51	〃	底部		(5.9)		7.6	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄褐色。外面縦ハケ後ナデ。内面ナデ。	底部に黒斑。
〃	52	〃	底部		(6.2)		7.9	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面ナデ。底部内面指頭圧痕。	
〃	53	〃	底部		(15.8)	19.3	5.7	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。橙色。胴部内外面ハケ。	
110	60	SK 35	壺		(6.2)			チャートの小礫粗粒砂を多く含む。橙色。外面ハケ＋ヘラ磨き。口縁部内面付近にハケ。以下指ナデ。	
〃	61	〃	壺	14.5	(6.9)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内外器表の荒れが激しい。	外面全面煤けるが口縁、胴部外面が激しい。
〃	62	〃	甕	16.3	(5.0)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面縦ハケ。内面ナデ。口縁部内外面横ナデ。口唇部強い横ナデで拡張。	口縁部、胴部外面煤ける。
〃	63	〃	甕	16.9	(4.4)			チャートの細粗粒砂を多く含む。黄褐色。胴部外面縦ハケ。内面ヘラ削り＋ナデ。口縁部内外横方向ナデ。	
〃	64	〃	甕		(19.1)		8.8	チャートの粗粒砂を極めて多く含む。明黄色。外面わずかにハケ痕残る。内外面器表の荒れが激しく、剝離も激しい。	
〃	65	〃	器台		(4.0)		13.6	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。灰黄色。内外ナデか。	
〃	66	〃	底部		(4.2)		6.6	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。器表の荒れが激しい。	
〃	67	〃	高杯	24.9	(3.3)			チャートの粗粒砂を含む。黒褐色。外面横ナデ＋ヘラ磨き。屈曲部は稜をなす。口唇部下端を強い横ナデで拡張し面を取る。	
〃	68	〃	高杯	28.9	(4.0)			チャートの粗粒砂を多く含む。黄茶色。口唇部はつまみ出して横ナデ。全面器表剝離。	
〃	69	〃	底部		(5.4)		5.9	チャートの小礫～粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ナデ。内面ハケ＋ナデ。ハケ状原体の圧痕あり。	
111	72	SK 36	壺	13.1	(6.5)			チャート、頁岩の粗粒砂を多く含む。暗茶色。口唇部強い面取り。器表の荒れが激しい。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
111	73	SK 36	甕	12.7	(4.0)			チャートの粗粒砂、赤色風化礫を含む。黄褐色。胴部内面頸部直下より左←右にヘラ削り＋ナデ。内外面器表の荒れが激しい。	口縁部、胴部外面煤ける。
〃	74	〃	甕	15.1	(6.4)			チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。黄褐色。口縁部内外横ナデ。口唇部面取り。胴部外面縦ハケ、内面上胴部以下、下→上方向のヘラ削り＋ナデ。	口唇部、胴部外面煤ける。
〃	75	〃	壺	10.6	(9.1)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。口唇部面取り。内外器表の荒れが激しい。	外面、被熱赤変。
〃	76	〃	甕	14.4	(9.2)			チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。黄褐色。内面胴上部、左←右方向の荒いヘラ削り、中位、下→上のヘラ削り。口唇部面取り、内面わずかにつまみ上げ。外面器表の荒れが激しい。	胴部外面に大きな黒斑。口唇部、胴部煤けと、被熱赤変。
〃	77	〃	甕	15.7	(7.2)			チャートの小礫、粗粒砂を含む。黄茶色。口縁部内外面横ナデ。胴部内面ヘラ削り（右⇔左）。外面ナデか。	外面及び口縁部内面煤ける。
〃	78	〃	高杯	31.8	(7.7)			チャート、頁岩の粗粒砂を多く含む。橙色。屈曲部は弱い稜をなす。脚部との接合部で剝離。内外面器表の荒れが激しく調整不明。	
〃	79	〃	高杯脚		(5.1)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。柱状部外面縦ヘラ磨き。内面左←右のヘラ削り。接合部で剝離。	
〃	80	〃	甕底部		(4.2)		5.1	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。黄褐色。外面叩きの後ナデ。内面ナデ、指頭圧痕。底部つまみ出し。上げ底。	底部被熱赤変。
〃	81	SK 37	土師器杯	12.9	(2.9)			赤色風化礫、チャートの細粗粒砂をわずかに含む。橙色。内外面回転ナデ跡顕著。	
〃	82	〃	須恵器甕	18.8	(9.4)			チャート、黒色粒砂をわずかに含む。灰色。胴部外面叩きの後わずかにすり消す。内面青海波文をわずかにすり消す。頸部内外面横ナデ。口唇部強い横ナデで拡張。	
112	83	SK 38	甕	16.0	(8.4)			チャートの粒砂を多く含む。橙色。外面叩き＋ナデ。叩き目はほとんど消えている。胴部内面ヘラ削り。口縁部内外横ナデ。	口縁部、胴部外面煤ける。
〃	84	〃	高杯脚		(5.8)			チャートの細粗粒砂、雲母を含む。明黄色。充填部下方から径5㎜の刺突あり。外面は縦ヘラ磨きであったと思うが、摩耗のため単位を認めることができない。	
119	85	SD 51	壺	14.0	(4.9)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面ハケ＋横ナデ。内面ナデ。口縁部横ナデ。口唇部強い横ナデで面を取る。	
〃	86	〃	底部		(5.0)		3.5	チャートの小礫～粗粒砂を含み、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。内面底部に指頭圧痕顕著。器表の荒れが激しい。	
〃	87	〃	壺	16.1	(4.2)			チャートの粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい黄橙～暗灰黄色。外面横ナデか。内面ヘラ調整がわずかに残る。口唇部強い横ナデで面を取る。器表の荒れが激しい。	外面煤ける。
〃	88	〃	高杯脚		(6.7)			チャートの小礫～粗粒砂を多く含み、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ヘラ磨きをしたかもしれないが剝離が激しく認められない。径8㎜程の小孔を2つ認める。杯との接合部で剝離。	
〃	89	〃	底部		(15.0)	14.4	3.8	チャートの小礫～粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面縦ハケ＋叩き。内面ナデ。	裾部に黒斑。
〃	90	〃	壺	16.5	(6.7)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面摩耗が激しいが頸部ハケの痕跡を残す。内面指頭圧痕顕著。口唇部面を取る。	
〃	91	〃	底部		(6.7)		7.0	チャートの小礫～細粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。黄灰色。外面縦ハケ＋ナデ。内面ナデ。上げ底風。	外面被熱赤変。
120	92	SD 52	甕	16.1	(8.5)			チャートの粗粒砂を多く含む。黄褐色。内面横ナデか。器表の荒れが激しい。	
123	93	SD 54	壺	17.0	(2.9)			チャートの小礫を多く含む。灰黒色。内面横ハケ。口縁部に幅1.5㎝、厚さ0.5㎝の粘土帯を貼付け、列点文を有する。器表の荒れが激しい。	
〃	94	〃	甕	16.0	(4.1)			チャートの小礫を多く含み、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい黄褐色。内外面横ナデ。外面頸部指頭圧痕顕著。口唇部横ナデしわずかに拡張。	
〃	95	〃	壺	12.0	(10.6)			チャートの粗粒砂を含み、赤色風化礫の細粗粒砂を少量含む。にぶい黄橙色。外面縦ハケ後横ナデ。内面横ナデ、指頭圧痕顕著。内面頸部搾り目。口縁部横ナデ。口唇部上方につまみ上げ強い横ナデで面を取る。	
〃	96	〃	壺	13.2	(8.0)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面縦ハケ＋横ナデ。	
〃	97	〃	甕	16.0	(15.1)			チャートの粗粒砂を多く含み赤色風化礫を少量含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。頸部強い横ナデ。口唇部横ナデし拡張。	胴部外面煤ける。No. 119と同一個体か。
〃	98	〃	甕	15.4	(13.1)			チャートの粗粒砂を多く含む。オリーブ黒色。口唇部面を取る。器表の荒れが激しい。	
〃	99	〃	高杯		(4.7)			チャートの粗粒砂を多く含み、火山ガラスの細粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面縦、斜めにハケ＋ヘラ磨き。内面横ナデ。稜部に幅0.5㎝程の粘土帯を貼付け強く横ナデ。稜部上下とも強い横ナデ。	外面大きな黒斑。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
123	100	SD 54	底部		(10.7)		5.8	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい褐色。内面ナデ。器表の荒れが激しい。	外面煤ける。
〃	101	〃	鉢	8.1	7.1		2.3	チャートの粗粒砂を含み赤色風化礫の細粗粒砂を含む。明黄橙色。外面横ナデ＋縦ハケ。内面ナデ痕。口縁部ナデ。	胴部に黒斑。
〃	102	〃	甕底部		(4.7)		4.7	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面ナデ。内面横ナデ。底部つまみ出すように上げ底。	底端部、被熱赤変。
〃	103	〃	底部		(4.2)		7.5	チャートの粗粒砂を多く含み、赤色風化礫の細粗粒砂を少量含む。灰褐色。器表の荒れが激しい。	底部に被熱赤変。
〃	104	〃	底部		(16.6)		6.3	チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。底部内面指頭圧痕。	外面煤ける。底部被熱赤変。No. 220と同一個体の可能性あり。
〃	105	〃	底部		(14.3)		6.6	チャートの粗粒砂を多く含み、赤色風化礫の細粗粒砂を少量含む。赤褐色。外面縦ハケ。底部外側につまみ出し横ナデ。	
124	106	SD 55	壺	11.2	(3.4)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄色。外面縦ハケ。口縁部に2条の凹線文を有する。内面に指頭圧痕。	
〃	107	〃	壺	13.6	(5.1)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。内外面横ナデか。口唇部横ナデで面取り。頸部内面指頭圧痕顕著。	
〃	108	〃	壺	13.9	(6.2)			チャートの粗粒砂を含む。明黄橙色。外面横ナデ。内面縦ナデ。口縁部横ナデ。口唇部強い横ナデで面取り。	
〃	109	〃	壺	12.2	(5.5)			チャートの粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。外面縦ハケ。内面横ハケ。口縁部横ナデ。口唇部ハケで面をとる。	
〃	110	〃	壺	12.0	(4.8)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面横ナデ。口唇部下にわずかに拡張し面をなす。	
〃	111	〃	壺	12.7	(5.9)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。口縁部内外面横ナデ。器表の荒れが激しい。	
〃	112	〃	壺	14.1	(6.4)			チャートの粗粒砂を含む。明黄橙色。外面横ナデ。口縁端部内面のみ横ハケ。	
〃	113	〃	壺	14.0	(5.7)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。ハケ状原体の圧痕らしきものが残る。口縁部内面ハケ。頸部内面ナデ。口唇部は面をなす。	
〃	114	〃	壺	6.9	(9.5)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。内面ナデ。内面搾り目と接合痕顕著。	
〃	115	〃	壺	12.0	(9.5)			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。内外面ナデ。指頭圧痕顕著。器表の荒れが激しい。	
〃	116	〃	壺	12.4	(9.3)			チャートの小礫～粗粒砂を含み、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面縦ハケ、口縁部横ナデ。内面ハケ＋ナデ、指頭圧痕多数。口唇部強い横ナデで下に拡張。接合痕顕著。	
〃	117	〃	壺	12.3	(9.4)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面縦ハケ、口縁部横ナデ。内面横ハケ、頸部下に指頭圧痕顕著、口唇部ハケ。	
〃	118	〃	壺	14.4	(3.2)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面横ナデ＋縦ハケ。肥厚した口縁。	
〃	119	〃	壺	16.7	(3.2)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄灰色。内面ハケ後ナデ。	口縁部に黒斑。
〃	120	〃	壺		(5.1)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい褐色。断面三角形の突帯を3条貼付けた後強いナデ。内面ナデ。	
〃	121	〃	壺	20.8	(2.4)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内外面横ナデか。口縁部はわずかに肥厚する。口唇部上につまみ上げ横ナデ。器表の荒れが激しい。	
〃	122	〃	壺	14.4	(5.4)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ヒビ割れ状の亀裂。幅1.5cm前後の貼付口縁で口唇部を強く横ナデする。頸部内面下に指頭圧痕顕著。器表の荒れが激しい。	外面煤ける。
〃	123	〃	壺	14.9	(10.4)			チャートの粗粒砂を含む。暗灰黄色。外面、上←下方向のハケ。内面指頭圧痕。口唇部は面をなす。器表の荒れが激しい。	
〃	124	〃	壺	18.4	(4.0)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。内外面横ナデ。口唇部強い横ナデで拡張。	
〃	125	〃	壺	16.5	(4.8)			チャートの粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。外面縦ハケ。内面右下がりのハケ＋横ナデ。口唇部下にわずかに拡張し面をなす。	
〃	126	〃	壺	17.0	(4.6)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。口唇部は面をなす。器表の荒れが激しい。	
〃	127	〃	壺	15.0	(10.0)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄色。胴部外面叩き＋ハケ後ハケ状原体で列点文を入れる。内面ナデ。口唇部強い横ナデで下垂し面をなす。列点文がわずかに残る。	胴部に黒斑。
〃	128	〃	壺	12.2	(11.0)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面上←下方向にハケ、胴部に叩き、肩部に上→下方向に撫でた接合痕。口縁部ハケ。内面ナデ。頸部内面に多数の指頭圧痕顕著。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
124	129	SD 55	壺	16.4	(6.9)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。口縁部外面縦ハケがわずかに残る。内面横ナデ。口唇部強い横ナデで下端部を拡張。器表の荒れが激しい。	
〃	130	〃	壺	16.2	(10.2)			チャートの小礫を多く含む。橙色。外面頸部ハケ後ヘラ磨き。口縁部縦ハケ。内面剝離が激しい。	
〃	131	〃	壺	16.0	(9.9)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。内面ナデ、ハケ状原体の圧痕が顕著に残る。器表の荒れが激しい。	
〃	132	〃	壺	12.1	(14.7)			チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。橙色。外面頸部縦ハケ、肩部にハケ状原体の列点文を有する。内面ナデ＋横ハケ。口唇部は面をなす。器表の荒れが激しい。	
〃	133	〃	壺	22.6	(9.3)			チャート、赤色風化礫の小礫を含む。明黄橙色。内面ナデか。口唇部凹線文風。器表の荒れが激しい。	
〃	134	〃	壺		(12.5)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ハケ状原体の圧痕が残る。肩部木目の粗いハケ。内面ナデ。指頭圧痕、接合痕顕著。	胴部煤ける。
125	135	〃	壺		(7.2)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明橙色。外面縦ハケ＋横ナデ。断面が三角形の貼付突帯を２条有する。	
〃	136	〃	壺	18.2	(11.8)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄色。外面縦ハケ、頸部に横ナデ痕と列点文を有する。内面横ハケ＋横ナデ。頸部内面指頭圧痕顕著。口唇部横ナデし面を取る。	
〃	137	〃	壺	10.4	28.8	14.2	4.6	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面縦ハケ＋ヘラ磨き。肩部ハケ状原体の圧痕が多数残る。内面ハケ、底部に指頭圧痕顕著。上げ底風。	外面肩部に黒斑、胴下半部周りが帯状に煤ける。胴底部被熱赤変。
〃	138	〃	壺	11.1	25.4	17.7	5.2	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ハケ。内面頸部指頭圧痕。底部内面ハケ状原体の圧痕。器表の荒れが激しい。	胴部周りが帯状に煤ける。底部に黒斑。
〃	139	〃	甕	9.5	(4.2)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙黄色。外面ナデ。内面ハケ＋ナデ、搾り目と指頭圧痕あり。口唇部強い横ナデで面を取る。	
〃	140	〃	甕	13.6	(4.6)			チャートの粗粒砂を多く含む。明黄色。内面ハケ＋ナデ。外面指頭圧痕。器表の荒れが激しい。	外面煤ける。
〃	141	〃	甕	19.0	(3.1)			チャート、赤色風化礫の小礫～細粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。内外面ナデ。口唇部強い横ナデで面取り。	外面煤ける。
〃	142	〃	甕	15.0	(2.5)			チャートの粗粒砂を少量含む。にぶい黄褐色。内外面横ナデ。口縁部内面ヘラ磨き。口唇部上下に拡張し２条の凹線文を有する。器表に炭化物が付着。	外面煤ける。
〃	143	〃	甕	15.2	(5.0)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面叩き＋ハケ後ナデ。口唇部強い横ナデで上下に拡張、その後口縁部横ナデ。器表の荒れが激しい。	外面煤ける。
〃	144	〃	甕	15.1	(4.0)			チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面縦ハケ。口縁部内外面強い横ナデ。口唇部強い横ナデで上下にわずかに拡張。	
〃	145	〃	壺	14.2	(4.8)			チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。橙色。外面横ナデ、ハケ状原体の圧痕が残る。内面ナデ。口縁部幅１㎝程わずかに膨らむ。口唇部強い横ナデで下に拡張。器表の荒れが激しい。	
〃	146	〃	甕	15.0	(6.6)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面ハケ＋ナデ。内面ヘラ削り＋ナデ。	
〃	147	〃	甕	17.1	(3.9)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面横ナデ。口唇部強い横ナデで下端部は下垂し２条の凹線文がわずかに残る。器表の荒れが激しい。	
〃	148	〃	甕	17.0	(5.0)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面ナデ。内面頸部下左→右の削り。口唇部強い横ナデで拡張し沈線化した凹線文を２条有する。	外面煤ける。
〃	149	〃	壺	15.2	(4.3)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面ハケ＋横ナデ。内面横ハケ。口唇部強い横ナデで下に拡張。	外面煤ける。
〃	150	〃	甕	15.8	(6.1)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄褐色。外面縦ハケ、頸部強い横ナデ。口縁部横ナデしわずかに肥厚。内面ナデ。口唇部横ナデ。	外面煤ける。
〃	151	〃	甕	17.1	(4.4)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面横ハケ。内面頸部下部左←右方向にヘラ削り。口唇部強い横ナデで下端部を拡張。	
〃	152	〃	壺	15.1	(7.5)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面縦ハケ。口縁部～頸部内面横ハケ。胴部内面指頭圧痕。器表の荒れが激しい。	
〃	153	〃	甕	12.8	(10.7)			チャートの粗粒砂を含む。橙黄色。外面叩き＋ハケ、叩きは頸部にしか見られない。内面ハケ。指頭圧痕、接合痕顕著。口唇部面取り。器表の荒れが激しい。	
〃	154	〃	甕	21.6	(5.7)			チャートの小礫～粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。内面横ナデ。口唇部強い横ナデで面をとる。器表の荒れが激しい。	
〃	155	〃	甕	21.0	(6.8)			チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を含む。橙色。外面頸部にハケ、その後横ナデ。内面ハケ＋ナデ。接合痕あり。	胴部煤ける。

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
125	156	SD 55	甕	16.4	(7.7)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。黄橙色。外面叩き＋縦ハケ。口縁部横ナデ。内面横ナデ。頸部内面接合痕顕著。口唇部強い横ナデで拡張、下端部をつまみ出す。	外面煤ける。
〃	157	〃	甕	11.0	(8.5)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明橙色。外面縦ハケ。内面左←右方向のヘラ削り＋ハケ。口縁部外面強い横ナデ。	外面煤ける。
〃	158	〃	甕	14.9	18.3	14.3	5.1	チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。外面上半部叩き目、後に下半部下→上方向にハケ。頸部下→上へのナデ。口縁部丁寧な横ナデ。頸部縦ナデ痕顕著。口唇部ナデ。内面下→上方向にハケ調整。	
〃	159	〃	甕	13.7	15.2	14.5	4.6	チャートの小礫～粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ハケ＋ナデ。内面ヘラ削り＋ハケ＋ナデ。底部に指頭圧痕。	胴部外面煤ける。被熱赤変。胴部内面黒斑。
126	160	〃	甕	12.3	15.2	13.0	5.1	チャートの粗粒砂～小礫を含む。にぶい橙色。内外面ナデ＋ハケ。	外面煤ける。胴部に黒斑。
〃	161	〃	甕	18.6	(11.5)	18.8		チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄灰色。外面叩き＋ハケ。内面横ナデ＋ハケ。肩部内面は特に強い横ナデ。指頭圧痕顕著。口唇部強い横ナデ。	外面煤ける。
〃	162	〃	甕	23.0	(9.5)			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂～小礫を含む。明黄橙色。外面縦ハケ、頸部下部に列点文を有する。内面強い横ナデ＋横ハケ。頸部内面指頭圧痕。口縁部外面縦ハケ、内面横ハケ。口唇部強い横ナデで拡張。	
〃	163	〃	高杯脚		(4.4)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。内外面ナデ。	
〃	164	〃	甕	22.7	(11.7)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明橙色。外面強い横ナデ＋ハケ。内面ハケ＋ナデ。頸部内面接合痕顕著。	
〃	165	〃	甕	17.4	(14.3)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。外面ハケ＋横ナデ。内面横ナデ＋横ハケ。接合痕、指頭圧痕顕著。	外面煤ける。
〃	166	〃	高杯脚		(8.2)			チャート、赤色風化礫、泥岩の粗粒砂を含む。橙色。外面縦ヘラ磨き＋縦ハケ。内面ナデ。搾り目をナデ消す。指頭圧痕顕著。	
〃	167	〃	高杯脚		(6.7)			チャートの粗粒砂を少量含み、赤色風化礫の細粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面縦ハケ＋ナデ。内面縦ナデ痕顕著。製造時の指紋痕を認める。	
〃	168	〃	高杯脚		(5.9)			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を少量含む。にぶい橙色。外面縦方向にハケ＋ナデ＋ヘラ磨き。ハケ状原体の圧痕が残る。内面搾り目。径８～９㎜の小孔を外→内に２つ穿つ。選練された胎土。丁寧なつくり。	
〃	169	〃	高杯脚		(4.2)		12.6	チャートの細粗粒砂を少量含む。橙色。外面縦ハケ＋横ナデ。内面横ハケ＋横ナデ。裾部に小孔を穿つ。	裾部に黒斑。
〃	170	〃	高杯脚		(7.2)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面縦ハケ。内面ナデ。脚部に充填痕顕著。器表の剝離が激しい。	
〃	171	〃	高杯脚		(11.8)			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。脚部に充填痕。内外面観察不可能。	
〃	172	〃	高杯脚		(8.9)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を少量含む。明黄橙色。外面ヘラ磨き。ハケ痕わずかに残る。内面搾り目。指頭圧痕顕著。裾部に小孔。	
〃	173	〃	高杯脚		(9.8)		16.2	チャート、赤色風化礫、泥岩の粗粒砂を含む。橙色。内外面ハケ＋ナデ、一部にヘラ磨き。端部強い横ナデをしつまみ出す。接合部で剝離。	
〃	174	〃	高杯脚		(7.1)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。外面縦ナデ＋縦ハケ。内面縦ナデ。搾り目を有する。	脚部被熱赤変。
〃	175	〃	高杯脚		(7.5)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を少量含む。にぶい黄橙色。外面縦ハケ。内面接合部付近横ナデ、以下縦ナデ＋ハケ。	脚上部に黒斑。
〃	176	〃	高杯	26.0	(9.3)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。内外面ヘラ磨き＋横ナデ。口縁部つまみ出し後、強い横ナデで鋭い稜を有する。分割形成。脚部との接合部で剝離。	
〃	177	〃	高杯	26.0	(2.5)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄橙色。内面ハケ＋横ナデ。口唇部面とり。	
〃	178	〃	高杯	24.6	(2.2)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面ヘラ磨きがわずかに残る。体部の屈曲部は稜をなす。内面ヘラ磨き。口唇部強い横ナデで面をなす。	
〃	179	〃	高杯	31.0	(6.9)			チャートの粗粒砂、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。橙色。口縁部外面凹線文風の凹を有する。強い横ナデ。内面屈曲部ヘラ磨き、他ナデ。外面屈曲部は稜をなす。接合部で剝離。	
〃	180	〃	高杯	27.8	(2.6)			チャートの粗粒砂を含む。明黄白色。体部に稜を有する。器表の荒れが激しい。	
〃	181	〃	高杯	28.6	(3.6)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面横ナデ。屈曲部は稜をなす。口縁部に１条の凹線文風の凹を有する。	
〃	182	〃	高杯		(5.3)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面縦方向のヘラ磨き＋ハケ。内面ヘラ磨き。屈曲部で上部と剝離。接合部は横ナデ。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
126	183	SD 55	鉢	31.2	(14.0)			チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面縦ハケ＋ヘラ磨き。内面ヘラ磨き＋ナデ。口縁部横ナデ。口唇部強い横ナデで面をなす。	外面に大きな黒斑。
127	184	〃	鉢	21.6	(6.6)			チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。内面指頭圧痕。器表の荒れが激しい。	
〃	185	〃	甕底部		(4.2)		5.2	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面上←下のハケ、その後底部周縁つまみ出す。内面ナデ。底部つまみ出し時の指頭圧痕及び指紋が顕著に残る。	
〃	186	〃	底部		(3.8)		6.6	チャートの粗粒砂を含む。黄色。外面ハケ。	
〃	187	〃	底部		(4.3)		5.8	チャートの粗粒砂を含む。橙色。外面ナデ＋ヘラ磨きがわずかに残る。内面上←下方向のヘラ削り。	
〃	188	〃	底部		(4.8)		5.2	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。黄灰色。外面叩き＋ハケ。	
〃	189	〃	底部		(3.7)		2.2	チャートの粗粒砂を含む。灰黄色。底部外面指頭圧痕。	
〃	190	〃	甕底部		(5.3)		5.5	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を含む。橙色。内面上←下方向のヘラ削り。内外面指頭圧痕顕著。上げ底。器表の荒れが激しい。	外面煤け、被熱赤変。
〃	191	〃	甕底部		(2.0)		5.5	チャートの粗粒砂を含む。灰黄色。外面ハケ。上げ底。	
〃	192	〃	甕底部		(3.2)		5.1	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄色。外面横ナデ。内面ヘラ削り。上げ底。	底部に黒斑。
〃	193	〃	底部		(5.4)		7.4	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面ナデ＋ハケ。内面器表の荒れが激しい。	
〃	194	〃	底部		(5.0)		8.2	チャートの小礫を多く含む。橙色。外面ハケ痕をわずかに認める。器表の荒れが激しい。	
〃	195	〃	甕底部		(5.6)		6.4	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい黄褐色。内面上←下のヘラ削り＋ナデ。底部指頭圧痕。底部つまみ出し、上げ底。	
〃	196	〃	底部		(6.0)		6.6	チャート、泥岩の粗粒砂を含む。黄褐色。外面ハケ。内面ナデ。	底部に黒斑。
〃	197	〃	底部		(6.2)		8.3	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄褐色。外面ハケ。内面ナデ。	内面底部に黒斑。
〃	198	〃	底部		(7.3)		4.4	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ナデ。内面ヘラ削り＋ナデ。内面接合痕、指頭圧痕。	
〃	199	〃	底部		(6.6)		5.6	チャートの小礫をわずかに含む。にぶい灰黄色。外面ヘラ磨きの跡が残る。内面ナデ、選練された胎土。上げ底風。	
〃	200	〃	底部		(9.0)		5.4	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄色。外面縦ハケ。内面縦ナデ。上げ底風。	胴底部煤けと被熱赤変。
〃	201	〃	底部		(5.4)		8.4	チャートの粗粒砂を含む。褐色。外面削り。内面ヘラ状原体を縦にし、横方向に削り調整。その圧痕が顕著。	
〃	202	〃	底部		(5.7)		5.1	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面底部のみ叩き。胴部ハケ。内面ハケ。	
〃	203	〃	底部		(9.0)		5.6	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を含む。黄色。外面ハケ。内面ナデ。上げ底風。器表の荒れが激しい。	内面底部周縁煤ける。
〃	204	〃	甕底部		(4.8)		7.8	チャートの粗粒砂を含む。明黄橙色。外面叩き＋ナデ。ナデ痕、指頭圧痕顕著。内面ナデ。上げ底。	
〃	205	〃	底部		(7.2)		6.6	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面ハケ。内面木目の荒いハケ。外面胴部に炭化物付着。	
〃	206	〃	底部		(6.9)		10.0	チャート、泥岩の小礫～粗粒砂を含む。橙色。外面ナデか。内面剝離が激しく観察不能。上げ底風。器表の荒れが激しい。	
〃	207	〃	底部		(7.3)		8.0	チャートの粗粒砂をわずかに含む。にぶい黄橙色。外面ハケ＋ナデ。内面ナデ。外面底部に指頭圧痕。	
〃	208	〃	底部		(8.3)		5.1	チャート、赤色風化礫を含む。にぶい黄橙色。内外面ハケ。	
〃	209	〃	胴部		(9.0)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面叩きの後丁寧なナデ。内面下←上方向のナデ。	胴部に黒斑。
〃	210	〃	底部		(6.8)		8.2	チャートの粗粒砂を多く含む。にぶい橙色。外面縦ナデ。内面剝離が激しく観察不可能。上げ底風。	
〃	211	〃	底部		(9.2)		7.1	チャートの小礫を多く含む。にぶい橙色。外面木目の粗いハケ＋ナデ。内面ナデ。	
〃	212	〃	底部		(10.0)		8.2	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面縦ハケ＋横ナデ。底部に接合痕を認める。内面強い横ナデでナデ痕顕著。	底部に黒斑。
〃	213	〃	底部		(12.1)		7.6	チャート、赤色風化礫を多く含む。にぶい黄橙色。外面叩き＋ハケ。内面下→上の削り。	底部に黒斑。
〃	214	〃	底部		(9.7)		6.2	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内面ナデ。器表の荒れが激しい。内面に炭化物付着。	底部に被熱赤変、黒斑。
128	215	〃	甕底部		(10.3)	16.0	5.6	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。内外面ハケ。内面指頭圧痕顕著。上げ底。胴部外面炭化物付着。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
128	216	SD 55	底部		(13.7)	16.7	6.8	チャートの粗粒砂を多く含む。明黄色。底部内面ナデ。指頭圧痕顕著。上げ底風。器表の荒れが激しい。	胴部に黒斑。
〃	217	〃	底部		(10.8)		7.0	チャートの小礫～粗粒砂を多く含む。明赤褐色。外面叩き＋ハケ。内面ナデ。器表の荒れが激しい。	
〃	218	〃	底部		(8.4)		10.8	チャートの粗粒砂を含む。明黄色。外面ハケ＋強いナデ、指頭圧痕。内面剝離が激しく観察不可能。	
〃	219	〃	底部		(12.6)		6.6	チャートの小礫、粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面叩き＋ハケ＋ナデ。内面ハケ後ナデ。底部内面製造時の指頭圧痕と指紋が顕著に残る。	
〃	220	〃	底部		(9.4)		7.6	チャートの粗粒砂を多く含む。明黄色。内面指頭圧痕。器表の荒れが激しい。	底部に黒斑。
〃	221	〃	底部		(6.7)		8.2	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄橙色。外面縦ハケ。内面剝離が激しい。	底部に黒斑。
130	223	SX 10	壺	12.4	(4.0)			チャート、砂岩の粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面縦ハケ。口縁部内面横ハケ。頸部ナデ。	
〃	224	〃	甕	14.3	(1.8)			チャートの小礫、粗粒砂を含む。灰褐色。内外面丁寧な横ナデ。口唇部面をなす。	
〃	225	〃	壺	16.0	(2.8)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。外面横ナデか。口唇部に幅1㎝程の凸帯を有する。器表の荒れが激しい。	
〃	226	〃	壺		(10.4)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。橙色。内面指ナデ、頸部付近搾り目。頸部外面縦ハケ。胴部外面叩き＋ハケ。外面摩耗。	
〃	227	〃	壺		(8.8)			チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面縦ハケ。内面頸部下端に左←右の削り。口縁部内面横ハケ＋ナデ。	内外煤ける。
〃	228	〃	甕	19.3	(7.8)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄橙色。内外面ナデ。	
〃	229	〃	壺	24.1	(4.5)			チャートの粗粒を多く含む。橙色。頸部外面ヘラ状原体による圧痕。口縁は断面三角の粘土帯を貼付、口唇に2条の弱い凹線。	
〃	230	〃	高杯	20.2	(4.6)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。杯底部外面ヘラ磨き、内面器表の荒れが激しい。口縁部内外面横ナデ。屈曲部稜をなす。	
〃	231	〃	高杯	32.5	(3.4)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明黄橙色。内外面ナデ。口唇部は面をなす。屈曲部は稜をなす。	口縁部外面に黒斑。
〃	232	〃	高杯		(2.2)		25.9	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を含む。明黄橙色。器表の荒れが激しい。	
〃	233	〃	高杯		(5.1)		30.6	チャート、赤色風化礫の小礫を含む。明黄橙色。屈曲部は稜をなす。器表の荒れが激しい。	
131	234	〃	高杯		(5.6)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。接合部ナデるも接合痕顕著。	
〃	235	〃	高杯脚		(4.2)		16.3	チャートの小礫、粗粒砂を含む。橙色。外面ハケ。脚端部は上下につまみ出し3条の凹線を有する。器表の荒れが激しい。	
〃	236	〃	高杯		(6.8)		31.4	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を多く含む。外面ハケ＋ナデ。屈曲部は強い横ナデでするどい稜をなす。内面横ナデ。器表の剝離が激しい。	内面黒斑。
〃	237	〃	高杯脚		(8.2)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。搾り目顕著。器表の荒れが激しい。	
〃	238	〃	底部		(10.0)		7.5	チャートの粗粒砂を含む。黄灰色。外面叩き。内面上←下方向のヘラ削り＋ナデ。上げ底風。	
132	241	SX 11	壺	6.2	(7.3)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明黄橙色。内面接合痕顕著。	
〃	242	〃	甕	15.8	(5.1)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面ハケ状原体の圧痕が残る。口唇部わずかにつまみ上げ横ナデ。	外面煤ける。No.245と同一個体か。
〃	243	〃	壺	17.0	(4.1)			チャートの粗粒砂を含む。灰黄褐色。外面横ナデ。内面横ハケ。口唇部2条の沈線化した凹線文が入る。	
133	244	〃	壺	14.0	(5.9)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明橙色。外面ハケ。口唇部上下につまみ出し横ナデで拡張し、径3㎜程の刺突が施される。	
〃	245	〃	甕	17.0	(5.1)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄橙色。外面頸部にハケ状原体の圧痕。口縁部内外面強い横ナデ。口唇部は面をなす。	外面煤ける。No.242と同一か。
〃	246	〃	甕	13.8	(13.3)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。外面叩きわずかに残る。頸部に指頭圧痕とハケ。内面ナデ。口縁部内外面強い横ナデ。口唇部強い横ナデで拡張。	外面煤ける。
〃	247	〃	高杯	25.0	(3.3)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。明黄橙色。内面横ナデ。口唇部端部短く外反する。	
〃	248	〃	高杯脚		(8.6)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄橙色。内外面ナデ。内面はナデの圧痕が残る。接合部で剝離。	
〃	249	〃	高杯		(8.3)		26.8	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。接合部で剝離。器表の荒れが激しい。	

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径	器高	胴径	底径	特徴	備考
133	250	SX 11	高杯脚		(4.1)		14.7	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。内外面横ナデ。内面わずかにハケが残る。口唇部は2条の凹線を有する。	
〃	251	〃	甕	20.0	(11.2)			チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。外面胴部ハケ。頸部より上強い横ナデ。内面左←右方向にナデ。口唇部横ナデで面をなす。外面器表の剝離が激しい。	外面煤ける。
〃	252	〃	高杯脚		(1.9)		16.0	チャートの粗粒砂を含む。にぶい橙色。器表の荒れが激しく観察不可能。	
〃	253	〃	高杯脚		(6.3)		18.8	チャートの粗粒～細粗粒砂を含む。灰黄色。外面ナデ。口縁部強い横ナデ。裾部に径1㎝程の小孔を穿つ。	外面裾部に黒斑。
〃	254	〃	高杯脚		(8.7)		13.1	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。橙色。外面ナデか。裾部は強い横ナデ。内面搾り目あり。接合部で剝離。器表の剝離が激しい。	外面被熱赤変。
〃	255	〃	甕底部		(5.2)		7.6	チャートの粗粒砂を多く含む。橙色。外面叩き後ナデ。内面ナデ。上げ底。	底部に黒斑。
〃	256	〃	甕底部		(7.6)		5.0	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。内面ナデ。底部は端部をつまみ出し、上げ底。器表の荒れが激しい。	
〃	257	〃	胴部		(14.7)			チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄色。外面叩き＋ハケがわずかに残る。器表の剝離が激しい。	胴下部に黒斑。
〃	258	〃	底部		(7.5)		4.9	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を含む。明黄灰色。外面縦ハケ＋ナデ。内面ナデ。上げ底風。	底部に黒斑。
〃	259	〃	底部		(7.9)		6.4	チャートの粗粒砂を含む。にぶい黄橙色。外面叩き。内面上←下方向のヘラ削り。	
〃	260	〃	甕底部		(10.4)		5.6	チャート、赤色風化礫の粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。外面ナデ。内面上←下方向のヘラ削り。上げ底。	外面煤ける。
〃	261	〃	底部		(17.0)		6.6	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を含む。明黄灰色。外面叩きとハケがわずかに残る。内面下→上方向に石は動いているが調整は不明。器表の剝離が激しい。	底部に黒斑。
〃	262	〃	底部		(17.4)		11.1	チャート、赤色風化礫の小礫～粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面ハケ。内面器表の剝離が激しく観察不可能。	胴部に黒斑。
134	263	包含層	須恵器壺底部		(2.7)		8.7	精選された胎土に黒色細粗粒砂を含む。灰色。内面強い横ナデ。外面左→右に横ナデし磨く。高台部は強い横ナデ。内面底部と外面胴下部～高台に自然釉。	
〃	264	〃	甕	18.4	(6.8)			チャート、赤色風化礫を含む。橙色。口縁部外面横ナデ。器表の荒れが激しい。	
〃	265	〃	須恵器蓋	18.0	(1.6)			長石、黒色細粗粒砂をわずかに含む。灰色。内外面横ナデ。口縁部強く横ナデし端部下に稜を有する。精選された胎土。	
〃	266	〃	土師器皿	16.8	2.5		14.6	砂粒をほとんど含まない。にぶい黄橙色。口縁部端部を内側に折り曲げる。内外面ともに器表の荒れが激しい。	内面に黒斑。
〃	267	〃	土師器高杯脚		(6.4)			チャート、赤色風化礫の細粗粒砂を含む。にぶい橙色。内外面丁寧な横ナデ。精選された胎土。	
〃	268	〃	須恵器壺	17.2	(6.4)			長石、チャートの粗粒砂、黒色粗粒砂を含む。灰色。外面横ナデ＋叩き。内面頸部より上は横ナデし、下は同心円文状の当具痕。口唇部横ナデで下垂し面をなす。	
〃	269	〃	須恵器蓋		(0.9)		25.4	長石、黒色粗粒砂を含む。灰色。内外面横ナデ。口唇部強く横ナデし端部下に稜を有する。精選された胎土。	
〃	270	〃	高杯	28.9	(3.6)			チャートの細粗粒砂を含む。橙色。外面横ナデ。指頭圧痕顕著。強い稜を有する。内面横ナデ＋横ハケ。口唇部下端部をつまみ出し強い横ナデで拡張し面をなす。	
〃	271	〃	高杯脚		(6.6)		15.0	チャート、赤色風化礫の粗粒～細粗粒砂を多く含む。明黄橙色。外面裾部横ナデ。裾部に直径7～8㎜の小孔2個認める。	裾部に黒斑。
〃	272	〃	須恵器鉢	22.0	(6.1)			チャートと泥岩の細粒砂を含む。灰白色。内外面横ナデ。口唇部横ナデし内面わずかにつまみ上げる。	
〃	273	〃	高杯脚		(3.9)		24.0	チャートの細粒砂～粗粗粒を含む。橙色。内面左←右方向のヘラ削り。外面横ナデ、裾部に4条の凹線文を認める。裾端部は拡張し上部、下部につまみ出し3条の凹線文を有する。	
〃	274	〃	須恵器甕		(7.3)			黒色細粗粒砂を含む。灰白色。頸部口縁部外面格子状叩きの後強い横ナデ。頸部内面は同心円文状のあて具痕。	
〃	275	表採	須恵器甕		(5.6)			チャート、黒色細粗粒砂を含む。灰白色。頸部口縁部外面、格子状叩きの後強い横ナデ。頸部内面同心円文状の当具痕。	

遺物観察表（石器）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量（cm） 全長	全幅	全厚	重量（g）	材質	特徴
108	54	ST 11	石鏃	2.0	0.8	0.4	0.9	サヌカイト	片方の主面に自然を残す。平基式。刃部両面から調整剥離。
〃	55	〃	石鏃	3.5	1.7	0.4	3.3	サヌカイト	わずかに凹基。両面に主剥離面を残すが、断面三角を程す。片方の主面刃部の調整剥離が大きくなっている。
〃	56	〃	石鏃	4.6	1.0	0.4	1.9	頁岩	身からゆるやかに茎部に移行。最大幅身中位に有す。身断面ひし形。基部断面、不整六角形。
110	71	SK 35	砥石	9.2	7.5	4.7	588.0	石英粗面岩	使用は２面。
128	222	SD 55	石包丁	8.0	4.4	1.3	59.9	頁岩	一方の主面に自然面を残す。両側縁に弱い抉り。刃部の調整剥離なし。
131	239	SX 10	石包丁	5.3	7.7	1.2	64.2	頁岩	両長側縁自然剥離。短側縁の一方に抉り、片方は直線的。残る一方にせんこう具による半円孔。（一端は欠損の可能性あり）各調整は両面より行う。背部はわずかに内湾ぎみ。刃部はわずかに外湾する。
〃	240	〃	石包丁	10.2	5.1	1.1	59.7	頁岩	一方の主面に自然面を残す。一方の側縁が欠損。刃部に調整剥離はみられない。
134	276	包含層	刃器	4.5	9.2	0.9	43.0	サヌカイト	長側縁の一端に、片方から押圧によって刃部をつくり出している。
〃	277	〃	石包丁	9.9	4.5	1.1	63.4	頁岩	両端に抉り。背部敲打。刃部にコーングロス。

遺物観察表（金属器）

Fig. No.	挿図番号	出土地点	器種	法量（cm）	特徴
108	57	ST 11	鉈	現存長 約3.0 身幅 約1.6 厚み 約0.25	断面三日月状を呈す。刃部の背面には鎬がみられる。サビの付着により身の厚みは２倍近くに膨れ上がっている。
〃	58-a	〃	鉄鏃	全長 4.9 鏃身 幅 1.8 厚み〈推定〉 0.3前後 長さ 約3.2 茎部推定 幅 0.5前後 厚み 0.4前後 長さ 2.7	錆化が著しく、鏃身の厚みが２倍以上に膨らんでいる。鏃身から茎にかけて変換点がある（縦断面）。茎の横断面形は、ほぼ正方形に近いものと思われるが、若干平面側が幅のある横長の長方形になるように思われる。
〃	58-b	〃	青銅製品	現存長 2.5 幅 0.9 厚み 0.44	折損。全面に研磨によるとみられる面を持つ。
〃	59	〃	袋状鉄斧	全長 11.1 刃幅 3.7 袋幅 3.1 最小幅 2.5	鉄板の厚みは錆ぶくれにより8.5cm～1.2cm程になっているが、観察し得る側面部の厚みより約0.4cm～0.6cm程度であったと推測される。袋部を展開すると端部で約７cm、腰部で約６cmとなる。
110	70	SK 35	鉈	全長 錆含む 11.1 推定 10.9 基部幅 最小部推定 1.2 最大部推定 1.4 刃部幅 1.2 厚み 基部〈推定〉 0.3 刃部〈推定〉 0.2	側面形は、刃部が先端へ向かうに従って次第に反っている。基部、刃部ともにウラスキは見られなく、木質や繊維質のものも見られない。全体的に錆化が著しい。

第Ⅴ章　考　　察

1．下ノ坪遺跡の弥生後期土器と集落

出　原　恵　三

1　はじめに

下ノ坪遺跡の弥生集落は、3万m²以上の広がりを有するものと考えられる。今次調査は、水路と農道部分を主な対象として約6,000m²の発掘調査を実施した。この調査は、各調査区の位置からして、集落址内に東西7本、南北1本のトレンチを入れたことになる。その結果竪穴住居址15棟、土坑15基、溝、壺棺等を検出した。単純計算をすれば、各遺構ともにこの5倍以上の存在が考えられる。すでに既報告の『下ノ坪遺跡Ⅰ』[(1)]に示したように、弥生時代の遺構・遺物は、前期末・中期のものを極少量含むものの、そのほとんどは後期に属するものである。今回新たに報告したものも全く同様である。高知平野の弥生後期土器編年は、Ⅰ～Ⅲ期に大きく時期区分することができるが、下ノ坪遺跡の諸遺構は、後期の中でもⅠ・Ⅱ期に限定することができる。すなわち短期間に消長した集落遺跡と言うことができよう。このことは、弥生後期の諸遺構にほとんど切り合い関係が認められないことからも窺うことができる。短命な遺跡ではあるが、100点以上のガラス小玉や鉄器の出土、多量の搬入土器など重要な資料を数多く含んでいる。このような集落がⅢ期まで続かず、何故突然に終焉を迎えることになるのか、興味深い問題である。

ここでは、前回の報告で示し得なかったⅠ期の土器について触れた後、搬入土器の問題、集落の位置付けについて所見を述べるものである。

2　後期Ⅰ期の土器

Ⅰ期は後期初頭に位置付けることができる。Ⅰ期の特徴は、組成上の特徴として中期を通して存在した南四国独特の土佐型甕[(2)]の消失や西部地域からの搬入土器の欠如を挙げることができる。手法上の変化としては、壺・甕の口縁部に見られた粘度帯貼付手法の消失を指摘できよう[(3)]。一方、中期から継続する要素も認められる。すなわち、中期末（Ⅳ期）に至ると高知平野は凹線文や内面ヘラ削り、列点文など中部瀬戸内からの影響を強く受けるようになるが、この傾向はそのまま踏襲されている。しかし、中期末の中部瀬戸内系の土器胎土に見られた平均的な細かな砂粒の混入は認められない。内面ヘラ削りが頸部直下にまで及ぶ点も中期末には見られない特徴である。

下ノ坪遺跡では、今回報告したST 9・12とST 13出土の主要な土器を該当させることができる。

ST 9からは、広口壺、甕、鉢、高杯が出土している。甕（4）は、水平に近く折り曲げた口縁に凹線文を有し、内面は頸部直下にまでヘラ削りが施されている。5は「く」字状口縁の甕であるが、やはり頸部直下までヘラ削りがみられる。高杯は破片であるが、杯部が垂直に立ち上がるタイプであり、Ⅰ期に属するものである。

ST 12からは、壺5点と甕3点が見られる。壺は広口壺4点（56・57・59・61）と直口壺1点（62）が出土している。広口壺には刷毛状原体による列点文が多く見られ（56・57・59）、直口壺（62）と広口壺（59）の口縁部には凹線文が施されている。甕の1点（64）は小型甕である。小型甕は、

後期初頭の指標とされるものであり、これまで田村遺跡 Loc.34A の ST 4[(4)]や下ノ坪遺跡 ST 19から出土している。田村遺跡例は、内面ヘラ削りが丁寧になされているが、本例はかなり粗雑になされており、寧ろⅡ-1期とした下ノ坪遺跡 ST 19のものに近い。出土量は十分とは言えないが、壺：甕＝5：3で壺が多く長頸壺が出土していないことからⅠ期とした。

ST 13からは多量の土器が出土しており、明らかに混入と思われるものがあるが、多くはⅠ期の土器と見て良い。壺は、広口壺（72～78・84）、細頸壺（68・71）、直口壺（70）、段状壺（80）がある。図示し得なかったものも含めて33点出土しているが、この内13点に凹線文が認められる。バリエーションが多いことも中期末に直結する要素である。74・84に見られる断面三角突帯は、Ⅱ-1期のもの（前回報告の ST 15の36、ST 16の91）よりもしっかりしている。ただ67・68・84の口縁部は、粘土帯貼付手法が一部後期初頭まで残ることを示しており、今後注目していかなければならない。甕は24点のうち12点に凹線文が見られる。また89のように土佐型甕のようなタイプも1例ではあるが存在する。高杯は垂直口縁（102）と段部を有するタイプ（101）がある。この他、壺棺1・2もⅠ期に属する。これまでⅠ期の資料は、田村遺跡 Loc.34A の ST 4、同 Loc.44の ST 1[(5)]、同 Loc.49の ST 13[(6)]に求めてきたが、これらはすべて拠点集落の資料であり、周辺部では今回の例が初めてのものである。粘土帯貼付口縁部や土佐型タイプが認められたことは、土器型式の変化が拠点集落に比べて漸進的に行なわれていることを示す事例として注目しなければならない。

表8　竪穴住居出土の土器組成

遺構	壺	甕	鉢	高杯	他	計	時期
ST 5	11点(50.0)	8点(36.4)	2点(9.1)	1点(4.5)		22点	Ⅱ-1
ST 6	11点(47.8)	11点(47.8)		1点(4.3)		23点	Ⅱ
ST 7	6点(11.5)	38点(73.1)	4点(7.7)	3点(5.8)	1点(1.9)	52点	Ⅱ-1
ST 8	28点(30.8)	49点(53.8)	8点(8.8)	6点(6.6)		91点	Ⅱ-1
ST 9	7点(43.8)	7点(43.8)	2点(12.5)			16点	Ⅰ
ST 10	49点(35.3)	74点(53.2)	6点(4.3)	10点(7.2)		139点	Ⅱ-3
ST 11	52点(40.3)	59点(45.7)	3点(2.3)	15点(11.6)		129点	Ⅱ
ST 12	5点(62.5)	3点(37.5)				8点	Ⅰ
ST 13	33点(44.6)	32点(43.2)	7点(9.5)	2点(2.7)		74点	Ⅰ
ST 14	15点(26.3)	30点(52.6)	6点(10.5)	6点(10.5)		57点	Ⅱ-3
ST 15	60点(62.5)	21点(21.9)	4点(4.2)	11点(11.5)		96点	Ⅱ-1
ST 16	34点(44.7)	30点(39.5)	3点(3.9)	8点(10.5)	1点(1.3)	76点	Ⅱ-1
ST 17	13点(32.5)	21点(52.5)	1点(2.5)	4点(10.0)	1点(2.5)	40点	Ⅱ-1
ST 19	30点(31.6)	49点(51.6)	7点(7.4)	8点(8.4)	1点(1.0)	95点	Ⅱ-1

3　搬入土器について

『下ノ坪遺跡Ⅰ』でも触れたように、下ノ坪遺跡の後期Ⅱ-1期を中心とする遺構からは讃岐産の土器が出土している。当遺跡から物部川を隔てた西方5㎞の地点には、南四国最大の拠点的集落田村遺跡があるが、ここにおいても同様の現象が見られる。ここでは田村遺跡の土器も含めて搬入土器について若干の考察を試みるものである。これらの搬入土器は、彼我の交流や土器の時間的併行関係を知る上で重要な資料となることは言うまでもないが、それ以上に弥生時代社会の構造的変化に根差した歴史的意味があるのではないだろうか。

これらの搬入土器は、すべて高松平野のもので後期後半以降に特徴的な展開を示すことで著名になった下川津B類土器[7]と同様の特徴的な胎土を有するものである。最近、後期初頭に属するものとして上天神遺跡[8]等で多量に出土しており、『胎土1類』土器と呼ばれているものである[9]。角閃石を含んだ茶褐色の特徴的な胎土は、細片でも容易に識別可能である。『胎土1類』土器の生産については、「意図的な粘土・砂礫の選別ないしは調合の産物」、「単純に自然的要因によって決せられるのではなく、土器製作に当たって一定の規範を共有する[10]」との解釈がなされている。したがって『胎土1類』土器は、弥生土器の伝統的な製作とは異なった過程を採用したものであり、この点からも「プレB類土器」として位置付けられるべき性格の土器である。

下ノ坪遺跡からは、壺・甕・高杯が見られ図示し得たものは10点であるが、細片を含めると100点以上が出土している。これらのうちFig. 136に再掲載した9点は、すべて後期Ⅱ-1期の遺構出土のものであり、おおよそ上天神遺跡の後期初頭に併行関係を求めることができる。またF区集中1出土の長頸壺（Fig. 18-138 a, 138 b）は、明らかに時期が降り林・坊城遺跡SX 03[11]か空港跡地遺跡SK 01[12]等に時期比定されるものである。田村遺跡からは、壺1点、甕3点、高杯4点が確認されている（Fig. 135）。Loc.34Aの竪穴住居ST 4の甕（1・2）は後期Ⅰ期に、Loc.36Bの竪穴住居ST 1の高杯（6）は後期Ⅱ-1期に属するものである。また甕（3）、壺底部（4）、高杯（5・7・8）は、後期Ⅱ-1期の土器を多く包含したLoc.45の溝SD 1からの出土である。田村遺跡の例も形態的な特徴から上天神遺跡の後期初頭に併行関係を求めることができよう。以上のように両遺跡共に後期Ⅱ-1期を中心とする時期に高松平野からの搬入土器が認められる。これらの搬入土器は、全体から見れば極少量に過ぎないが、中期を通して認められなかった現象であり、当該期の土器のあり方の特徴として捉えることはできよう。高知平野から直線距離で200㎞、四国山地を隔てた高松平野の土器が、当該期に限って搬入される背景はなんであろうか。

高知平野の中心部においては、前期末頃から中期を通して、南四国西部（仁淀川以西）に分布の中心を持つと考えられる土器が、頻繁に出土している。通称「薄手式土器[13]」と呼ばれている西部の土器と、高知平野中心部の土器との正確な比率を把握するには至っていないが、竪穴住居址などからの出土で見ると多い時には2割程度が認められる。この土器の移動は、南四国と言う共有の地域空間の中で生じる土器を介した日常的な人や物の移動、いわば「地域完結型」の交流に伴った現象として位置付けることができよう。しかしながら、高松平野からの200㎞を隔てた土器の搬入は、日常的な交流の中から生じた現象としては捉え難い。勿論中期の南四国が孤立していたわけではなく、縄文時代以来、石器石材としてのサヌカイトは中期を通して瀬戸内側から入ってきているので

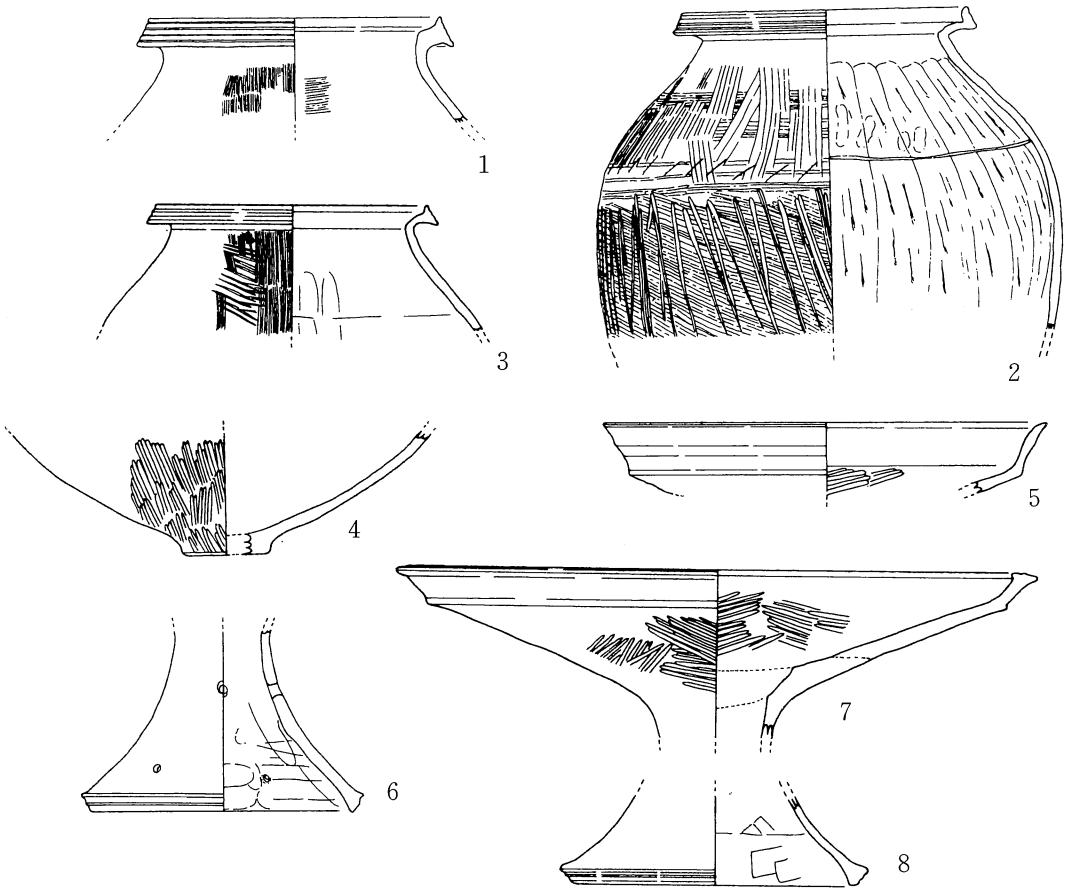


Fig. 135　田村遺跡出土の搬入土器
1・2（Loc. 34A ST 4）、3～5・7・8（Loc. 45 SD 1）、
6（Loc. 36B ST 1）S＝1/4

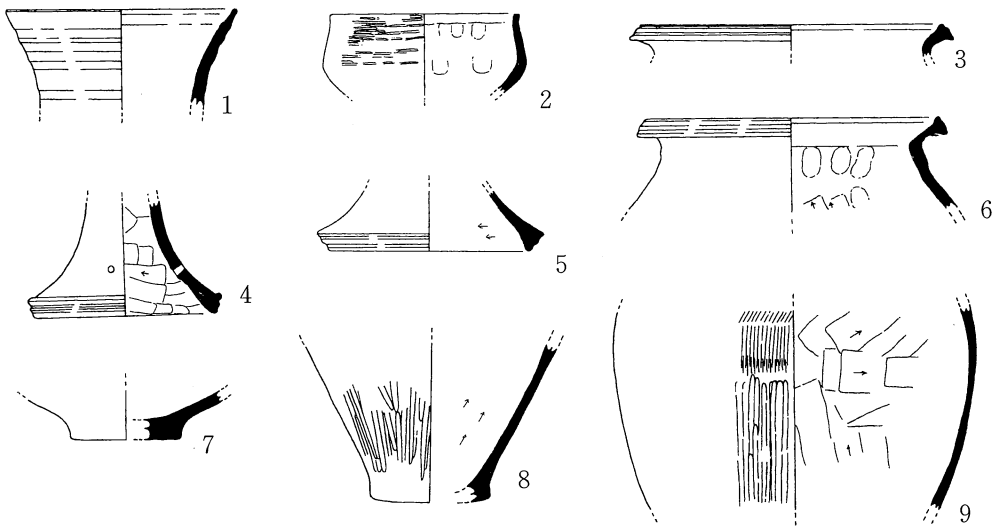


Fig. 136　『下ノ坪遺跡Ⅰ』報告の搬入土器
1・3・7（ST 16）、2（ST 7）、4・6（ST 15）、
5・8（ST 19）、9（SK 7）

ある。後期Ⅱ-1期を中心に見られる搬入土器は、日常的な交流を越えた彼我の関係の上に生じたものと見なければならないだろう。

遠隔地間の土器の移動は、弥生時代終末から古墳時代初めにかけて、下川津B類土器、東阿波型土器、吉備型甕、庄内甕などに見られる現象であり、その生産のあり方と移動は古墳時代社会の出現と密接に関係している。[14] 凹線紋土器の出現に象徴される中期後半・末は、西日本各地において集落遺跡が増加、その規模も拡大し、弥生時代社会の一大画期をなす時期である。中期前半の地域社会相互のバランスは大きく崩れ、再編成が進行していくなかで、政治的社会の新たな段階が到来したことが考えられる。しかしこの動向は、後期前半を頂点として再び地域性の濃厚な社会へと転じ、直線的に古墳時代へ進むことはない。古墳時代への飛躍は、倭国大乱を経なくてはならない。前述したように「胎土1類」土器の生産は、下川津B類のそれに通じる歴史的性格を有するものであり、その胎内に古墳時代的な生産関係を蔵している。「胎土1類」土器は、先に列挙した遠隔地移動型土器の先駆的形態、すなわち弥生後期初めにあって、古墳時代社会への胎動を告げる一つの現象として位置付けることができよう。

4　遺構

下ノ坪遺跡で検出した弥生時代の遺構は全て後期Ⅰ・Ⅱ期に属するものであり、その内訳は竪穴住居15棟、土坑16基、溝11条、壺棺墓2基、ピットである。これらの遺構の全てについて細かな時期比定をすることはできないが、可能な限り細分すると下のようになる。

後期Ⅰ期

　　竪穴住居：ST 9 ・12・13

　　壺棺墓：1 ・ 2

後期Ⅱ-1期

　　竪穴住居：ST 5 ・ 7 ・ 8 ・15・16・17・19

　　土坑：SK 7 ・10・11・35・36

後期Ⅱ-2期

　　土坑：SK 4 ・ 8 ・ 9 ・12

後期Ⅱ-3期

　　竪穴住居：ST 10・14

竪穴住居ST 11と溝の多くは、出土遺物から所属時期を細分することができない。後期Ⅱ期の中で捉えなければならない。以下遺構毎に考察を試みる。

①　竪穴住居

各調査区トレンチ状の調査であった為に、竪穴住居を完掘できたのはST 11のみである。従って規模や平面形態を正確に把握することは難しいが、調査部分から推定すると、平面形態は、円形7棟（ST 5 ・ 8 ・ 9 ・10・12・13・19）、楕円形3棟（ST 6 ・15・16）、隅丸方形2棟（14・17）、張出部を有するもの2棟（ST 7 ・11）の4種類からなる。床面積は、40㎡以上の大型が3棟（ST 8 ・10・11）、30㎡台の中型が5棟（ST 7 ・12・13・16・19）、20㎡台或いはそれ以下の小型が6棟（ST

5・6・9・14・15・17）である。高知平野の弥生前期から後期Ⅱ期までの竪穴住居址は、円形プランを基調とするが、中期に楕円形と隅丸方形プランのものが登場して、比較的小型の竪穴住居に採用される傾向がある。下ノ坪遺跡の諸例にもそのような傾向が窺われる。今回の調査で注目すべき竪穴住居は、張出部を有する2例である。ST 7は、円形住居の東側に0.6m×2mの張出部が設けられているが、その製作手法は特異である。すでに担当者が詳細に述べているように、張出部を竪穴住居床面よりも深く掘り下げ、その部分に床面形成の土とは異なる土で、版築状に固めテラス状に成形して、壁溝も巡らしている。一方、ST 11は、南側に0.4m×2.6mの台形状の張出部を持つ。張出部に壁溝は巡るが、床面は住居の高床部につながり、ST 7で見たような成形方法は採っていない。このような張出部を持つ竪穴住居の検出例は、南四国では初めてのことである。中期末に南九州で盛行する花弁型住居との関連があるのだろうか。出現の背景については今後の課題である。

それでは、張出部の機能はどのようなことが考えられるのであろうか。ST 7は、一般的な中型住居に属しているが、出土遺物としては他の住居から出土例のない石製の勾玉が床面出土している。このことから、司祭者的人物の住居であることを推測することが可能であり、祭祀関連の空間として理解することができるかもしれない。一方、ST 11は、大型住居であり、ガラス小玉80点や鉄斧の出土など他を抜きん出ており、特別な役割を果した住居であったことは想像に難くない。従って張出部を持った住居は、現状では一般的な住居とは性格を異にする特別な機能を有していたとすることができよう。

② 土坑

土坑は16基検出したが、出土遺物が少なく詳細な時期比定をすることのできないものも多い。平面形態もさまざまで、その機能を十分に明らかにすることはできないが、一つの傾向を指摘することはできる。それは、細長い溝状のプランを有する土坑が比較的多く見られることである。SK 4・5・6・12・35・36・37・38を類例として挙げることができる。これらの中には、遺物をほとんど含まないものもあるが、SK 4・5・35・36のように多量の遺物を含んでいるものもある。溝状土坑の規模は、最大のもので長さ5.7m、幅1.2m、深さ0.4m前後を測り、規模の小さなものでは、長さ2.8m、幅0.5m、深さ0.2mを測る。長軸断面は船底状、短軸断面はU字形を呈する。

このようなプランと遺物のあり方を示す例は、田村遺跡のLoc.45・49の中期後葉の集落址に多く見られる。後期に属する当集落は、田村遺跡の例を踏襲したものとして理解することができよう。ただ今回の溝状土坑には、竪穴住居との間に対応関係を求めることができるところに特徴がある。即ち両者は最短距離で1～2mの間隔を保って位置しており、一対の関係にあることを指摘できる。類例としてST 11とSK 35、ST 15とSK 12、ST 16とSK 5、ST 17とSK 11を挙げることができる。それぞれの両者の関係は時間的にも矛盾しない。なかでもST 11と対を為すSK 35は、鉈の優品と多量の土器が出土しており最もふさわしい対応関係を示している。これらの溝状土坑は、竪穴住居に付属した施設として理解することができよう。今後、田村遺跡等においても対応関係の追究が必要である。弥生時代前期初頭の集落には、田村遺跡や津島遺跡では掘立柱住居と並行する溝状土坑の存在が知られているが、同様の性格の遺構として位置付けることができよう。高知平野においては、中期前半を通して住居に付属した溝状土坑は認められなかったが、中期後葉に至って復活し後

期Ⅰ・Ⅱ期に採用されることが明らかとなった。

5　高知平野における弥生集落と下ノ坪遺跡

高知平野の弥生時代社会の展開は、前期初頭から後期に至るまで一貫して拠点集落として機能してきた田村遺跡とその周辺部の遺跡との関係として捉えることができる。下ノ坪遺跡が成立する後期Ⅰ・Ⅱ期は、田村遺跡がその規模を最も拡大し、竪穴住居の数も全体を通して最も多く営まれた時期である。すでに周知のように、田村遺跡は前期初頭に、松菊里型住居５棟、掘立柱建物十数棟で構成される集落として出発し、やがて環濠集落を形成するなど前期を通して拡大傾向を示す[15]。ところが中期を迎えると一端急速に衰微傾向を示し、中期前半（Ⅱ・Ⅲ期）には、竪穴住居６棟、土坑数基という小規模な状況に陥る。しかしながら凹線文土器が一般化し始める中期末（Ⅳ期）に至ると状況は一変し、俄に活況を呈するようになる。竪穴住居はⅣ期だけで15棟を数える。この背景には、在地における自生的発展だけでなく凹線文土器の浸透に見られるように、中部瀬戸内からの強力なインパクトがあったことは明白である。吉備を中心とした中部瀬戸内文化の浸透によって達成されたのである。この傾向は後期に入ってさらに加速され、集落の規模は益々拡大され、土器においては、すでに触れたように中期までの在地色を大きく払拭してしまう。後漢鏡片２点もこのような中で持ち込まれたものであろう。高松平野からの搬入土器は、新たな段階の到来を告げるものであった。

このような盛況期の中で、周辺部には下ノ坪遺跡や小籠遺跡[16]、東崎遺跡、岩村遺跡[17]、拝原遺跡[18]などが次々と登場し新たな集落が営まれるのである。これらの言わば後期新興集落は、下ノ坪遺跡で明らかとなったように、農・工具類の鉄器を保有していた。また溝状土坑に見られるように田村遺跡の特徴的な遺構も踏襲していたのである。後期Ⅰ・Ⅱ期の高知平野には、田村遺跡を核として周辺部に新興集落が展開するという地域社会の新たな構図が描かれ、さらに中部瀬戸内との強固な関係で結ばれていたのである。下ノ坪遺跡は、高知平野の弥生社会の盛行期に新興集落として登場し、遺跡の範囲から推定して75棟前後の竪穴住居を容していたのである。

しかしながら、後期Ⅲ期を待たずに下ノ坪遺跡は突然消滅し、田村遺跡もまた同様の運命を辿るのは何故か。このことを明らかにするには、下ノ坪遺跡の最後の状態を詳しく知る必要がある。下ノ坪遺跡は、古代の掘立柱建物が集中するＨ区の標高が最も高く南に下がるにつれて少しづつ低くなっている。Ｈ区の遺構検出面は、おおよそ標高11.6ｍであるが、南のＭ・Ｏ区は、11.2～11.3ｍであることによっても明らかであろう。これらの調査区の遺物包含層（Ｍ区）には砂礫、砂層、シルト層の堆積が見られ、竪穴住居址の埋土にも同様の傾向が見られる。このようなことから、西を流れる物部川の洪水に襲われ大きな打撃を被り、集落が廃絶されたものと思われる。一方の田村遺跡においても同様の状況証拠が認められる。Loc.45で検出した大溝ＳＤ１は、後期Ⅱ期を中心とした遺物が多く出土し、すでに見たように高松平野からの搬入土器が出土した遺構である。この溝は、田村遺跡の中で砂礫・砂で埋まっているほとんど唯一の溝である。これ以後、田村遺跡では新たに設けられた遺構は極僅少であり、集落が急速に衰退して行ったことを示している。高知平野では、後期Ⅱ期の段階に大規模な洪水が発生し、そのことによって平野部に展開していた集落が、壊滅的

な痛手を被ったことがわかる。今後、当該期の集落研究においてこのような事例が、どれだけ普遍化できるのか追究しなければならない。

比較的標高の高いところに立地していた新興集落は、後期Ⅲ期から古墳時代前期にかけて継続的に営まれる。また後期Ⅲ期に至って新たに多くの集落が登場するが、これらの集落の特徴は、洪積台地上に営まれる例が多いこと、田村遺跡のように拠点的な集落に成長する例が認められないことである。拙者は、かつて南四国に前期古墳が欠如する原因について、青銅祭器と土器生産のあり方から、弥生時代的な社会関係を最後まで保ち続けたことに求めた[19]が、社会的諸関係とともに高知平野の弥生社会の発展を頓挫させた自然災害にも、その要因の一つがあることを付け加えなければならない。

表9　高知平野における主要な弥生時代集落遺跡の消長

註)

1）小松大洋・出原恵三・池澤俊幸・行藤たけし『下ノ坪遺跡Ⅰ』高知県野市町教育委員会　1997年

2）出原恵三「『土佐型』甕の提唱とその意義」『遺跡』第32号 遺跡刊行会　1990年

3）出原恵三「南四国における弥生中期土器の展開」『遺跡』第31号 遺跡刊行会　1988年

4）廣田佳久「Loc.34A」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第４分冊 高知県教育委員会　1986年

5）出原恵三「Loc.44A」『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第３分冊 高知県教育委員会　1986年

6）出原恵三『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（山側進入灯設置区域）報告書 田村遺跡群 田中地区』高知県教育委員会　1986年

7）大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター　1990年

8）大久保徹也他『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第６冊 上天神遺跡』香川県埋蔵文化財研究会　1995年

9）森下友子「胎土１類土器について」『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第４冊 太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター　1990年

10）大久保徹也「上天神遺跡の『在地』土器と『搬入』土器」前掲８）

11）宮崎哲治『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第２冊 林・坊城遺跡』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター　1993年

12）森格也他『空港跡地遺跡発掘調査概報』香川県教育委員会・香川県埋蔵文化財調査センター　1992年

13）出原恵三「『薄手式土器』について」『南国史談』第７号　1989年

14）出原恵三「弥生から古墳へ ― 前期古墳空白地域の動向」『考古学研究』第40巻第２号 考古学研究会 1993年

15）出原恵三「初期農耕集落の構造」『考古学研究』第34巻第３号 考古学研究会　1987年

16）出原恵三「弥生時代から中世における小籠遺跡の変遷」『小籠遺跡Ⅲ』高知県文化財団埋蔵文化財センター　1997年

17）出原恵三「『川津』としての岩村遺跡」『岩村遺跡群Ⅱ』高知県南国市教育委員会　1997年

18）出原恵三『拝原遺跡』高知県香我美町教育委員会　1993年

19）14）に同じ

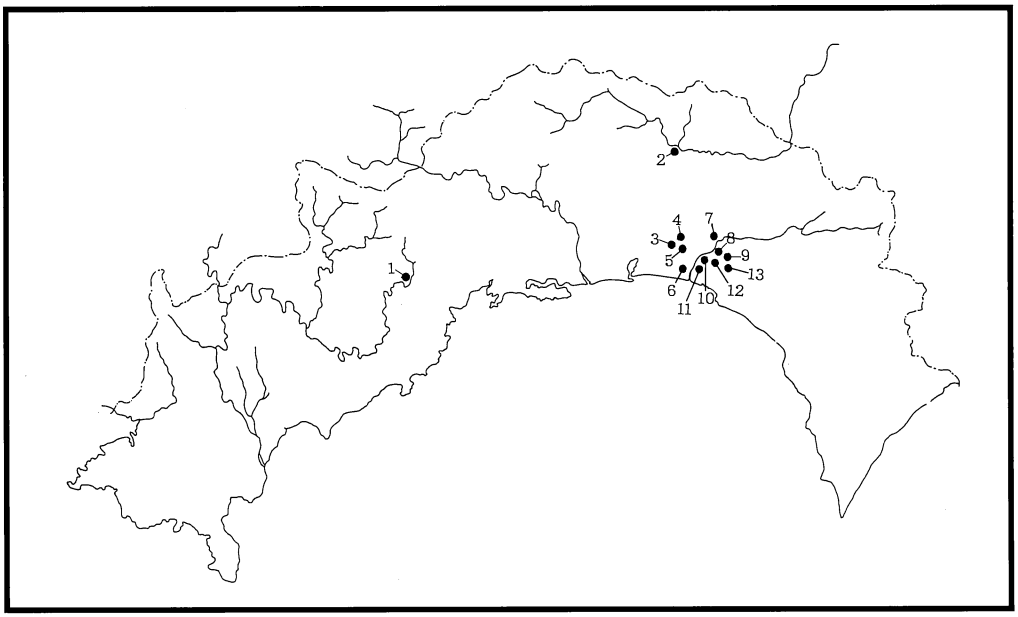
2．南四国における弥生時代の鉄器について

小　松　大　洋

(1)　はじめに

下ノ坪遺跡の調査では、弥生時代から古代の鉄器が多数出土しており、その中で弥生時代に属するものは７点を数える。一遺跡における出土点数としては、高知県下の弥生諸遺跡の中では比較的多い例に属する。県下の弥生時代に属する鉄器の出土点数は、管見の限りでは13遺跡82点にのぼるが、これまで鉄器についての本格的な検討はなされていない。すでに周知のように鉄器は革命的な生産用具として位置づけられており、特に鉄器が広く普及し始める弥生時代中期末以降は鉄器の入手が弥生社会の最大の関心事のひとつとなり、その入手や入手ルートの確保を巡っての動きが列島社会を政治的統合へと加速させる。本県においてもこの頃から集落の立地や規模、或いは土器組成に大きな変化が見られ、伝統的社会に地殻変動が生じていたであろうことが、最近の遺跡調査から窺うことができる。これらの変化の全てが鉄器の普及に原因することはないにしても、相当な影響を与えたものと考えられる。

ここでは、南四国における鉄器と弥生社会の関係を明らかにする前提として、県下出土の鉄器を集成し時期的な変遷や出土器種とその特徴などについて述べるものである。なお、後期の鉄器の時期比定については、出原恵三氏後期土器編年のⅠ期を前葉、Ⅱ期を中葉、Ⅲ期を後葉とする。



No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	宮野々遺跡	6	田村遺跡	11	下ノ坪遺跡
2	田畠遺跡	7	ひびのきサウジ遺跡	12	本村遺跡
3	小籠遺跡	8	林田遺跡	13	稗地遺跡
4	五軒屋敷遺跡	9	龍河洞遺跡		
5	東崎遺跡	10	深渕遺跡		

表10　鉄器の出土遺跡分布図

表11　弥生鉄器出土遺跡一覧表

遺　跡　名	市町村	出土点数	鉄器の種類と点数
宮野々遺跡	大野見村	7点	鉄鏃4、その他3
田畠遺跡	土佐町	1点	鉇1
小籠遺跡	南国市	4点	鉇2、鉄斧1、その他1
五軒屋敷遺跡	南国市	2点	鉄鏃1、その他1
東崎遺跡	南国市	20点	鉄鏃10、鉄鎌2、鉇2、鍬・鋤先2、その他4
田村遺跡	南国市	2点	鉄鏃1、鉄斧1
ひびのきサウジ遺跡	土佐山田町	3点	鉄鏃1、刀子1、鉇1
林田遺跡	土佐山田町	17点	鉄鏃14、鉇1、その他2
龍河洞遺跡	土佐山田町	2点	鉄鏃2
深渕遺跡	野市町	5点	鉇1、鉄釧2、その他2
下ノ坪遺跡	野市町	7点	鉄鏃3、鉇2、鉄斧1、摘鎌1
本村遺跡	野市町	3点	鉄鏃3
稗地遺跡	香我美町	9点	鉄鏃6、摘鎌1、その他2

表12　器種別一覧表

鉄器の器種	点数	出　土　遺　跡
鉄斧	3	小籠遺跡1、田村遺跡1、下ノ坪遺跡1
鉇	10	林田遺跡1、ひびのきサウジ遺跡1、小籠遺跡2、田畠遺跡1、東崎遺跡2、深渕遺跡1、下ノ坪遺跡2
鍬・鋤先	2	東崎遺跡2
鉄鎌	2	東崎遺跡2
摘鎌	2	下ノ坪遺跡1、稗地遺跡1
刀子	1	ひびのきサウジ遺跡1
鉄釧	2	深渕遺跡2、宮野々遺跡4、田村遺跡1、東崎遺跡10
鉄鏃	45	五軒屋敷遺跡1、稗地遺跡6、本村遺跡3、下ノ坪遺跡3、ひびのきサウジ遺跡1、林田遺跡1、龍河洞遺跡2
その他	15	林田遺跡2、小籠遺跡1、東崎遺跡4、深渕遺跡2、五軒屋敷遺跡1、宮野々遺跡3、稗地遺跡2
計	82	

(2)　工具

①　鉄斧

鉄斧は石器から鉄器への変換の中で、いち早く鉄器化した工具で、南四国においては板状鉄斧が1点（2）と袋状鉄斧が2点（1、3）の計3点が出土している。2は田村遺跡[1]の竪穴住居ST 18

から出土している。全体に錆化が著しく、刃部の形状はつかめないが全体の形状は把握することはできる。全長6.8㎝、全幅6.3㎝、厚さ0.3㎝、重さ280.0ｇを測る。後期中葉に属する。３は小籠遺跡[2]の竪穴住居ST 22から出土している。刃部の形状はいまひとつ明らかではないが袋部はよく残っている。袋部は密閉していない。残存長5.7㎝、袋部の幅1.6㎝、袋部の厚さ1.0㎝、鉄板の厚み0.1㎝、重さ9.9ｇを測る。後期後葉に属する。１は下ノ坪遺跡[3]の竪穴住居ST 11から出土しており、平面形は柄袋部から身にかけて肩を有し刃部は両刃である。全長11.1㎝、全幅3.7㎝、全厚0.5㎝、重さ99.9ｇを測る。後期中葉に属する。出土点数は少ない。

② 鉈

木工具である鉈は、南四国において小籠遺跡、東崎遺跡[4]、林田遺跡[5]、ひびのきサウジ遺跡[6]、田畠遺跡[7]、深渕遺跡[8]、下ノ坪遺跡の７遺跡より出土しており、出土数は10点を数え鉄器全体の12.1％を占める。初現は、現在のところ後期中葉でそれより古い例はない。もっとも早いものでは、下ノ坪遺跡の竪穴住居ST 11より１点（６）、同土坑のSK 35より１点（５）、深渕遺跡の竪穴住居ST３より１点（７）、小籠遺跡の竪穴住居ST 11床面より１点（４）の計４点を挙げることができる。これらは後期中葉に属する。４は刃部が断面三日月形の裏すきを有し、基部は断面長方形を呈す。刃部から茎端部にかけては徐々に細くなっており、全長14.2㎝、最大幅1.8㎝、厚さ0.5㎝、重さ29.4ｇを測る。完形品の中では南四国で最大である。

後期後葉に属するものは東崎遺跡の竪穴住居ST５より１点（８）、同トレンチTR３より１点(12)、田畠遺跡の竪穴住居ST１より１点（９）、ひびのきサウジ遺跡の竪穴住居ST９－Ｐ１より１点(10)、小籠遺跡の竪穴住居ST 22－Ｐ６より１点(11)、林田遺跡の竪穴住居ST２より１点(13)の計６点があげられる。

これらの形態的な特徴をみると完形品が少なく明確にはいえないが、残存部が刃部のみで身の確認できない６を除いては、全て身の断面は方形であり、裏すきがあるものは見られない。また、身は刃部から茎端部まで真っすぐに延びるタイプ（12、13）とやや幅を狭めるタイプ（４、５、７）がある。刃部については４、６、７、12、13に裏すきが、６、７、８については鎬が確認できる。10は刃部が欠損しているが、欠損部の断面は片丸を呈する。４、12の刃部はいわゆる鰻状をなし、10も欠損部にわずかな膨らみが確認できることから鰻状をなしていたものと推測される。また、これらの中で５のみは刃部から身にかけて断面が方形を呈し、幅もやや広く、他のものと比較すると若干様相が異なる。平面形は刃部のみを比較してみると、出土地点の同じである下ノ坪遺跡のST 11から出土した６と似ているが、裏すきは見られない。９は古墳時代初頭に属する可能性がある。

(3) 農具

① 鍬・鋤先

東崎遺跡の竪穴住居ST４とST５から１点づつ、計２点出土している。ST４出土の14は、全長4.4㎝、幅2.5㎝、厚さ0.3㎝、重さ10.2ｇを測り、全国例と比較すると小形である。ST５出土の15は、片方の折り返し部が欠損しており、刃部は外湾する。全長6.8㎝、幅4.1㎝、厚さ0.5㎝、重さ45.5ｇを測る。共に後期後葉に属する。

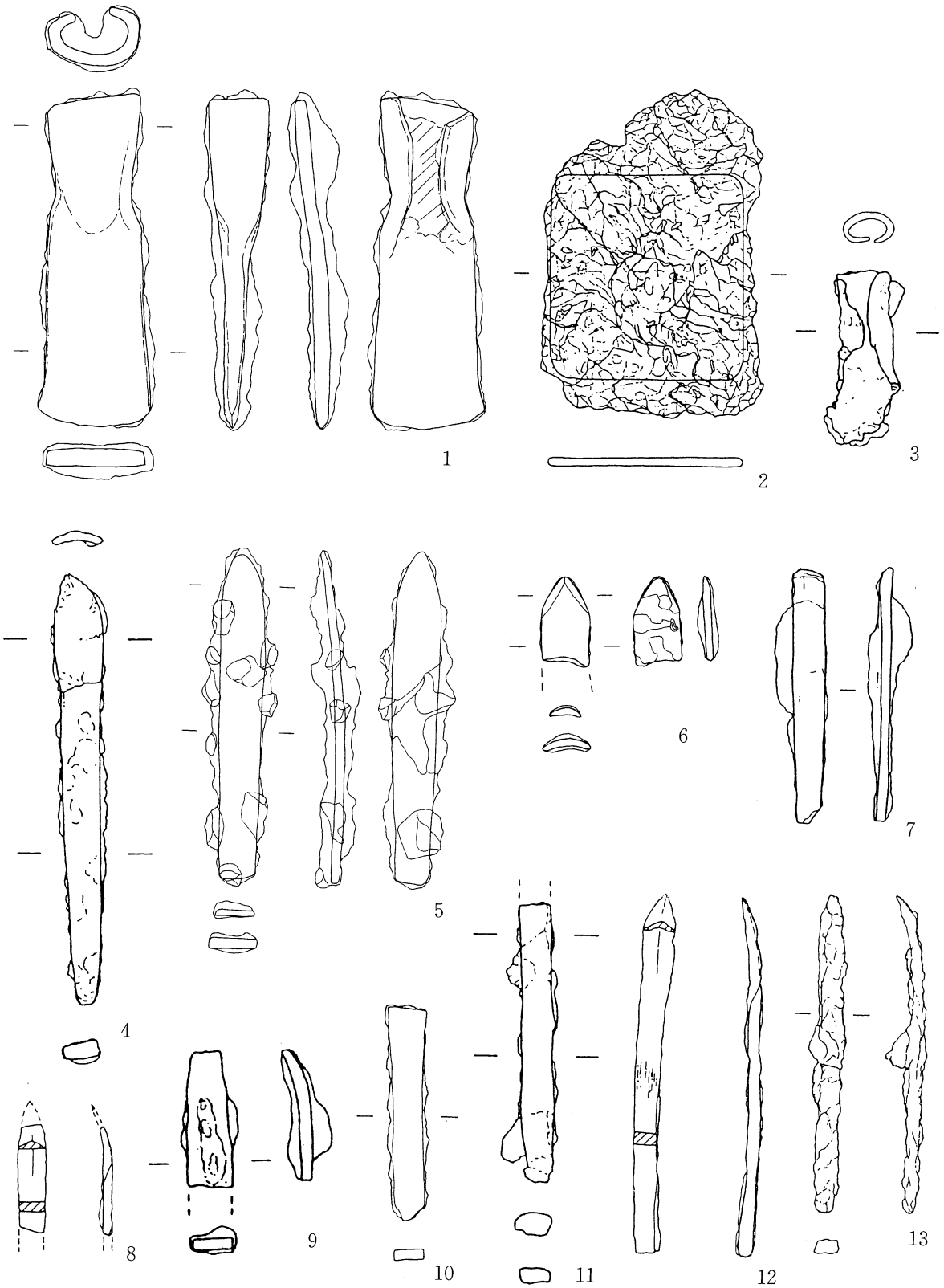


Fig. 137　鉄斧：1～3、鉇：4～13（S＝1/2）

② 鉄鎌

東崎遺跡の竪穴式住居ST４より１点（16）、同ST５より１点（17）の計２点が出土している。16は直角状で木柄の上半部の背面に溝を設け、基部を挟み込み、折り返しが横にずれないようにストッパーの機能を果たしている。17は折り返しが丸みを帯び「つ」の字状になっており、木柄に長方形の柄穴を設け、鎌を通して曲部を叩いて折り返しの先端を木柄に食い込ませ、木柄が抜けないように固定するようになっている（地獄止め）[9]。共に後期後葉に属する。

③ 摘鎌

稗地遺跡[10]の竪穴住居ST５から１点（19）、下ノ坪遺跡の包含層より１点（18）の計２点が出土している。19は後期後葉に属し、両端に折り返しが見られ、刃部はやや外反する。最大長7.4㎝、幅2.7㎝、厚さ0.3㎝、重さ30.6ｇを測る。18は全体に錆化が著しいが、原形はよくとどめている。全長8.3㎝、幅3.5㎝、厚さ0.3㎝、重さ39.1ｇを測る。刃部・背部はわずかに外湾し、折り返しはみられない。18は包含層からの出土で時期は不明確であるが、周辺の状況から見て後期中葉に属するものと思われる。

④ 刀子

ひびのきサウジ遺跡の竪穴住居ST８から１点（20）出土している。錆化が激しいが刃部がわずかに認められる。全長6.3㎝、全幅1.7㎝、厚さ0.4㎝、重さ8.6ｇを測る。後期後葉に属する。

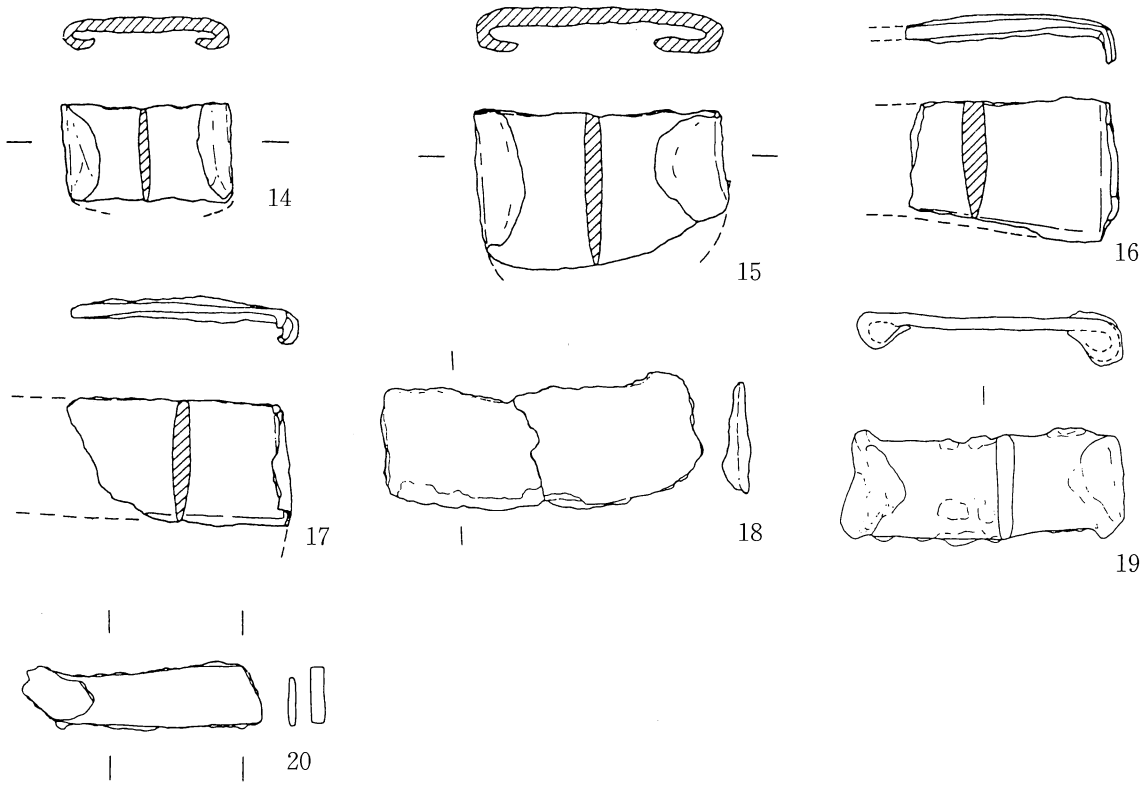


Fig. 138　鍬・鋤先：14・15、鉄鎌：16・17、摘鎌：18・19、刀子：20（S＝1/2）

(4) 武器

① 鉄鏃

鉄鏃の出土点数は45点であり、鉄器総点数の割合から見ると過半数を占める。遺跡別にみると林田遺跡14点、東崎遺跡10点、宮野々遺跡[11]4点、稗地遺跡6点、本村遺跡[12]3点、下ノ坪遺跡3点、龍河洞遺跡[13]2点、ひびのきサウジ遺跡1点、田村遺跡1点、五軒屋敷遺跡[14]1点となる。なお分類は、柳葉式と圭頭式は関のないものをa類、関が明瞭にとれるものをb類とする。

もっとも早いものは中期末に出現する本村遺跡の土坑SK2より2点（21、24）、同未確認遺構のSX1より1点（23）の計3点があげられる。3点はすべて無茎鏃であり、21は平基式、23は凹基式、24は尖基式である。

後期中葉に属するものは、下ノ坪遺跡の竪穴住居ST14より1点（27）、同ST11より1点（34）、同ST8より1点（38）の計3点、田村遺跡の竪穴住居ST14より1点（28）の計4点があげられる。これら4点はすべて柳葉式であり、28はa類、27、34、38はb類である。

後期後葉に属するものは、宮野々遺跡1区の竪穴住居ST1より3点（22、30、62）、同未確認遺構SXより1点（61）の計4点、東崎遺跡の竪穴住居ST1より3点（31、44、49）、同竪穴住居ST4より1点（46）、同竪穴住居ST5より3点（39、42、60）、同竪穴住居ST7より1点（48）、同竪穴住居ST8より2点（25、32）の計10点、五軒屋敷遺跡の竪穴住居ST1より1点（43）、稗地遺跡の竪穴住居ST3より5点（40、41、45、58、59）、同竪穴住居ST5より1点（63）の計6点、ひびのきサウジ遺跡の竪穴住居ST3より1点（50）、林田遺跡の竪穴住居ST2より11点（26、29、36、37、51、52、53、54、57、64、65）、同竪穴住居ST4床上より1点（33）、同トレンチより1点（56）の計14点、龍河洞遺跡の第1室より2点（35、47）の計45点である。この中で柳葉式a類は33、36、39、b類は27、31、32、34で、分類ができないものは25、26、29、30、37である。圭頭式はa類が46、47、50、51、52、53、54、b類は42、43、44、45、48、55、56、57で、分類できないものは40、41、49である。方頭式は58、59で、60、61、62、63、64、65は不明である。尚、65は鉋の可能性もある。

(5) 装身具

① 鉄釧

南四国において2点の出土例しかなく、2点（66、67）とも同一地点である深渕遺跡の竪穴住居ST3床面から出土している。通常大きさは腕輪としての機能を果たすため直径が7～8㎝のものが多いようであるが、66は全長11.3㎝であり円を作ると直径3.2㎝となるので半分程度欠損しているものと思われる。67も全長16.4㎝で同じことがいえる。両者とも後期中葉に属する。

(6) その他

69、70、76は棒状鉄製品、66、71、81はその先が細く尖っていることから針状鉄製品と思われる。その他は破片であったり、錆化が激しく形が不明瞭のため不明とする。

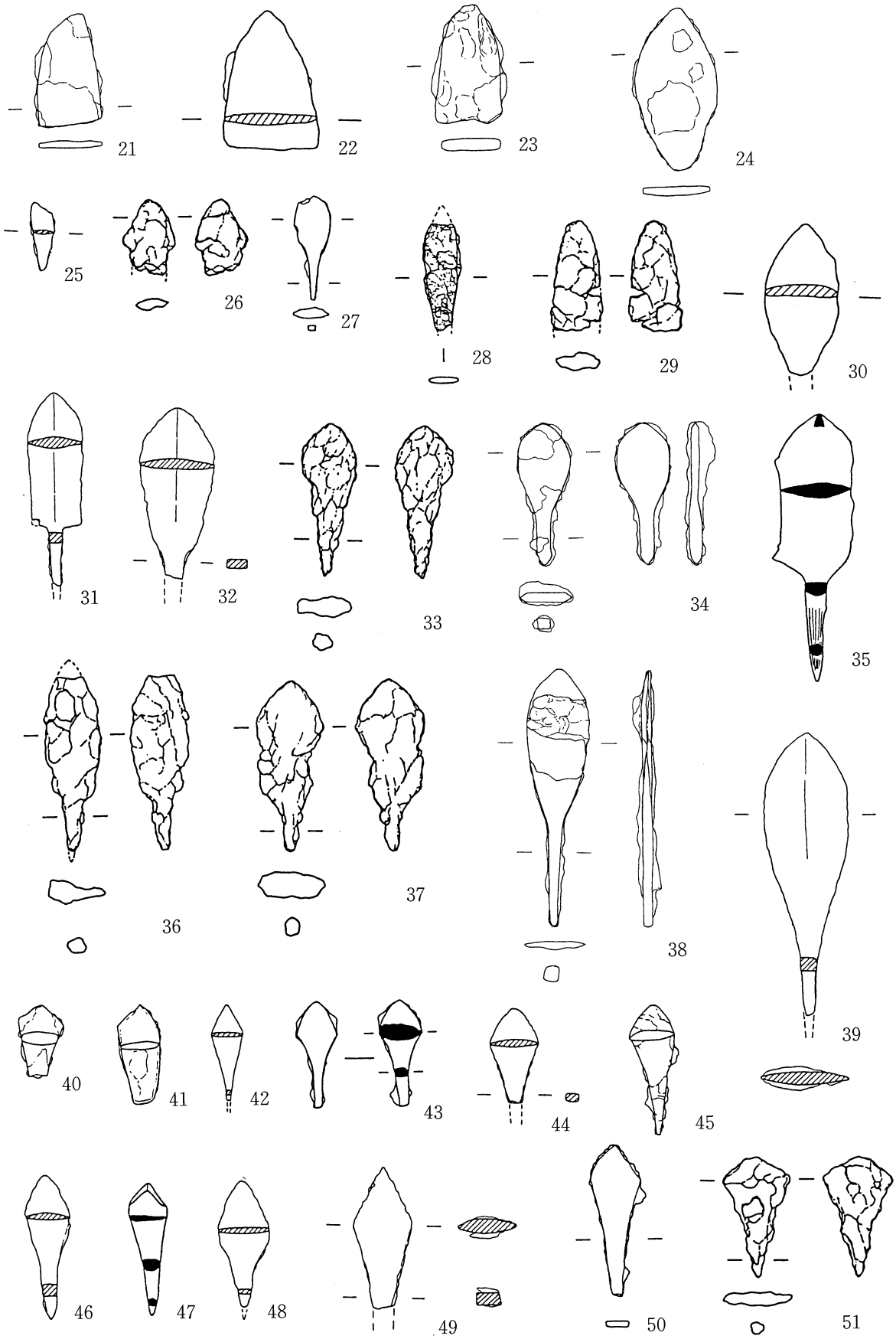


Fig. 139　鉄鏃：21～51（S＝1/2）

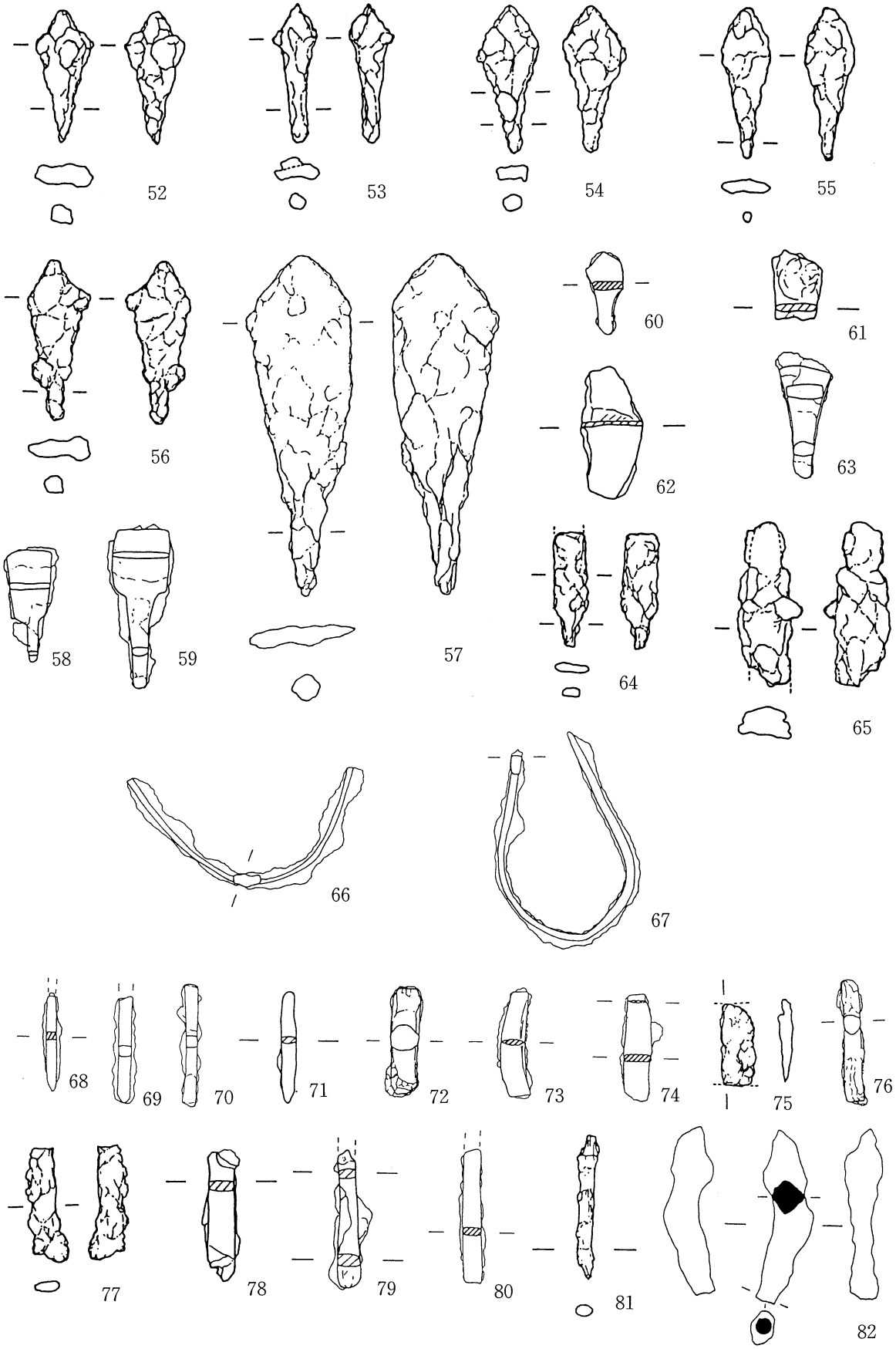


Fig. 140　鉄鏃：52～65、鉄釧：66・67、その他：68～82（S＝1/2）

(7) まとめ

我が国における鉄器の使用は、福岡県曲り田遺跡出土の板状鉄器が縄文時代終末まで遡ることが確認されている。南四国においては中期末に使用の開始が確認される。鉄器は石器と共存しながら徐々に鉄器に置き換えられていくが、それは明らかに器種による時期差があり、生活に必要なものから鉄器化が開始される[15]。その中で鉄器化がもっとも早いのは工具の鉄斧であり、南四国においては後期中葉に田村遺跡に出現する板状鉄斧がみられる。板状鉄斧と袋状鉄斧の両者は中期前半から中頃まで北部九州において共存しており、中期後半になると瀬戸内、近畿以東へと広がりをみせていく。しかしながら両鉄斧は同じ歩調の広がりをみせず、板状鉄斧の分布だけが優越する。その過程は、製作技術の未成熟さや、同じ機能の扁平片刃石斧の存在により袋状鉄斧の必要性がなかったことから、板状鉄斧が優越したものといわれている[16]。その後、瀬戸内、近畿以東も後期後半から終末にかけて袋状鉄斧が優越するようになり、南四国においても同様の傾向がみられる。一方、下ノ坪遺跡、小籠遺跡より出土している袋状鉄斧は、素材の整形や袋の形状に独自性があり、後期中葉の段階ですでに在地生産があったと考えられるものである[17]。

鉇は中国に起源を発し、青銅製から鉄製へと材質変化をたどり、中期前半までに舶載品として北部九州に出現する（福岡県吉ヶ浦遺跡）。国産品として出現するのは北部九州において中期後半と考えられている。その後瀬戸内、近畿以東へと波及していき、後期後葉から終末に急速に普及と定着をみせる。南四国においては、深渕遺跡、下ノ坪遺跡、小籠遺跡が後期中葉に出現をみせる。中でも下ノ坪遺跡、小籠遺跡は、鉄斧同様、後期中葉の段階にすでに在地生産があったものと考えられている。

次に農具であるが、我が国においてその出現は工具より遅い。それは弥生の農具が石包丁を除けば木製品が主流を占め、その製作のために工具の鉄器化を優先したからである。南四国においては鍬・鋤先２点（14、15）、鉄鎌２点（16、17）、摘鎌２点（18、19）であり、すべて後期終末期から古墳時代初頭にかかるものである。一般に農具が盛んになるのは弥生後期終末になってからであり、本格的な鉄器化は古墳時代以降であるといわれているが[18]南四国も全国的な動きと同一である。

武器である鉄鏃は、南四国における鉄器の出現の中ではもっとも早く、本村遺跡の出土例では中期末まで遡る。しかし、本村遺跡の出土遺物全体でみると石鏃が主流であり、徐々に鉄鏃が出現し始めた時期であることが窺える。後期中葉になると田村遺跡、下ノ坪遺跡からも鉄鏃が出現し始めるが、後期中葉以前に出現するのはその３遺跡の７点のみであり、鉄鏃全体の割合で見ると13％程度でしかない。その他はすべて後期後葉に属するものである。後期後葉になると林田遺跡で14点、東崎遺跡で12点と多量に出土する遺跡も出現し、鉄鏃も後期後葉に爆発的に増加するものである。また、型式と時期に着目すると中期末は全３点の出土数のうちすべてが無茎鏃である。後期中葉は出土している４点のすべてが柳葉式である。後期後葉になると不明を除く35点中18点が圭頭式、９点が柳葉式であり、圭頭式が過半数を占め圧倒的に多い。これらのことから鉄鏃は出現をみる中期末には無茎鏃が主流であり、後期中葉に柳葉式へと変化していき、後期後葉になると前葉の流れを継続しながらも圭頭式へと変化していったものと推測できる。

これら鉄器の出土地点をみると洞穴遺跡である龍河洞遺跡出土のものを除く80点中69点が竪穴住

居から出土している。これは鉄器全体の86％を越えるものである。次に多いのが土坑の５点で６％を占める。他は住居跡外１点、包含層１点、性格不明土坑２点、トレンチ２点である。

次に石器の出土と比較しながら鉄器の出土状況を遺跡別にみることにする。中期末から後期前半ともっとも早い時期に鉄器が出現する本村遺跡は、先に述べたが鉄鏃は３点で石器が大部分を占めている。後期中葉の遺跡をみると、下ノ坪遺跡は器種の豊富な７点が出土しているが、農具である石包丁も存在している。田村遺跡は３点で石鏃、石斧が共存する。小籠遺跡は後期中葉のものは１点出土しているが、石器はない。深渕遺跡は４点の出土で石器の出土はない。後期後葉の遺跡では東崎遺跡から20点が出土し、もっとも多い。現時点で石器の有無は報告書が未完のため不明である。次に多いのが林田遺跡で17点を数えるが、石器は確認されていない。稗地遺跡は９点に対し石包丁が４点、小籠遺跡は３点に対し石包丁が１点確認されている。宮野々遺跡は７点、ひびのきサウジ遺跡は３点、五軒屋敷遺跡は２点が出土しているが、それぞれ石器は確認されていない。田畠遺跡は鉈の破片の出土と一緒に石包丁も出土している。これらをみると、鉄器を保有していた集落の中にも石器は共存しており、その中でも農具の石包丁が目立つ。

これらのことから、南四国における鉄器は中期末に本村遺跡に出現し、次いで後期中葉に田村遺跡、下ノ坪遺跡、深渕遺跡、小籠遺跡と物部川下流域にかなり普及し、後葉になると林田遺跡や稗地遺跡など物部川中流域や内陸の平野部にまで拡大をみせる。後期後葉から古墳時代初頭にかけては、前期以来の拠点的集落である田村遺跡が解体し、周辺の平野部や物部川中流の段丘部に中・小の集落が爆発的に増加する時期であり、南四国の弥生社会に構造的な大変化が生じた時である。[19] このことと鉄器の普及は密接な関係があったものと考えられる。

末筆になりましたが、今回の集成については愛媛大学文学部の村上恭通氏、高知県埋蔵文化財センターの出原恵三氏に助言を得たことと、更谷大介氏の助力に対して記して感謝の意を表します。

（註）

（１）『高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第４分冊 高知県教育委員会 1986年

（２）出原恵三・泉幸代・浜田恵子・藤方正治『あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書 小籠遺跡Ⅱ』(財)高知県埋蔵文化財センター　1996年

（３）出原恵三・池澤俊幸・小松大洋・行藤たけし『農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理に伴う発掘調査報告書 下ノ坪遺跡Ⅰ』野市町教育委員会　1997年

（４）廣田佳久「考察」『高知自動車道（南国～伊野）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 長畝古墳群』(財)高知県埋蔵文化財センター　1996年

（５）宅間一之・山本哲也・森田尚宏『林田遺跡』土佐山田町教育委員会　1985年

（６）高橋啓明『ひびのきサウジ遺跡発掘調査報告書』土佐山田町教育委員会　1990年

（７）筒井敬二『宮古野地区県営圃場整備事業に伴う田畠遺跡発掘調査報告書 田畠遺跡』土佐町教育委員会 1996年

（８）吉原達生・高橋啓明・出原恵三『深渕遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年

(9) 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』雄山閣　1993年
(10) 松田知彦『山南川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 稗地遺跡』(財)高知県埋蔵文化財センター　1993年
(11) 松田知彦『宮野々遺跡』大野見村教育委員会　1997年
(12) 坂本憲昭『野市町本村遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1993年
(13) 岡本健児他『高知県文化財調査報告書第10集 龍河洞』高知県教育委員会　1958年
(14) 角谷和男・下村公彦『五軒屋敷遺跡発掘調査報告書』高知県教育委員会　1984年
(15) 村上恭通「鉄器普及の諸段階」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』 1998年
(16) 高倉洋彰『日本金属器出現期の研究』学生社　1990年
(17) 村上恭通「鉄器普及の諸段階」『日本における石器から鉄器への転換形態の研究』 1998年
(18) 川越哲志『弥生時代の鉄器文化』雄山閣　1993年
(19) 出原恵三「弥生から古墳へ ―前期古墳空白地域の動向―」『考古学研究』 1993年

表13　鉄器図版番号表

No.	器　種	時　期	出土地点	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重さ(g)	遺跡名
1	鉄斧	後期中葉	ST 11	11.1	3.7	0.5	99.9	下ノ坪遺跡
2	〃	〃	ST 18	6.8	6.3	0.3	280.0	田村遺跡
3	〃	後期後葉	ST 22	5.7	1.6	0.1	9.9	小籠遺跡
4	鉈	後期中葉	ST 11　床上5cm	14.2	1.8	0.5	29.4	〃
5	〃	〃	SK 35	11.1	1.4	0.3	25.3	下ノ坪遺跡
6	〃	〃	ST 11	3.0	1.6	0.2	3.6	〃
7	〃	〃	ST 3　床面	8.5	1.1	0.4	13.0	深渕遺跡
8	〃	後期後葉	ST 5	3.6	0.9	0.3	2.3	東崎遺跡
9	〃	〃	ST 1	4.6	1.3	0.4	10.0	田畠遺跡
10	〃	〃	ST 9　P 1	7.1	1.4	0.4	14.0	ひびのきサウジ遺跡
11	〃	〃	ST 22　P 6周辺	9.2	1.2	0.7		小籠遺跡
12	〃	〃	TR 3	11.9	1.1	0.4	10.8	東崎遺跡
13	〃	〃	ST 2　埋土	10.5	1.2	0.5	9.2	林田遺跡
14	鍬・鋤先	〃	ST 4	4.4	2.5	0.3	10.2	東崎遺跡
15	〃	〃	ST 5	6.8	4.1	0.5	45.5	〃
16	鉄鎌	〃	ST 4	5.6	3.7	0.6	16.0	〃
17	〃	〃	ST 5	6.0	3.2	0.5	11.8	〃
18	摘鎌	後期中葉	包含層	8.3	3.5	0.3	39.1	下ノ坪遺跡
19	〃	後期後葉	ST 5	7.4	2.7	0.3	30.6	稗地遺跡
20	刀子	〃	ST 8	6.3	1.7	0.4	8.6	ひびのきサウジ遺跡
21	鉄鏃	中期末	SK 2	3.9	2.2	0.2	11.1	本村遺跡
22	〃	後期後葉	1区　ST 1　床上	4.8	3.3	0.4	15.3	宮野々遺跡
23	〃	中期末	SX 1	4.0	2.3	0.4	9.3	本村遺跡
24	〃	〃	SK 2	5.6	2.8	0.3	12.6	〃
25	〃	後期後葉	ST 8	2.3	0.8	0.1	0.8	東崎遺跡
26	〃	〃	ST 2　P 15	2.6	1.9	0.4	2.5	林田遺跡
27	〃	後期中葉	ST 15	3.6	1.3	0.4	1.6	下ノ坪遺跡
28	〃	〃	ST 14	3.7	1.1	0.2	4.2	田村遺跡
29	〃	後期後葉	ST 2　埋土	3.8	1.9	0.6	4.6	林田遺跡
30	〃	〃	1区　ST 1　床面	5.3	2.5	0.4	9.2	宮野々遺跡
31	〃	〃	ST 1	6.7	1.9	0.4	7.2	東崎遺跡
32	〃	〃	ST 8	5.9	2.6	0.3	10.3	〃
33	〃	〃	ST 4　床上	5.3	1.9	0.7	6.9	林田遺跡
34	〃	後期中葉	ST 11	4.9	1.8	0.3	8.7	下ノ坪遺跡
35	〃	後期後葉	第1室	9.5	2.7	0.5	23.8	龍河洞遺跡
36	〃	〃	ST 2　埋土	6.0	2.0	0.8	7.7	林田遺跡
37	〃	〃	ST 2　埋土	5.9	2.3	0.9	12.4	〃
38	〃	後期中葉	ST 8	9.0	2.1	0.5	13.2	下ノ坪遺跡
39	〃	後期後葉	ST 5	9.8	3.0	0.8	14.3	東崎遺跡
40	〃	〃	ST 3	2.5	1.6	0.5	2.1	稗地遺跡
41	〃	〃	ST 3	3.4	1.3	0.2	3.9	〃
42	〃	〃	ST 5	3.3	1.1	2.0	0.9	東崎遺跡
43	〃	〃	ST 1	3.6	1.4	0.6	2.5	五軒屋敷遺跡

表13　鉄器図版番号表

No.	器　種	時　期	出土地点	全長(cm)	全幅(cm)	全厚(cm)	重さ(g)	遺跡名
44	鉄鏃	後期後葉	ST 1	3.2	1.7	0.3	2.6	東崎遺跡
45	〃	〃	ST 3	4.5	1.5	0.3	4.0	稗地遺跡
46	〃	〃	ST 4	5.0	1.5	0.2	4.1	東崎遺跡
47	〃	〃	第1室	4.7	1.4	0.2		龍河洞遺跡
48	〃	〃	ST 7	4.3	1.8	0.3	2.9	東崎遺跡
49	〃	〃	ST 1	4.9	2.0	0.5	9.5	〃
50	〃	〃	ST 3　床面	5.3	1.8	0.2	5.0	ひびのきサウジ遺跡
51	〃	〃	ST 2　埋土	4.7	2.4	0.5	5.6	林田遺跡
52	〃	〃	ST 2　埋土	4.6	2.0	0.8	5.6	〃
53	〃	〃	ST 2　床上	4.8	1.0	0.8	4.9	〃
54	〃	〃	ST 2　埋土	5.1	2.0	0.5	7.1	〃
55	〃	〃	住居跡外	5.2	1.7	0.5	5.7	〃
56	〃	〃	TR-P	5.5	2.2	0.9	9.2	〃
57	〃	〃	ST 2　床上	11.7	3.7	0.8	41.2	〃
58	〃	〃	ST 3	3.8	1.4	0.2	4.2	稗地遺跡
59	〃	〃	ST 3	5.6	2.0	0.3	8.8	〃
60	〃	〃	ST 5	2.6	1.3	0.5	2.4	東崎遺跡
61	〃	〃	1区　SX 1	2.4	1.7	0.3	3.1	宮野々遺跡
62	〃	〃	1区　ST 1　床面	4.5	2.1	0.1	14.8	〃
63	〃	〃	ST 2　埋土	4.0	1.2	0.4	2.9	林田遺跡
64	〃	〃	ST 5	3.8	1.8	0.5	5.9	稗地遺跡
65	〃	〃	ST 2　P 11	5.7	2.3	1.1	11.1	林田遺跡
66	鉄釧	後期中葉	ST 3　床面	11.3	0.9	0.4	9.9	深渕遺跡
67	〃	〃	ST 3　床面	16.4	0.6	0.3	13.9	〃
68	その他	後期後葉	ST 8	3.3	0.5	0.3	1.2	東崎遺跡
69	〃	〃	ST 3	3.6	0.5	0.4	3.1	稗地遺跡
70	〃	〃	ST 5	4.2	0.4	0.4	2.7	〃
71	〃	〃	2区　SK 1	3.8	0.5	0.3	1.3	宮野々遺跡
72	〃	後期中葉	ST 3　床面	3.7	0.9	0.7	7.3	深渕遺跡
73	〃	後期後葉	ST 6	3.6	0.4	0.2	2.7	東崎遺跡
74	〃	〃	ST 5	3.5	0.9	0.3	2.3	〃
75	〃	〃	ST 2　埋土	2.9	1.1	0.5	2.2	林田遺跡
76	〃	後期中葉	ST 3　床面	4.3	0.6	0.7	5.7	深渕遺跡
77	〃	後期後葉	ST 2　埋土	4.0	0.8	0.4	3.9	林田遺跡
78	〃	〃	1区　ST 1	4.5	0.9	0.4	5.2	宮野々遺跡
79	〃	〃	1区　ST 1	4.8	0.8	0.4	6.9	〃
80	〃	〃	ST 5	4.5	0.6	0.4	2.2	東崎遺跡
81	〃	〃	ST 22					小籠遺跡
82	〃	〃	SK 3	5.8	1.4	1.2	10.8	五軒屋敷遺跡

3．南四国における古代前期の土器様相
―下ノ坪遺跡の成果を中心として―

池　澤　俊　幸

Ⅰ．はじめに

今次の報告には、一括性の高い遺構出土遺物をはじめとする古代の遺物が多量に含まれている。これらは特に律令期の土器については散発的とも言えた従来の本県の状況と比較すると、画期的な質と量に恵まれたものである。よってここでは、まず今次出土の古代前期の土器について供膳具を中心に明らかにした後、既出の同件を併せて土佐の当該期の土器様相について考察する※。器形の呼称等は平城宮発掘調査報告をもとに、南四国の実態に沿うよう設定した。また本県域、南四国、土佐という名称をここでは同じ地域に対して用いる。該当資料が比較的に最も充実しているのは、下ノ坪遺跡も所在する物部川流域及び南国市にあたる地域で、香長平野の呼称をあてることができる。その他の県東部、西部は一括性と器種・器形の充実を満たす資料に欠けるが、西南部の幡多地域では一定量の出土がみられる。

Ⅱ．器種と分類

器形、細部形態共、器種を超えて認められるものには同じ名称を用いるようにした。Fig. 141及び表14に今次出土例を示している。また搬入品については同列に扱わず、別項を設ける。

1．土師器

杯A

高台を持たず、平坦な底部から屈曲して直線的に立ち上がる。後述のⅠ-5～6期では4種以上の法量分化が想定できる他、各期で法量分化がみられる（表17、18、19他）。SB 16やSF 1では重ねて祭祀的な使用もされている。

①　口縁部形態

次の3種に分類する。

b）端部が屈曲し内面が凹むもの、及びその退化形態とみられるもの。

c）端部を丸くおさめる素口縁のもの。

g）明確に外反するもの。

杯B

杯Aと同様の形態に、高台を付す。良好な資料が少なく、法量による分類は明確にし得ない。

①　口縁部形態

次の1種とそれ以外のものに分ける。

g）明確に外反するもの。

※以下、特記しない場合は供膳具について述べるが、例えば煮炊具についても共伴する供膳具の以下のような検討によって、既に一定の編年観は得られるものと考えている。煮炊具の詳細については紙幅の関係もあり、別稿に期したい。

② 高台形態、位置

高台の断面形によって次の３種に分ける。

1）下の２者に属さないもの。端部は方形になるものや、拡張するもの、端面が凹むものがある。

5）高さや厚さがやや大きく、断面が長方形となるもの。

6）基部に比して先が細いもの。

高台の位置は内側に付くものから外側（周縁部）に付くものまでがある。外側に付くものには、体部外面より連続的に高台に至るものがある。

杯C

断面形が丸みを持ち、底部より湾曲して立ち上がる。出土数は少ないが、法量分化はある。口縁端部内面はやや凹んで内傾するものや、段になるものがある。今次報告ではその全てが後述するⅠ群胎土の赤彩であり、外面下半に断続ケズリを施し、内面にはしばしば放射状暗文を認める。

本類の属性としては丸味を持った形態が特徴的で、その系譜としては畿内の「土師器杯C」が考えられ、その影響を受けて在地生産されたものとして捉えられる。

椀A

平坦で小振りの底部より弱く屈曲し、やや内湾ぎみに立ち上がる。口縁部は外反したり内面を凹状にせず、中にはやや内向を加えるものがある。少なくとも初現期である後述の編年試案Ⅰ-５期頃（以下編年試案略す）には、外底部にケズリを施すものとみられる。出土数は少なく、法量分化については明確にし得なかった。

皿A

平底の皿。表12、13をはじめ、各期で法量分化を認める。

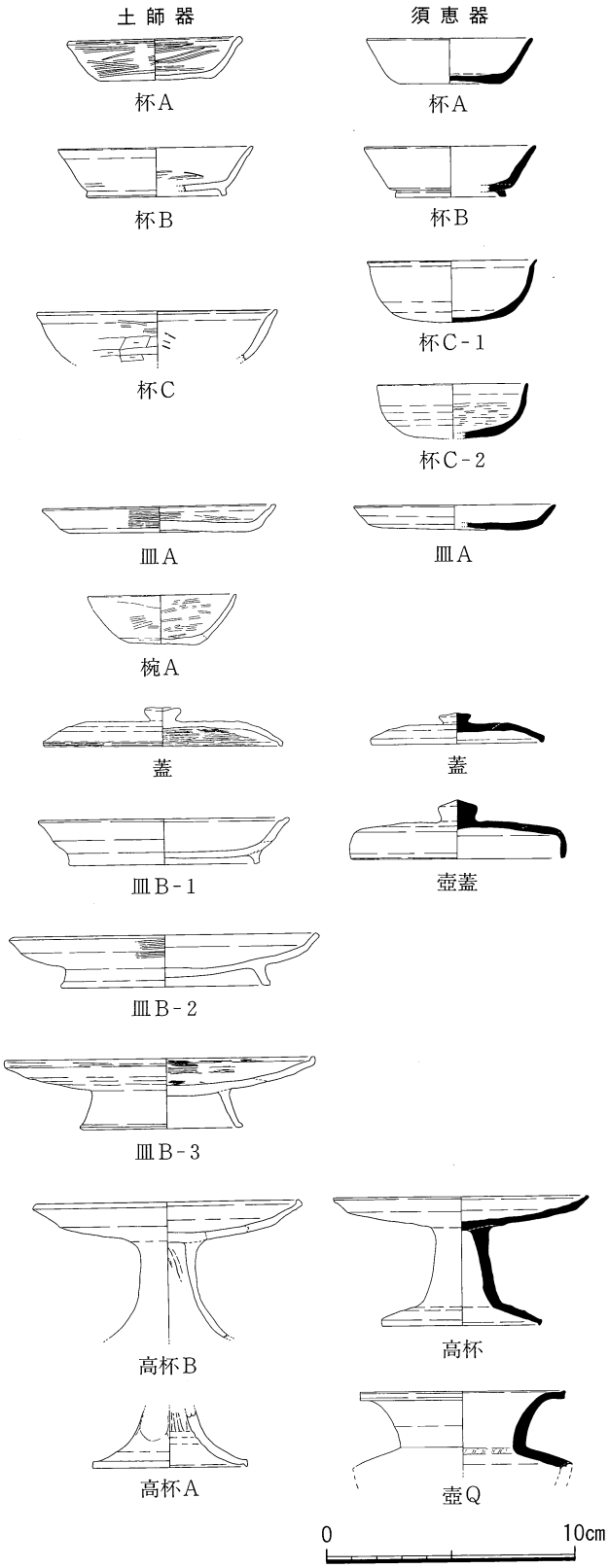


Fig. 141　器種図

① 口縁部形態

次の５種に分ける。

a）端部がやや尖り、内面が内傾する面になるか、弱く凹むもの。

b）端部が屈曲し内面が凹むもの、及びその退化形態とみられるもの。

c）端部を丸くおさめる素口縁のもの。

f）端部外面が外方へ突出或いは肥厚するもの。

g）明確に外反するもの。

皿Ｂ－１

底部周縁部に低い高台が付く皿。香長平野では後述の２段階以後出土例が僅少となるが、地域差も看取できる。

皿Ｂ－２

高い高台が内側に付く。

皿Ｂ－３

内側に脚が付く。香長平野ではⅠ－５期頃以後同定可能な例がない。

高杯Ａ

脚部外面を面取りし、断面が多角形となる。全体形が分かるものはなかった。

高杯Ｂ

脚部の断面形が円形となる。

① 口縁部形態

次の２種が存在する。

a）口縁部が上方へ屈曲し、厚みを保ち、端部は面をなすか、或いは断面形が隅丸方形状になる。

b）端部が上方へ突出する、皿を逆転させた形に近いもの。

表14－１　細部形態類型表

器形	部位	分類	形態	出土例 土師器	出土例 須恵器
杯・皿	口縁部	a	444	皿A	—
		b	941 1019	杯A 皿A 皿B	杯A 杯B 皿A
		c	721	杯A 杯B 皿A 皿B	杯A 杯B 皿A
		d	701	—	皿A
		e	704	—	皿A
		f	700 694	皿A	皿A
		g	985 999	杯A 杯B 皿A	—
杯	高台	1	888	○	○
		2	228	○	○
		3	925	—	○
		4	629	○	○
		5	44	○	○
		6	999	○	○

0　5cm

※皿Ｂ－２、高杯Ｂについて

今次出土の両器形について検討すると、高杯のａ口縁形態と皿Ｂ－２の口縁部は近似しており、高台或いは脚部についての情報が得られる資料でなければ区別は難しい。このような関連性を理解するには、これらの器形の形態の分類や変化に言及し得る資料が充実しておらず、今後の好資料に期したい。

高杯脚裾部

① 裾端部の形態

全体形の明らかな資料に恵まれないため上記のA、Bの分類との関連は不明であるが、裾端部の形態を次の2種に分類する。

1）外面に稜をなして下方へ突出するもの。

2）外面の稜や下方への突出がみられない、或いは極めて弱いもの。

蓋

分類に堪える資料量に達していない。

2．須恵器

杯A

基本的形態は土師器に準ずる。SK 30での6種の法量をはじめ、各期で法量分化が窺える（表17、18）。口縁部形態は、殆どが素直に丸くおさめるが、対象を他遺跡出土遺物にまで拡げれば、土師器でみたb形態を呈すものも僅少ながら存在する。

杯B

杯Aの形態に高台を付す。SK 30等では4種の法量分化を想定する（表16）。

① 口縁部形態

次の2種に分類する。

b）端部内面が凹むもの。

c）端部を丸くおさめる素口縁のもの。

② 高台形態、位置

次の6種に分類する。

1）端部を内外又は外方へ拡張するもの。端面が凹状になる場合もある。

2）端面が凹、或いは角を摘み出すもの。

3）端部を内側へのみ拡張するもの。

4）端部を拡張せず、方形の断面形をなすもの。

5）高さや厚さがやや大きく、断面が長方形となるもの。

6）断面形で、基部に比して先が細くなるもの。

傾向でしか把握できていないが、4や5形態は杯BⅡ以上の大型品に、1や2形態は本稿対象期の前半の杯BⅢに採用される例が多い。高台の位置は内側に付くものから外側（周

表14－2　細部形態類型表

器形	部位	分類	形態
蓋	全体	1	473
		2	567
		3	388
	口縁部	a	965
		b	970
		c	407
	摘み	A	971
		B	889
		C	436
		D	213
		E	590
		F	393
		G	266

0　5 cm

※「全体」は縮尺1/6

縁部）に付くものまでがあり、曖昧な表現だが、内側に付くものは律令期前半に、周縁部に付くものは同後半に属する場合が多い。

杯C

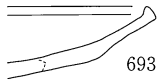
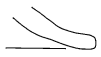
底部から体部にかけてが丸い。口縁部の形態によって次の２種を設定する。

C－１）口縁端部が内傾する面をなす。

C－２）口縁部を素直に丸くおさめる。蓋を反転したような全体形をなす。

上記の２種は何れも系譜を遡って求めることができ、後述のⅠ－３期には消滅に向う。なお、土師器杯Cとの関連は想定していない。さて、杯C－２の抽出を行う際、蓋との区別に迷うようなものがある。このような様相は先学による７世紀代の土器様相についての研究の中で指摘されており[1,2]、当地域での本器形の消長と考え合わせると、その文脈で考えることができよう。蓋と比較した場合の同形態の属性としては、全てに該当するわけではないが、立ち上がり部のスムーズなカーブや内面下半の擦痕、口縁部の特徴的なやや強い回転ナデ等を挙げておきたい。しかし、上記のように先学の成果に沿って考えられるとすると、まずは「そのような存在のあり方[1]」自体に着眼せねばならない。また県外では、香川県の打越窯跡や金蔵寺下所遺跡出土遺物も本器形の系譜の参考となろう[3,4]。

表14－３　細部形態類型表

器形	部位	分類	形態	出土例 土師器	出土例 須恵器
高杯	口縁部	a	1023	○	○
		b	 693	○	○
	脚裾端部	1	875	○	○
		2	 876	○	—

0　5 cm

※ 縮尺は統一
※ ○は出土例があることを、
—は未確認であることを示す。

皿A

平底の皿である。SK 22、28、30の様相からは３種の法量分化が窺える（表17他）。

①　口縁部形態

次の６種に分類する。

b）端部が屈曲し内面が凹むもの、及びその退化形態とみられるもの。

c）端部を丸くおさめる素口縁のもの。

d）端部の断面形が方形を呈するもの。

e）端部が内傾する面をなすもの。

f）端部外面が外方へ突出或いは肥厚するもの。

杯蓋

SK 22・28・30をはじめとする資料からは３種以上の口径を想定できる（表16）。

①　外面の調整

次の２種に分類する。

1）外面にケズリを施すもの。

2）外面にケズリを施さず、ナデや回転ナデで仕上げるもの。

② 形態

天井部から口縁部にかけての形態を次の3種に分類する。

1）天井部から口縁部まで連続的に湾曲し、器高が高いもの。

2）天井部から屈曲して口縁部に至るもの。

3）平坦なもの。

③ 口縁端部の形態

次の3種に分類する。

a）外面が凹むもの。

b）外面に稜をもって屈曲し、外面が面をなすもの。

c）下方への突出が少ないもの。端部の稜が弱く、丸みを持つものがある。

④ 摘みの形態

次の7種に分類する。

A）頂部が円錐形に高く突出するもの。

B）基部が括れ、端部は稜をなし、中央部がやや凸となるもの。

C）基部が括れ、断面が楕円形を呈するもの。中央部がやや突出するものがある。

D）断面形が厚みのある楕円形を呈するもの。

E）上面が凹むもの。

F）基部の括れがごく弱い円筒状で、上面は凹まないもの。

G）輪状のもの。

高杯

全体を復元できたものは少ない。脚裾端部は外面に稜をなして下方に突出する。

Ⅲ．製作手法

古代の土器の製作手法については先学による数々の研究があるが、現在完全に統一された概念ないし用語体系が存在するわけではない。そして言うまでもなく、筆者にはそれらを体系的且つ合理的に提示することは出来ない。しかし、今次報告で使用する語句の意味合いについてここで明らかにしておくことは、今次資料を今後の叩き台とするために必要であろう。用語、属性については中島恒次郎氏の論考を多く参考にした[(5)]。以下の本項は従来の成果に依拠したもので、新しく発見したような内容は殆どない上に、慣例の用語と一致しない部分もあり、混乱したものとみられるかもしれない。しかし、現時点で今次出土遺物を全体的に理解しようとした結果であり、今後錬成していかねばならないものと考えている。なお後述するように、須恵器と土師器の同軌性が当地域でもみられるため、妥当性が認められる限り両者に共通の用語を使用することとした。

1．回転台の使用・非使用

須恵器の手法については数々の先学により論及されているが、森隆は「須恵器的な製作手法を特徴とする土師器の一群」について「回転台土師器」と呼称した[(6)]。今次報告ではこの問題を念頭に置き、何らかの「回転台」を用いたと考えられる諸手法に、「回転」を冠して表す。これに対し、回

転台の使用を想定させない諸手法に「断続」を冠する。しかし、これらは残存状態等により確定が困難な場合も多く、また部分的な観察しか出来ない場合、一律に即断すると誤認の可能性も出てくる。SK 30の須恵器杯に見られる口縁部上方に逃げる回転ナデなどはそれを示唆している（部分的には都城で出土する土師器と同様の痕跡に見える）。また連続・均一な手法痕跡で、「断続」とは形容し難いものに「連続」の語を用意し、上記のように「回転」か否かを判断し難い場合をこれに含めた。

2．ナデ

手指によって撫でる手法で、場合によっては布様のものを用いた形跡もある。主に「断続ナデ」、「回転ナデ」、「連続ナデ」に分ける。先述したような不確定要素もあり、回転ナデの属性としては、所謂「ロクロ目」或いは「多段ヨコナデ」[7]様の平行・均一に手指圧力のかかった痕跡や、一定の回転速度を想定させるディティールを複合して判断した。なお、断続ナデは適宜「ナデ」と略す。

3．ヘラケズリ

今次は「ケズリ」と略称し、「断続ケズリ」、「回転ケズリ」を設定する。例えば土師器において、従来「手持ちヘラケズリ」と呼称される場合のあった痕跡は、「断続ケズリ」に分類される。

4．ハケ・板ナデ

板の小口様の条痕をハケ、板状工具で撫でるものの、明瞭な条線を残さない痕跡を板ナデと表現した。そうすると、ケズリ痕跡の一部（特にケズリ後弱いナデ調整がなされた場合等）とも境界が不明瞭となってくるが、現段階では明瞭な条線を残すものをハケ、残さないものを板ナデ、削る効果が顕著で、比較的鋭い痕跡を残すものをケズリに分類する。今次は、例えば須恵器蓋の内面周縁部の擦痕等について、統一された表現をすることができなかった。なお同痕跡について特に注意された例が管見にないが、他の回転ナデ部分とは明らかに異なる擦痕が残る。南四国で広く認められ、他県では今治市八町遺跡（後記）出土資料中で確認している。

5．ヘラミガキ

「ミガキ」と略称した。今次は回転ミガキの存在を立証する資料が存在せず、断続ミガキと連続ミガキも本質的な違いに言及できない。

6．暗文

ミガキの要領で装飾的効果を出す手法で、内側から外（口縁部）側へ放射状に施されるものや、連弧状のものがある。SX 2 出土土師器等には細い線のものがあり、より都城の同手法に類似している。[8]

7．底部の痕跡・切り離し

H区出土土器では、切離しの方法を確認できた供膳具の殆どが所謂回転ヘラ切り手法で切り離されており、未報告のSR 2 上層等に限って糸切り手法の土師器が出土している。その為観察表では切り離し法の表記を適宜省略している。ヘラ切り後の調整が弱いものでは底部外面に渦巻状の痕跡が観察でき、粘土紐接合痕との区別が困難な例が多い。しかし、例えばSK 30出土の須恵器Ⅲの底部痕跡からは、切り離しに5回転程度を要したことが窺えるし、他に同杯AⅢで4回転程度で切り離した例もある。なお、今次報告では回転ヘラ切りの「回転」を省略した。

須恵器杯類において立上り外面に擦痕を認める例があるが、これには切り離しの開始時にヘラに角度を持たせて差し込むことによるものが含まれているものと思われ、回転ケズリとは区別しておく必要がある。底部の回転ケズリを、切り離し後に行うものと捉えておく。前者の「ケズれ」については、切り離し後のナデや、他の部位からわかる回転方向との関係によって判断できる。なお、今次調査の回転台使用の土器のうち、回転台を左回転させたと断定できる例は僅少である。

8．赤色塗彩・化粧土

土師器の中に、器表を赤色塗彩したものや、精選された化粧土が観察できるものが存在する。実体顕微鏡で観察するとどちらも粉末状の粒子が観察でき、赤色風化礫や石英の微細粒を含むものがある。この赤色物質の化学的調査の結果は第Ⅵ章で述べられている。その分析結果やSK 30の皿683の例を考えると、赤色塗彩と化粧土といった区別も課題であるが、赤褐色付近を示す明らかに赤く見えるものを赤色塗彩（適宜赤彩と略す）、通常の土師器の発色の範囲内で捉えられるものを化粧土と呼んで区別しておく。なお、そもそも遺物の色調には様々な要因があり、注意を要することは経験的にも知られ、また器表の状態は摩耗等の条件によって大きく左右されるものである。よって、今次は実体顕微鏡による観察を行った。なお後述のⅠ群土師器は、全て赤色塗彩である。

9．焼成

須恵器と土師器の区分であるが、中間的なものには判断し難いものがある。作業仮定として、多少とも還元焔焼成と言えるものを須恵器、対する酸化焔焼成色を呈するものを土師器とし、これに焼成の良好度と硬度との関係や、共伴出土遺物との比較といった要素も適宜加味して判断した。しかしながら、須恵器と土師器といった極めて基礎的な定義にこのような不確定要素が介在することは、当該期の土器を理解する上での問題である。しかし、当地域でもこのような問題が横たわっているという認識は得られた。

10．素地・胎土

土師器・須恵器とも、特徴的な「胎土」に着眼し群を捉える事を試みた。但しこの件については今次は自然科学的分析を行っておらず、肉眼観察によるものである。将来の分析に期するところである。さて、使用されている原材料を正当に類型化できれば、それが消費・生産各遺跡にわたる関係性を解明する上でどのような利器たり得るかは、改めて記す必要もない。一方で、その作業の実際においては様々な問題が存在することもまた既知である。例えば「原材料」と言っても製品段階では、究極的には焼成により変容しているものとみなければならない。特に焼成温度の高い須恵器ではその度合が強い。そこでこれらに関わる属性について、「胎土」と「素地」の概念を設定して記述を進める。「素地」は発色、硬度等の焼成過程を含めた製品の状態である。「胎土」は焼成の影響を差し引いて推定できる原材料の特徴で、焼成を同条件とした場合に相対的に設定できる場合もあり、また、焼成が不良であるほど精度が高い。

以上のような問題を踏まえて今次設定できた土器群は一部で、捕捉し得た遺物点数も全体からみれば少数である。しかし、下記の如く構成器形等との関連性も描出され、類別化の有効性を補強するものと考える。なお、土師器煮炊具についても独自の群を設定し、観察表には記しているが、本稿では触れない。

(1) 土師器

二群を設定する。

Ⅰ群

全て赤色塗彩される群である。胎土に透明感のある石英の細粒を多く含み、素地の発色は灰白10YR 8/2を主に10YR 8/1～7/4と、特徴的な白っぽい色を呈する。含有する砂粒は比較的多いものの、突出した粒度のものは少なく、概して粒度の揃った印象を受ける。赤色風化礫は含まないものが多いが、微量を含むものもある。顕微鏡観察では、さらにガラス質微細粒や長石の微細粒を認めるものもある。器厚の厚いものも多く、また硬質の焼成を示すものが目立つ。今次観察表に掲載した赤色塗彩土師器51点中の35点を本群が占める。器形は杯A、杯B、杯C、皿A、皿B、杯蓋、高杯、把手付き鍋が存在し、多様で特徴的といえる。手法的にもケズリや暗文、比較的厚く濃い発色の塗彩に本群の特徴を指摘することができる。細部形態でも、杯皿の口縁部形態が本群以外のそれとやや異なるなどの特徴を認める。なお、本群の他遺跡での確認例は、表23に示した。

Ⅱ群

精選された緻密で軟質な素地で、砂粒は少なく、発色は2.5YR～5YRの橙色を呈す。素地の特徴により器表の強度は弱いようで、多くは摩耗が著しい。赤色塗彩されたものがある。

(2) 須恵器

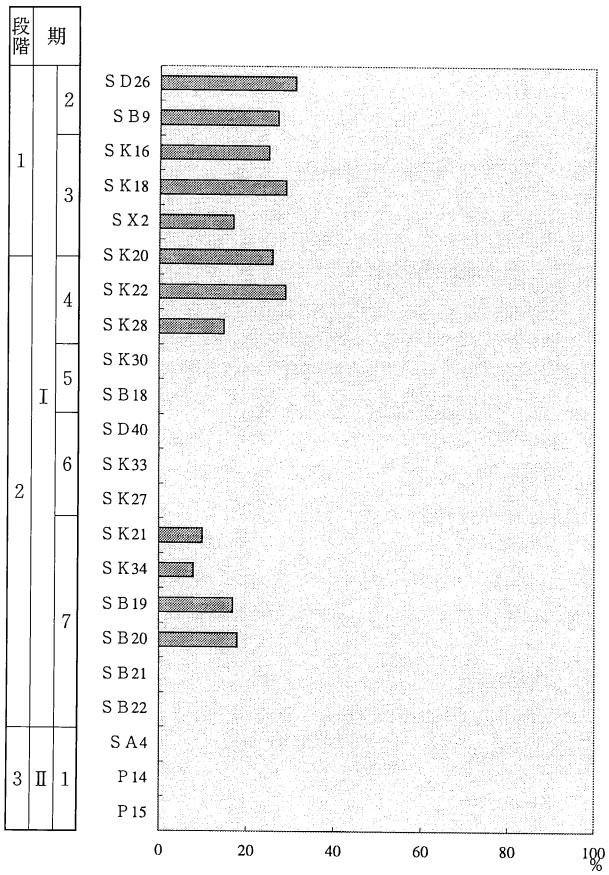
一群を設定した。

Ⅰ群

透明感のある粒度が比較的揃った石英の細粒を多く含み、赤色風化礫に由来すると考えられる黒粒は含まないものが主である。

本群として抽出できたものには焼成がやや軟質な傾向があるが、焼成良好な場合は、本来本群であっても素地がガラス化して属性が現れていない可能性を否定できない。故に、軟焼成傾向が本群の属性であるかどうかは不明である。しかし、軟焼成なもののみで検討しても冒頭の特徴は明らかなことから、本群の設定自体は有意であろう。観察表に掲載した遺物のうち、本群に分類できた器形と点数は杯B＝15、蓋＝19、高杯＝6、杯C＝2、杯A＝2、皿A＝1、そ

表15　須恵器Ⅰ群出土比率（供膳具）



遺構	Ⅰ群	須恵器	比率(%)
SD 26	4	13	31
SB 9	3	11	27
SK 16	2	8	25
SK 18	2	7	29
SX 2	3	18	17
SK 20	5	19	26
SK 22	15	51	29
SK 28	2	13	15
SK 30	0	51	0
SB 18	0	8	0
SD 40	0	10	0

遺構	Ⅰ群	須恵器	比率(%)
SK 33	0	16	0
SK 27	0	8	0
SK 21	2	20	10
SK 34	2	26	8
SB 19	1	6	17
SB 20	2	11	18
SB 21	0	7	0
SB 22	0	5	0
SA 4	0	4	0
P 14	0	0	0
P 15	0	2	0

の他（杯＝３、甕＝１、不明＝１）で、表６でみる各器形の出土比率からすると、杯Ｂ、杯蓋、高杯に偏っていると言える。

また表15からは出土した遺構、及び後述の編年試案における時期的な偏りが看取できる。また表25・27及び他遺跡での確認状況を併せると、本群の時期的・空間的分布及び器形との関連についての情報が得られる。本群が出土している今次SK 22・28、香長平野東端に位置する十万遺跡SK 50については各々の項で触れる。また同じく後述する白猪田遺跡SD１では、本群に類似した杯Ｂ底部１点を認めるのみで、本群の分布状況に示唆を与える。

Ⅳ．主な遺構出土遺物

以上を踏まえ、今次出土の遺構出土遺物群のうちでもその点数、遺存度、出土状況が特に良好な遺物群について、様相を把握しておく。

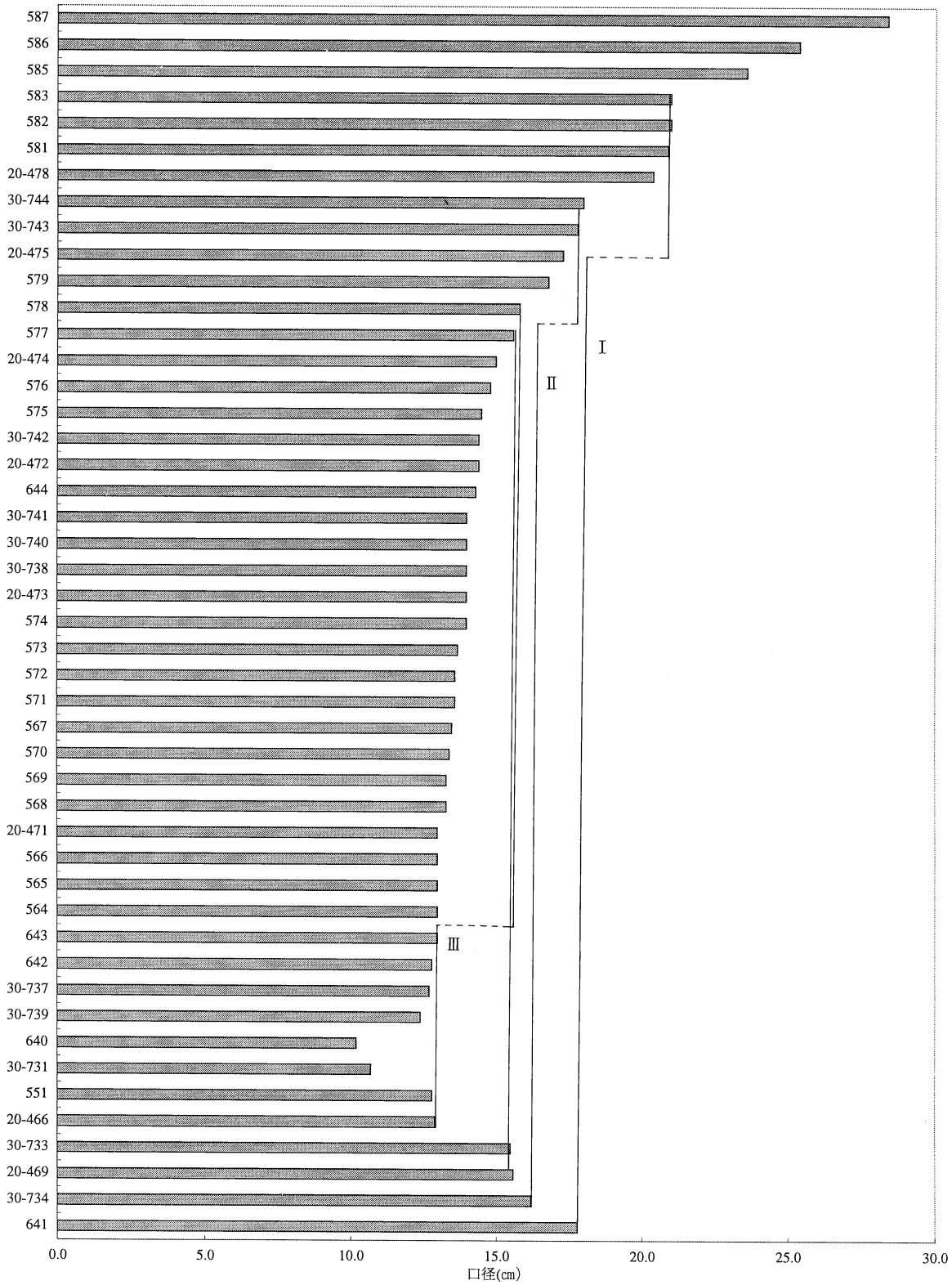
１．SX 2

概容を先に述べれば、構成器形、赤色塗彩土師器の比率、及び須恵器の一部に特徴的様相を見出せる遺物群である。表21のように土師器中の赤彩土師器の比率の高さは際立っており、表６と合わせてみると全共伴遺物の中でも赤彩土師器の占める比率が異例に高いことが分かる。出土した器形は、土師器に杯Ａ、皿Ａ、蓋、皿Ｂ-１、高杯、把手付き鍋、甕、カマド、須恵器に杯Ａ、杯Ｂ、杯Ｃ、蓋、甕、円面硯、その他に瓦、製塩土器が極少量ある。土師器、須恵器共に底部や天井部外面の手法痕跡が観察できるものではケズリを確認でき、調整の丁寧さもあって粘土紐痕や切り離し痕跡を明確に留めるものは存在しない。赤彩土師器は952を除き、全て胎土Ｉ群である。952の素地ベースはＩ群に似るものの、角の取れたチャートや泥岩の砂粒を含み、半透明の角粒はＩ群ほど目立たない。後述の十万遺跡ST 3からはこれと酷似する形態のものが出土しており、胎土に含む砂粒も同種である。946～949は内面に放射状暗文を施す。暗文の線は細い。975は表面の摩耗が著しいが、内外に赤色塗料が残る。杯皿にはＩ群としては器厚の薄いものがある。塗彩されない甕（976）とカマド（977）は互いに酷似した胎土を持つ。次に須恵器をみると、各個体が特徴的な形態・胎土・焼成を呈し、一様でない。手法的には回転ケズリの他、杯Ｂ底部、蓋の内面・摘みをはじめとする部位等で調整の丁寧さが目立つ。素地は３種以上を判別でき、971は他に類を見ない精良で堅緻な素地である。

２．SK 22・28

これら２遺構は以下のように類似性が強く、同時期の遺物群とみられる。表20の如く須恵器が圧倒的な比率を占めており、ここでは須恵器のみに触れることにする。杯Ａ550と636は形態・法量・胎土・焼成などが酷似する。杯皿では調整の丁寧なものがあり、蓋では外面の回転ケズリは確認可能な24点のうち21点に施され、残る３点がナデのみにより仕上げる。また杯Ｂ、蓋、高杯に須恵器胎土Ｉ群が目立ち、杯Ｂでは半数、蓋では31点中の８点を占める。Ｉ群の出土比率の他遺構との比較は、表15に表れている。なおSK 22は遺構出土遺物一覧表（表６）からも蓋が異例に多いことが知られ、杯Ｂの数がそれに見合っていないが、このような類似例として十万遺跡SK 50（後述）を挙げることができる。

表16　須恵器蓋・杯B　口径分布及び対応表



※ 20はSK 20
30はSK 30を指す。
※ 平城宮報告Ⅶを参考にした。

3．須恵器蓋と杯Ｂの口径

SK 22から纏まった数の須恵器蓋が出土しているため、その口径分布と杯Ｂとの対応を検討する。しかし、共伴する杯Ｂに口径の良好な資料が少ないので、SK 20、SK 28、SK 30出土遺物を援用したい。しかしこれらには時期差があるので、蓋・杯Ｂについてまとめて資料化することの有意性を検討しなくてはならない。表16でみる限り、SK 20～SK 30の間で時期差に伴う明らかな口径変化は指摘し得ず、現段階では検討することが有意であると考える。さて法量分化についてみると、表16より蓋、杯Ｂ共３種以上に分類できる。杯身の口径に対する蓋の口径に必要な余裕については、実物による試験の他、275や744の口縁変色部も傍証となろう。そのような口径差を考慮して、表のような対応関係が想定できる。なお、大径の蓋585～587の残存率は良好とは言えない。

4．SK 30

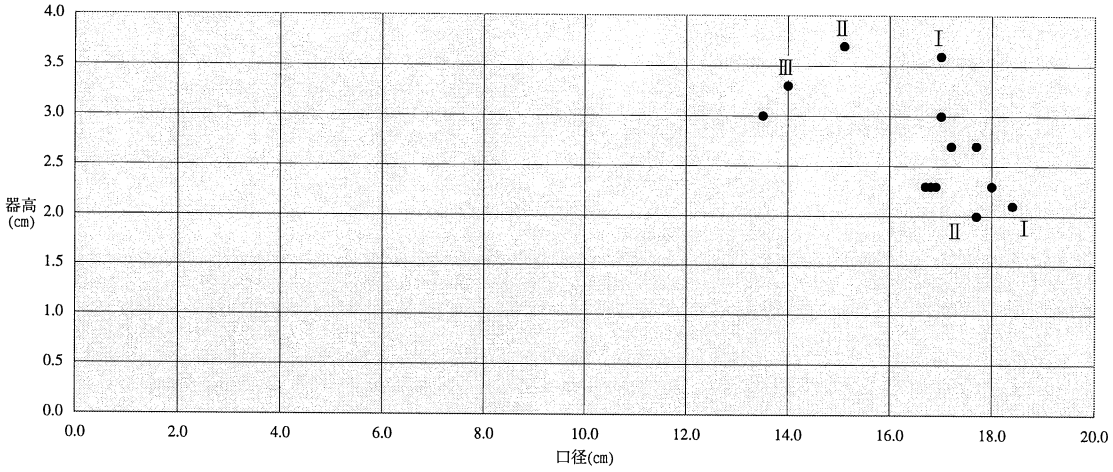
Ⅳ章でも述べたように、出土遺物の点数、各個体の遺存度及び出土状態から窺える廃棄の同時性からみて、当該期の土器群資料として現時点では南四国で最良の資料と言える。他と比較すると細片の比率も低く、主体を占める残存率の高い遺物に対象を絞る事で、より同時性の高い一群とし捉えることができると考え、以下では原則として遺物実測図に掲載できた遺物に限って検討する。

出土した器形は、土師器には杯Ａ、皿Ａ、蓋、高杯Ｂ、甕、須恵器には杯Ａ、杯Ｂ、皿Ａ、蓋、高杯、鉢、及び製塩土器、土錘がある。土師器も杯皿は全て回転ナデ調整されており、ヘラ切り痕も認める。土師器杯皿は689を除いて、全て全面にミガキを施す。土師器と須恵器の比率は表20の通りである。

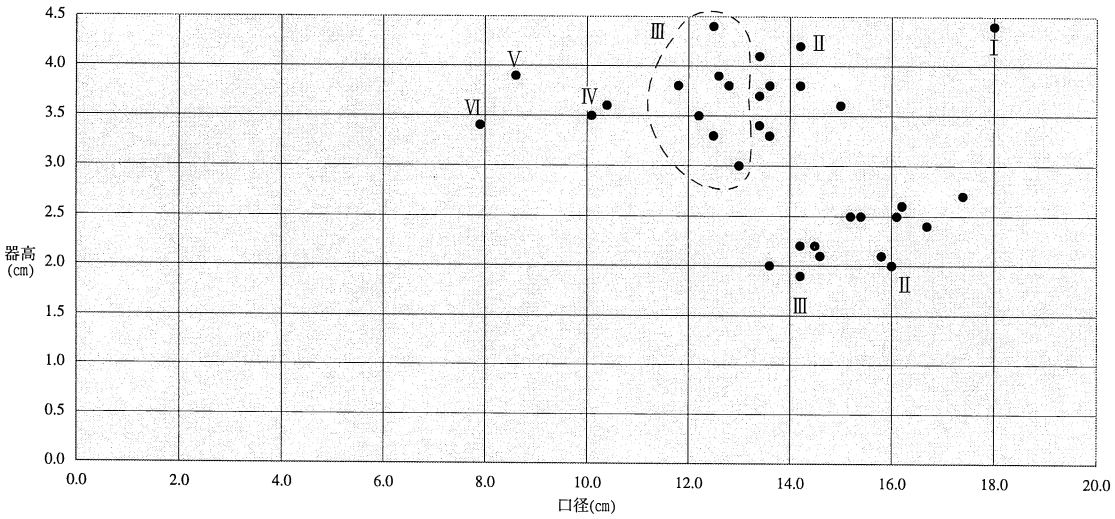
まず土師器杯Ａについて検討すると、法量については表17に表れているように３種に分けた。手法については、赤色塗彩は全く確認できず、ミガキは上記の通りである。この、非赤彩、回転台成形で内外に連続的なミガキを施す杯Ａは４小期程度にわたって安定して出土しており、律令期における「定型化した杯Ａ」と呼称しておく。時期的な詳細は後述する。なお、689は他の杯Ａとは手法、形態共に異なる。口縁部に鋭い一条の沈線が巡っており、ミガキは内面と外底では施されないことが確認でき、恐らく何れの部分にも施されていないとみられる。外底は粘土紐接合部などに断続する押圧とナデを加えており、手法の特異さより搬入品の可能性がある。次に土師器皿Ａでは675を除いて考える。法量分化は表17では不明瞭であるが、676は底径も大きく他と一線を画す。手法についてはこの676が赤彩で、他２点で化粧土が確認できる。赤彩と化粧土については手法の項で述べた通りである。683は外面に化粧土の垂れが観察でき、赤褐色を呈する部分もあって赤彩との区別に躊躇も残る。高杯は脚の断面が円形のものが２点出土しているが、脚断面の径が大きく異なる。杯部が知れる693は、皿を反転したような杯部を持っている。

須恵器杯Ａは、法量では表17のように６種に分ける。中法量域の境界が表では不明瞭であるが、ここでは口径で13.4㎝以上と13.0㎝以下のものに境界を見出し各々ＡⅡ、ＡⅢとする。例えばＡⅢの最大口径のものとＡⅡの最小口径のものでは底径にも差があり、実物においては無理なく入れ子にすることができる。翻ってＡⅡ内では口径にばらつきがあっても底径に大差がなく、実物においては入れ子にできない。底部から径を違えて製作されている可能性を重視し、二者を分けた。なおこのＡⅡとＡⅢの境界値にあたる計測資料には、特に残存率の高いものを使用した。ＡⅡの723と

表17　SK30杯ⅢA径高分布



ＳＫ30土師器杯ⅢＡ径高分布



ＳＫ30須恵器杯ⅢＡ径高分布

図版No.	器種	口径(cm)	器高(cm)
676	ⅢＡ	18.4	2.1
677	〃	17.7	2.7
678	〃	16.8	2.3
679	〃	16.7	2.3
680	〃	16.9	2.3
681	〃	18.0	2.3
682	〃	17.6	2.0
683	〃	17.2	2.7
684	〃	17.0	3.0
685	杯Ａ	13.5	3.0
686	〃	14.0	3.3
687	〃	15.1	3.7
688	〃	17.0	3.6

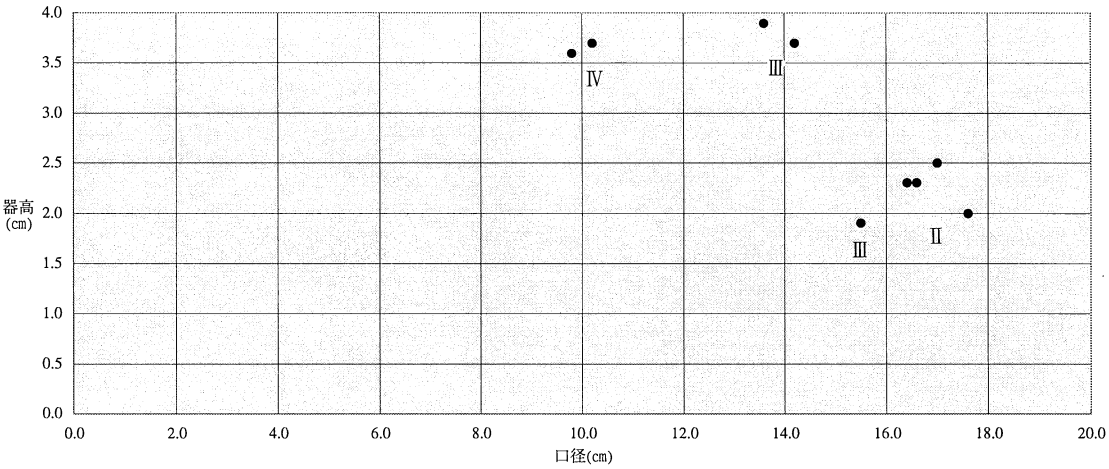
土師器

図版No.	器種	口径(cm)	器高(cm)
694	ⅢＡ	13.6	2.0
695	〃	14.5	2.2
696	〃	14.6	2.1
697	〃	14.2	2.2
698	〃	14.2	1.9
699	〃	16.0	2.0
700	〃	15.8	2.1
701	〃	15.2	2.5
702	〃	15.4	2.5
703	〃	16.1	2.5
704	〃	16.0	2.0
705	〃	16.2	2.6
706	〃	16.7	2.4
707	〃	17.4	2.7
708	杯Ａ	7.9	3.4
709	〃	8.6	3.9
710	〃	10.4	3.6

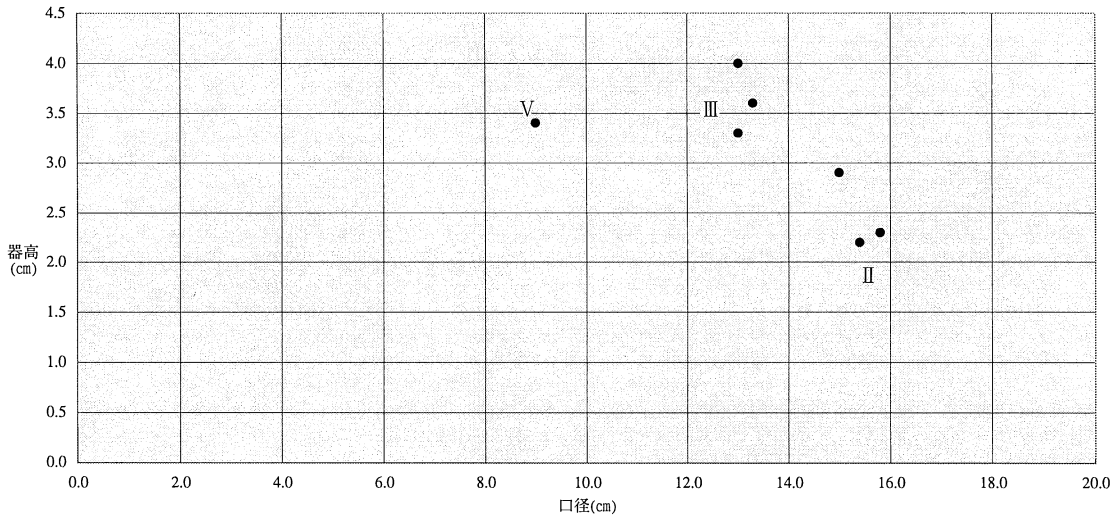
図版No.	器種	口径(cm)	器高(cm)
711	杯Ａ	10.1	3.5
712	〃	11.8	3.8
713	〃	12.2	3.5
714	〃	12.8	3.8
715	〃	12.5	4.4
716	〃	13.4	3.4
717	〃	12.5	3.3
718	〃	13.0	3.0
719	〃	13.4	4.1
720	〃	12.6	3.9
721	〃	13.6	3.3
724	〃	13.4	3.7
725	〃	13.6	3.8
726	〃	14.2	3.8
727	〃	14.2	4.2
728	〃	15.0	3.6
735	〃	18.0	4.4

須恵器

表18　SD 40杯皿Ａ径高分布



ＳＤ40土師器杯皿Ａ径高分布



ＳＤ40須恵器杯皿Ａ径高分布

図版No.	器種	口径(cm)	器高(cm)
901	皿Ａ	15.5	1.9
902	〃	16.4	2.3
903	〃	16.6	2.3
905	〃	17.0	2.5
906	〃	17.6	2.0
907	杯Ａ	9.8	3.6
908	〃	10.2	3.7
909	〃	13.6	3.9
910	〃	14.2	3.7

土師器

図版No.	器種	口径(cm)	器高(cm)
917	杯Ａ	9.0	3.4
918	皿Ａ	15.4	2.2
919	〃	15.8	2.3
920	〃	15.0	2.9
921	杯Ａ	13.0	4.0
922	〃	13.3	3.6
923	〃	13.0	3.3

須恵器

724、725～728はそれぞれ胎土、焼成、形態が類似している。SK 22・28と比較すると杯ＡⅡの縮小が推測できるが、比較資料が量的に充分でない。須恵器杯Ｂでは、表16よりSK 22・28との比較が一定可能であると解釈し、733・734をＢⅡとした。どちらも内面が生焼けである。須恵器皿Ａは表17のように２種以上の法量に分かれる。須恵器皿ＡⅠとしては、SK 22・28や後述の白猪田遺跡SD

１から出土している口径18㎝以上の皿にあたるものを想定する。口縁部形態はバリエーションに富んでおり、先期で須恵器皿の口縁部形態をｂ形態が占めていた状態からの解放と捉えられる。また696と702は類似した形態、手法痕跡、胎土、焼成、発色で、法量が異なる。須恵器蓋は杯ＢⅡの蓋とみられるものが２点、杯ＢⅢとみられるものが６点である。何れも外面にケズリを施さず、ナデも雑なものがある。多くは口縁部付近の内面周縁部に回転ケズリと同様の痕跡があり、その際回転台は右回りである。738は内面に板状工具による調整痕を認める。また観察表で内面が平滑と記したものは、その部分の器表を滑らかに仕上げており、特に737は単なる丁寧なナデではなく鏡面の如く平滑であるが、墨痕は観察できない。本遺構出土の須恵器杯皿Ａには、火襷を持つものや上半と下半の焼成・発色が異なるものがある。杯Ｂの内面生焼けのものや、蓋の口縁部のみ発色が異なるものもあり、窯内置勢の一端を窺うことができる。本遺物群と他の主な遺構出土遺物との先後関係については、SK 22・28は須恵器の調整、同皿の形態より、SK 30に先行するものと考えられる。またSD 40は土師器・須恵器皿の形態や土師器の赤彩より、SK 30に後続するものと考えられる。

５．SD 40

溝跡に分類した遺構であるが、遺物の出土状態及びその遺存状態より、高い一括性が窺える。SK 30と同様に、以下では原則として遺物実測図に掲載できた遺物に限って検討する。

出土した器形は、土師器に杯Ａ、杯Ｂ、椀Ａ、皿Ａ、高杯Ａ、須恵器に杯Ａ、杯Ｂ、皿Ａ、及び製塩土器、土錘がある。在地産土師器供膳具は全て回転ナデ調整されており、ヘラ切り痕も認める。ミガキは摩耗により観察困難なものもあるが、全て全面に施しているとみられる。土師器と須恵器の比率は表20の通りである。

まず土師器について検討すると、杯Ａは表18のように法量で２種に分かれる。909・910は上記のSK 30と比較すると杯Ⅲの値域内に収まり、手法・形態的にもSK 30との差異が看取できない。杯ＡⅣ及び椀ＡはSK 30等では出土していないもので、杯ＡⅣは他にSB 20・22、SK 34から出土を認める。杯ＡⅣは形態も須恵器と共通となり、ミガキが須恵器との唯一の相違点として残るのみである。椀Ａは２点出土しているが、器表の状態などにより調整痕跡の観察はやや困難であった。しかし914では、ヘラ切り後の回転ケズリを底部から立ち上がり部までの外面に確認した。回転ケズリは、共伴する遺物群のみならずSK 30等でも既に土師器・須恵器を問わず例外的手法となっているだけに本例の特異さが目立つが、新器形としての属性と仮定しておく。皿Ａは表18のように２法量に分けられ、SK 30との比較よりＡⅡ、ＡⅢに比定できる。901は全体に器厚が薄く、軽量である。903は化粧土を施しているものとみられる。次に須恵器杯皿Ａをみると、表のように杯２法量、皿１法量があり、SK 30等と比較すると各々杯ＡⅢ、杯ＡⅤ、皿ＡⅢに相当する。ところで土師器底部913は底部が突出し、断面で観察できる接合痕からは円盤状に作った底部に粘土紐を圧着させながら体部を立ち上げる製作工程が窺える。底部外面は丁寧に撫でられているが、外縁部には粘土がはみ出している。このような特徴は、後に述べる本遺物群の属する時期の後に顕在化してくる、後述のＤ相の萌芽の１つと捉えることができよう。

本遺構からは、胎土その他より他地域からの搬入品とみられる土師器911、916、927が出土している。全容が知れる916は都城の土器編年との並行関係に示唆を与えるものであり、後の搬入品の

項にまとめる。

V．編年試案

本県域の律令期の土器に関連する研究としては、松田直則氏によって「9世紀後半から12世紀初頭」を大きくⅠ～Ⅲ期に区分する研究成果が発表されて以来[9]、古代後半を中心に先学の研究が後続している。

一方、古代前期については本稿冒頭のように、これまで資料が充実していなかった。その中で、須恵器については廣田典夫氏による古墳時代からの集成と編年研究、それを承けての廣田佳久氏による研究がある[10,11]。また高橋啓明氏は、曽我遺跡の出土遺物を9世紀頃に位置付けた[12]。出原恵三氏は白猪田遺跡出土土器の位置付けと共に、当該地域の律令期土器生産について考察した[13]。

以下では本稿冒頭に記した枠組みの中で、今次出土の各遺構出土土器群を軸とした編年を試みる[※]。作業の緒として暗文、赤色塗彩、ケズリ、切り離し痕等の調整の粗雑化或いは省略といった周知の変遷観や、搬入品を時期的傍証としている小籠遺跡SK 130・136出土土器群の様相を手掛かりとした[14]。

Ⅰ-2期

SD 26、SB 9を挙げる。律令期の主要な器形となる杯A・B、皿等が、土師器・須恵器において既に一定の定着をみている。一方、先代の系譜をひくとみられる土師器杯C、須恵器杯Cも器種構成上に相当の地位を占めている。本期の須恵器杯Cは4㎝以上の器高を測るものを主とし、形態は底部から口縁部まで大きく弧を描いて立ち上がる。土師器においては赤色塗彩されるものが表21のごとくの割合を占め、胎土群はⅠ群、Ⅱ群を抽出できる。Ⅱ群胎土のものには赤色塗彩されないものも在るようである。土師器の多くにはミガキや暗文を施す。土師器の回転台使用については資料に恵まれていないが、皿B-2の外面に回転ケズリを認める。なお赤彩土師器を中心に、土師器では断続ケズリを施すものが量的に勝る。土師器・須恵器共ケズリや丁寧なナデを施すものが多く、切離しや粘土紐の痕跡を残すものは例外的である。胎土も精良なものが一定量認められる。須恵器杯Bでは底部内外面の丁寧なナデや外底の回転ケズリをはじめ、調整の丁寧さが看取できる。高台形態はほぼ例外なく端部を内外方へ拡張、或いは角を摘み出す1、2、3形態の何れかを呈す。須恵器杯蓋は調整を確認できるものは例外なく外面の半分以上に回転ケズリを施し、形態的には一定の器高をもつものが主流である。口縁部が厚みを保つものも見うけられ、摘みはB、E形態が確認できる。なお、SD 26とSB 9には時期差が存在する可能性があるが、現段階では明確にできない。また本期の名称については、土佐山田町須江古窯跡群出土遺物等の中に本期より古相を呈する須恵器があり、Ⅰ-1期を想定してのものである。

※今次は掘立柱建物にも、柱穴よりまとまった量の遺物が出土した例が多い。柱抜取痕と掘方では埋没の時期差を考慮すべきであるが、今次は明確に分離できない場合が多かった。その為遺物の同時性については、同期に比定できる他遺構とのより注意深い比較・検討が必要である。

Ⅰ-3期

SK 16、SK 18、SX 2を挙げる。先期から受け継ぐ要素は多く、以下本項では、特記しない事項については原則として先期に準ずるものとする。

まず須恵器では、杯A・杯Cの区別が困難なものがあり、よって杯Cに分類できるものは減少している。960は先期の杯Cに比べると器高が低下している。平底の杯Aも確認できる。杯BⅠ・Ⅱ・Ⅲ及びSK 16の杯AⅢの存在より、相当に法量分化が進んでいると考えられる。この須恵器杯における法量分化は次期以降へと連続していく。土師器では胎土Ⅱ群が確認できず、赤色塗彩土師器はⅠ群のみによって担われている。器種構成をみると土師器に皿A、杯A・B・C、蓋、皿B-1、高杯、把手付き鍋、須恵器に皿A、杯A・B・C、蓋、皿B又は高杯、円面硯等多様な器種・器形が揃っている。また須恵器杯蓋の摘み形態は、先期に加えてA、C、D形態を認める。

Ⅰ-4期

SK 22、SK 28、SB 17出土遺物を挙げる。土師器杯C、須恵器杯Cが構成器種から脱落している。土師器は依然資料量が充分でないが、後記の白猪田遺跡資料も援用すると、須恵器と共通の成形・調整法、全体形態、法量のものが主要な器形で既に揃っているものとみられる。下ノ坪遺跡では赤彩土師器が激減し、赤彩土師器Ⅰ群及び断続ケズリを施す一群がほぼ消滅しているものとみられる。土師器は資料量が充分でないが、須恵器では杯身及び杯蓋で3種類以上、須恵器皿Aも2種以上の法量を認める（表16他）。総括的に、形態・手法は整理され、法量は規格的に分化していると言え、当地において最も律令的に整った土器様式の開始期と捉えられる。

杯蓋の手法・細部形態は前期とほぼ同様であるが、概してやや器高が低平化し、まだ少数ながら天井外面をケズることなくナデで仕上げるものが現れる。須恵器皿Aでは口縁部b形態が主流化しているが、既に形骸化が始まっている感もある。次期から量的にも安定して出土する、SK 30の項で述べた「定型化した杯A」は、本期で既に成立していることが後述の土佐国衙跡資料からも窺える。なお、今次SK 20出土遺物群は先期と本期の中間的様相と捉えておく。

Ⅰ-5期

SK 30を挙げる。先期との比較において、須恵器における手法的簡略化が顕著である。法量分化については、明確な規格性を持った分化が、土師器も含めて確認できる。

先期までは須恵器蓋の外面や杯身外底のケズリや、杯皿の外底のやや丁寧なナデが一定みられたが、本期においてはケズリは例外的となり、杯皿の外底には粘土紐痕或いはヘラ切り痕を明瞭に残す例も散見されるようになる。細部形態では、須恵器蓋において摘みの括れが弱く上面を凹状にしないF形態が認められ、口縁端部は先期まで少量ながら散見できたa形態が例外的となる。須恵器皿Aでは先期の主流であった口縁部b形態のものが少数に転じ、f形態が出現、次期へと続く。但しこのb形態の残り方には地域差があるようである。また先期の比較資料が貧弱だが、須恵器杯AⅡの縮小を仮定できる。

Ⅰ-6期

SD 40、SK 27、SK 33、及びSB 16柱痕出土遺物を挙げる。口縁部の回転ナデが強くなって器形に反映する後述のC相は、先期までに既に萌芽がみられたが、本期に至って土師器・須恵器双方の

皿に顕在化する。土師器の赤彩や化粧土は先期以上に僅少となる。中型の須恵器杯では外傾率のやや大きなもの（(口径－底径)÷器高≧1.5程度）が一定量存在する。須恵器杯Ｂの高台の形態では、これまで少なくとも中・小法量器種では主流であった、端部を拡張したり角を摘み出す形態（１形態、２形態）が少数となり、断面がシンプルな方形となる４形態がこれに代わっている。土師器では、杯ＡⅣを本期以降確認できるが、この器種の口縁部形態はこれまで土師器杯ＡⅢＡ（以下杯ⅢＡ）に特徴的であった端部が屈曲するｂ形態をとらず、プロポーションが須恵器と完全に共通となっている。高杯、ⅢＢ-２、ⅢＢ-３の口縁端部が方形状となる口縁は、土師器・須恵器共に本期以降確認できない。同杯Ｂの高台は底部周縁端部に付くものを認める。同杯ⅢＡには比較的器厚の薄いものが散見できるようになり、以後浸透して行く。各器種の法量変化について検討するには今尚資料量の不足を否めないが、表17と18の比較から土師器・須恵器ⅢＡが若干縮小傾向にあるという仮説を得られる。

Ⅰ-７期

SK 21、SK 34、SB 19、SB 20、SB 21、SB 22を挙げる。土師器においてⅠ期の最終段階として捉えられるものと、次期につながる新相の出現という重層的な変化がみられる。

まず土師器杯ⅢＡについてみると、まず口縁部形態では端部が屈曲するｂ形態が、小口径の杯Ａという例外を除いて堅持されてきたが、本期に至ってこの口縁部形態をとらないものが少なからず出現する。さらに先期までほぼ例外なく施されたミガキも省略された、従って焼成以外に須恵器との差異を見出せないものも顕在化する。皿では先期まで未確認の土師器ⅢＡⅢにあたる口径14cm台以下のものが出現し、法量分化も須恵器と共通となる。

蓋は土師器・須恵器とも、低平なものや摘みの基部が殆ど括れないものが主となる。

土師器・須恵器杯皿に共通する現象としては、先期から確認できる外傾率の大きなものがやや増加し、更に外傾したものも出現する。皿ではこのような新相を備えた低平なものが顕在化する。杯Ａでは次期以降定着して行く後述のＤ相を呈するものが散見できるようになる。土師器について概観すると、小さい外傾率（先期参照）・口縁部ｂ形態・従来の器厚・ミガキという諸属性と、大きい外傾率・口縁部の非ｂ形態・薄い器厚・非ミガキという諸属性にはそれぞれある程度の相関関係があり、前者が古相、後者が新相を示す属性群として捉えることができる（Fig. 142）。またその指標の一部は須恵器にも適用できる（Fig. 同）。本期の土器様相が一見雑多にも見えるのは、このような様相が重複することによるものであろう。

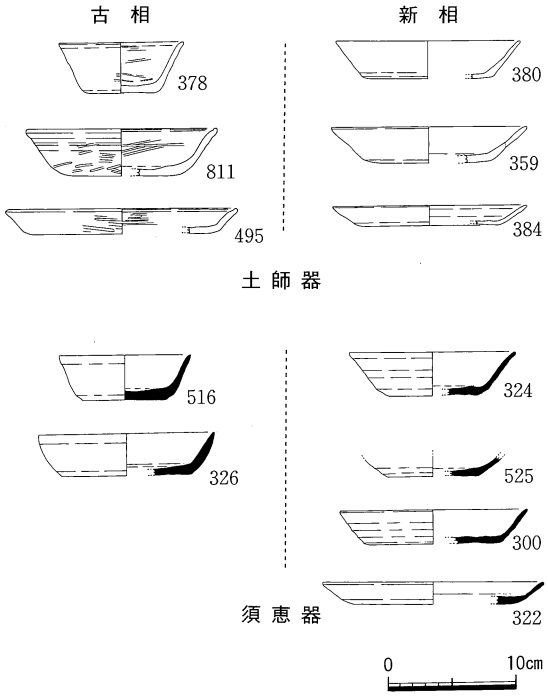
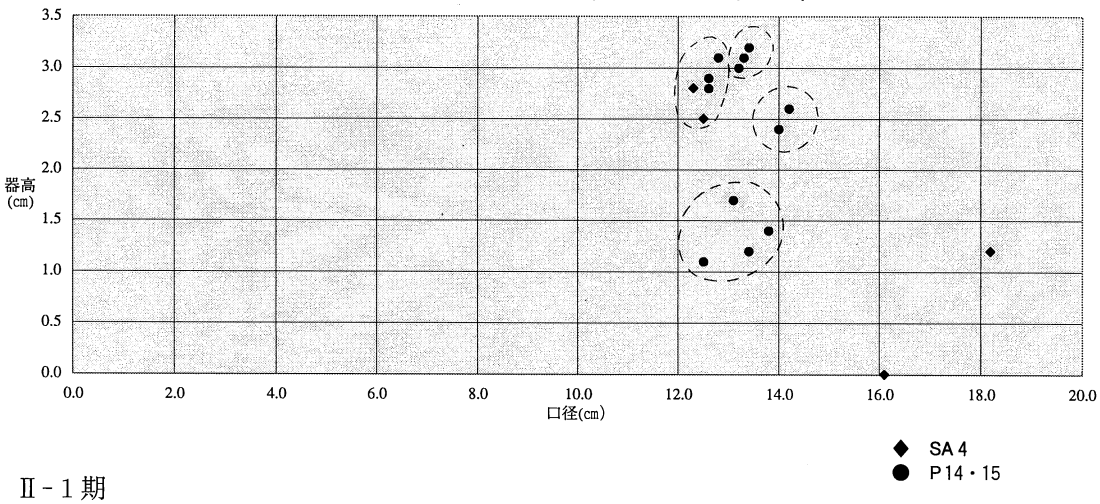


Fig. 142　Ⅰ-７期における対比例

表19　SA４、P14・15土師器杯皿Ａ径高分布



Ⅱ-１期

SA４、P14、P15を挙げる。供膳具が一変する。先期で古相の一群として捉えたような、変容しながらも保たれてきた律令期以来の土器様式の伝統が払拭され、同じく先期で新相として捉えた諸特徴を備える土器群へと転換する。須恵器は供膳具において急激に後退する（表20）。以下詳細を述べる。

遺構	図版No.	器種	口径(cm)	器高(cm)
SA４	397	皿Ａ	16.1	不明
〃	398	〃	18.2	1.2
〃	399	杯Ａ	12.3	2.8
〃	401	〃	12.5	2.5
P14	983	皿Ａ	12.5	1.1
P15	984	〃	13.4	1.2
P14	985	〃	13.8	1.4
〃	987	〃	13.1	1.7
P15	990	杯Ａ	12.8	3.1
P14	991	〃	12.6	2.9
〃	993	〃	12.6	2.8
P15	994	〃	13.3	3.1
〃	995	〃	13.2	3.0
P14	996	〃	14.0	2.4
〃	997	〃	13.4	3.2
〃	998	〃	14.2	2.6

まず土師器については、杯ではⅠ期に準ずるような法量分化はみられない。これは新相と位置付けられた先期の段階で既に内包されていたものとみられる。但し法量分化自体は認められ、表19のごとく杯皿Ａで口径及び底径より各々３種に分類する。杯の口縁径境界は不明瞭なところもあるが、底径も含めた差がある。口縁部形態は、杯皿とも素口縁であるｃ形態に加えて、明確に外反するｇ形態が顕在化する。

皿Ａの形態は、底部から比較的明確に屈曲して立ち上がり、口縁部はｇ形態をとらないＡａ(987)、立ち上がりの屈曲が不明瞭で口縁部は素直におさめ、しばしば強めの回転ナデ痕を残すＡｃ（397、984)、口縁部がｇ形態をとるＡｇ（398、985、986)、以上３種に分ける。

杯Ｂの全体形が分かるものは１点で、高台は先が細くなる第６形態に分類できる。同形態自体は先期でも僅かながら帰属させ得る例を確認できるが、999は他の部分と同様に高台も華奢で端部が面をなさず、特徴的である。

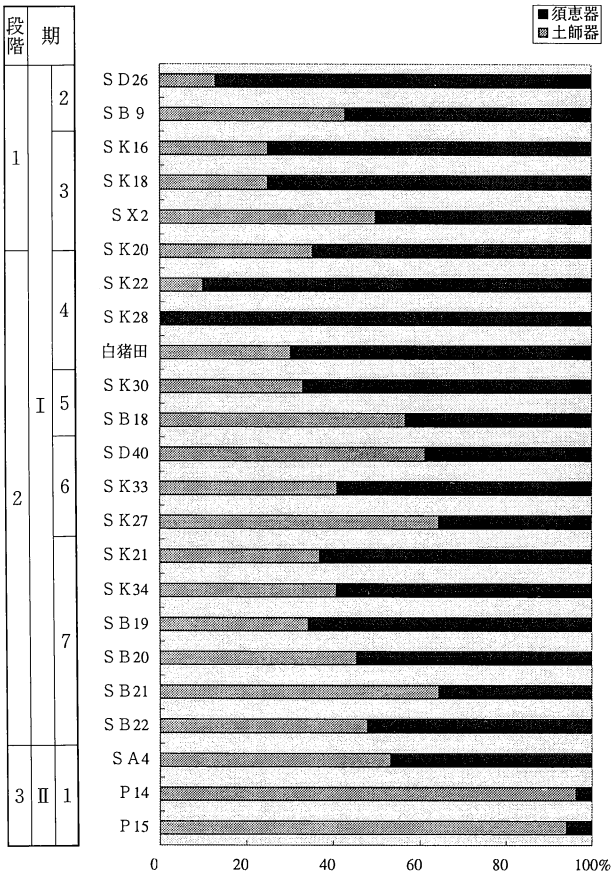
須恵器は激減して質・量共に分析に堪えず、混入の可能性も高いとみられるが、SA４の蓋は低平化及び口縁端部の突出の退化が著しい。高杯は土師器・須恵器共に確認できない。

Ⅵ．他例との比較

１．南四国（消費地）

以上でみて来た諸様相を、本県域である南四国の他例と比較する。これまでの出土例は冒頭で述べたような状況であったので、比較的纏まった遺物群を選択し、要点を記す。なお、以下は原則として報告された遺物の実見に基づいており、それ以外はその旨を記した。

表20　土師器・須恵器（供膳具）の比率

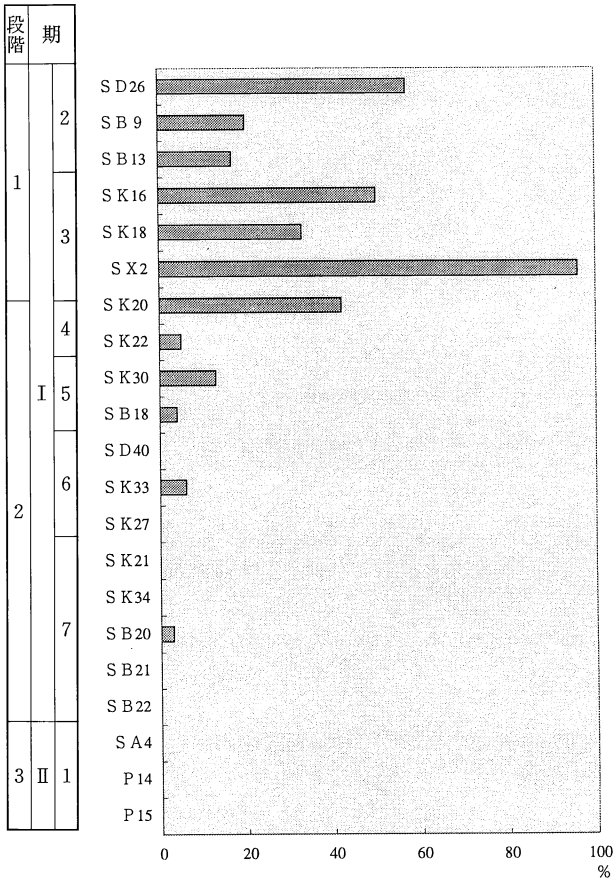


白猪田は白猪田遺跡 SD 1

遺　構	土師器	須恵器
SD 26	7	47
SB 9	30	40
SK 16	4	12
SK 18	6	18
SX 2	23	23
SK 20	12	22
SK 22	19	172
SK 28	0	29
白猪田	30	69
SK 30	40	81
SB 18	25	19
SD 40	27	17
SK 33	18	26
SK 27	40	22
SK 21	37	63
SK 34	42	61

遺　構	土師器	須恵器
SB 19	24	46
SB 20	35	42
SB 21	31	17
SB 22	24	26
SA 4	16	14
P 14	55	2
P 15	32	2

表21　赤彩土師器出土比率



遺　構	赤　彩	土師器	比率（%）
SD 26	4	7	57
SB 9	6	30	20
SB 13	1	6	17
SK 16	2	4	50
SK 18	2	6	33
SX 2	22	23	96
SK 20	5	12	42
SK 22	1	19	5
SK 30	5	40	13
SB 18	1	25	4
SD 40	0	27	0
SK 33	1	18	6
SK 27	0	40	0
SK 21	0	37	0
SK 34	0	42	0
SB 20	1	35	3
SB 21	0	31	0
SB 22	0	24	0
SA 4	0	16	0
P 14	0	55	0
P 15	0	32	0

(1)　十万遺跡 SK 50[15]

須恵器杯、同蓋、土師器蓋、同高杯、同甕、同把手、土錘が報告されており、出土比は概して須恵器が多い。蓋と土師器高杯の一部を実見した。蓋は全て外面に回転ケズリを施し、更にナデを加えるものがある。内面周縁部に回転板ナデ痕のあるものもある。形態は概して、途中よりやや屈曲する全体形で、口縁部は明確に下方に折れ、摘みは基部が括れるBやE形態及び輪状がある。蓋に

は胎土Ⅰ群のものがある。杯Ｂの底部はケズリを施し、高台端面は凹む。無高台の杯には立上り部が丸いものがある。以上の特徴は編年試案Ⅰ-３期頃に相当する。

(2)　十万遺跡 ST 3

須恵器蓋、土師器皿Ｂ-１、同把手が報告されている。須恵器蓋と土師器皿Ｂ-１を実見した。須恵器蓋は外面に回転台右回りのケズリを施し、内面中央部はナデにより滑らか、周縁部は回転板ナデ痕を認める。全体に調整は丁寧である。口縁部の屈曲は明確で、摘みの括れは弱いものの中央部が突出する。土師器皿Ｂ-１は外底のケズリが確認できないことを除けば下ノ坪遺跡 SX 2 出土例と酷似し（既述）、胎土に含む砂粒も同種である。以上の特徴はⅠ-３期頃に相当する。

(3)　土佐国衙跡 SK - 113、SK - 114、SK - 115[16]

実測された遺物を実見すると、土師器・須恵器供膳具の調整は丁寧で、土師器にはほぼ全てにミガキが施されていたとみられ、暗文も認められる。須恵器蓋では例外なく回転ケズリが施されている。土師器・須恵器杯の立ち上がり部外面はスムーズに仕上げられ、丸味のある形状をなすが、土師器杯Ｃや須恵器杯Ｃの典型的なものは見当たらない。土師器杯・皿の口縁端部は極めて明瞭なｂ形態を呈す。なお、土師器には本稿のⅡ群と同じ素地のものがある。須恵器杯Ｂは形態・手法とも今次 SX 2 に類似する。須恵器蓋には器高の高いものや、口縁端部のａ形態が今次報告のどの例よりも顕著なものがある。また SK 115出土の土師器甕は、今次 SD 26、SB 9 出土遺物中に同群を認める。以上の様相はⅠ-３期新相頃に相当する。

(4)　土佐山田北部遺跡群Ｂ47・Ｃ89グリッド[17]

近隣には現在南四国最多の当該期の窯跡数を数える土佐山田町須江古窯跡群が所在する。県営圃場整備に伴う試掘調査であり、遺構一括遺物による検討は困難であるが、幾つかの試掘坑からは遺存の良好な遺物が纏まって出土している。Ｂ47グリッド溝状遺構とＣ89グリッドより出土した土師器及び須恵器の杯・皿・蓋の形態・手法は、Ⅰ-３～Ⅰ-４期のそれに相当する。実見した中では赤色塗彩土師器と製塩土器が確認できない。なお同遺物群の土師器には、「回転台土師器」が含まれる。

(5)　白猪田遺跡 SD 1[18]

全出土遺物を実見した。土師器供膳具では摩耗が目立つが、器表面が残存している部分ではミガキが確認できる。須恵器皿Ａでは確認できた４点の口縁端部は全てｂ形態で、全形も含めて SK 22・28に近く、焼成及び胎土も SK 22・28に酷似するものがある。須恵器杯Ｂの点数は杯Ａと同等とみられ、底部の調整は丁寧なものがある。須恵器・土師器蓋では天井部外面の調整を観察できた９点全てにおいて、回転ケズリが確認できる。須恵器蓋の摘みは４点を観察し、やや退化傾向を示すものもあるが、全て基部が括れ中央部がやや凸となるＢ形態に属するものである。以上のような様相はⅠ-４期頃に相当する。なお赤彩土師器は出土していない。製塩土器片総重量は212ｇで、口縁部でカウントした土器総点数101点で除すると2.1ｇとなる。

(6)　土佐国衙跡 SD - 12[19]

報告に従って判断する。土師器杯Ａは口縁端部がｂ形態、内外面にミガキを施し、赤彩は観察されていない。既述の、定型化した土師器杯Ａに帰属させ得るものと考える。口径を今次 SK 30と比較すれば杯ＡⅡに相当するが、口径、器高共に本例が凌駕しており、口縁部ｂ形態は明瞭である。

また口縁部ａ形態の土師器高杯が存在し、杯部内外面にミガキを認める。２点の須恵器蓋の外面には回転ケズリを施し、須恵器杯Ｂの立ち上がり部外面には擦痕を認めるものがある。このような様相はⅠ-４期頃に相当するものとみられる。

⑺　小籠遺跡 SK 106[20]

全出土遺物を実見した。識別可能な口縁部点数は土師器杯Ａ３点、同杯Ｂ１点、同皿Ａ１点、須恵器杯２点、同皿Ａ２点、同蓋１点、土師器甕２点である。底部で数えると土師器杯Ａ１点、同杯Ｂ１点、須恵器杯Ａ１点、同杯Ｂ１点である。土師器杯皿の口縁部５点のうち細片の１点を除いて、口縁部はｂ形態をなす。また、そのうち器表の観察が可能な杯皿各１点は内外面にミガキを施す。須恵器皿のうち１点は回転ナデによって体部がやや外反し、口縁端部はｄ形態をなす。土師器・須恵器杯には、外傾度のやや大きいものや器厚の薄いものが含まれる。須恵器杯Ｂの高台は貧弱である。このような諸様相はⅠ-６～Ⅰ-７期に相当する。なお識別可能口縁部片１点当たりの製塩土器重量は15.3ｇである。

⑻　土佐国衙跡 SK-71[21]

土師器皿Ａ１点、須恵器皿Ａ２点と報告点数は少ないが、何れも調整手法が比較的良く観察できる。何れも体部の外傾度が比較的強く、特に須恵器皿は体部の回転ナデが強く、口縁部が外反する。土師器皿は回転ナデ後、内外にやや粗いミガキを施す。このような諸特徴はⅠ-６～Ⅰ-７期に相当する。

⑼　土佐国衙跡 SB-62[22]

報告の土師器杯Ａ４点、須恵器皿Ａ１点を実見した。完形の土師器杯４点は互いに酷似しており、口縁部は素直におさめるＣ形態で、摩耗が著しいがミガキは施されていないとみられ、器厚は薄い。２点は立ち上がり部外面が弱い段をなす。須恵器皿Ａは底部が緩やかに突出し、低い体部は強い回転ナデによって外反、器厚は薄い。内底はナデ、外底は弱いナデを施す。このような諸特徴はⅠ-７～Ⅱ-１期に相当する。

⑽　土佐国衙跡 SA-13[23]

報告の土師器皿Ａ２点と同甕１点を実見した。報告では土師器の出土が多いことが記されている。土師器皿Ａ２点は体部の外傾が大きく器高が低く、体部は２～４段の強い回転ナデ痕を残す。ミガキは施されず外底はナデを施す。１点は口縁部がｇ形態をなし、外底には並行圧痕を認める。土師器甕は今次Ｐ14出土の1005と同群・同形態である。このような諸特徴はⅡ-１期頃に属する。

⑾　四国西南部（風指遺跡[24]、具同中山遺跡群[25]、船戸遺跡[26]、宮崎遺跡[27]）

宮崎遺跡を除き四万十川下流域に位置する。各遺跡より古代前期の遺物も出土しているが、多くは流路や包含層からの出土であって一括性が認められず、具同中山遺跡群での土坑出土遺物はごく少数である。従って本地域の土器様相について論ずる事自体が時期尚早の感を拭えないが、現状は本稿冒頭の通りで、土佐における香長平野の土器様相を比較・理解する為の端緒としたい。遺物の再検討は、報告された遺物について行った。なお四国西南部という表現には問題も含まれようが、今次は土佐に属する地域のみを対象とする。

まず、それらの形態・手法を下ノ坪遺跡の各遺物群と比較すると、大きく６つの時期を考えるこ

とができる。基準になるとみられる個体を抽出したのがFig. 143である。同図と編年試案を比較すると、両地域の様相差についての仮説も得られる。以下にその要点を記す。

① 須恵器杯皿

編年試案Ⅰ-7期頃に相当する形態・手法のものに、口縁端部b形態をとるものが少なからず存在する。期は全て同じではないが、杯にも同形態が一定量認められる。下ノ坪遺跡での同形態はⅠ-4期の皿において主流をなすがⅠ-5期以後少数に転じ、杯においては全期を通じて稀である。また西南部で出土しているb形態には外方への屈曲が極めて弱いもの、内面の凹が沈線で表されるもの、型式的に退化が著しいものが少なくない。これらもb形態の展開・存続において下ノ坪遺跡との間に差異が存在することの傍証であろう。次に調整についてみると、西南部では西南4期まで底部及び立ち上がり部外面の調整が丁寧且つ整美で、西南5期に至っても何らかの処理を施すものが多いことを指摘できる。下ノ坪遺跡ではⅠ-5期より底部処理を簡略化したものが現われ、Ⅰ-7期ではヘラ切り痕を残すものが顕在化、中には切り離し後未調整のものも見うけられる。また底部内面に条痕状の粗い痕跡を残す特徴的なナデを施すものがみられるが、これは主に西南2期以前に存在するようである。

② 須恵器蓋

輪状摘みを持つものは香長平野では少数で、Ⅰ-4期頃以降はほぼ消滅するとみられるが、船戸遺跡からは一定量出土しており、しかも型式的に若干新相のものも見うけられる。

③ 土師器供膳具

ミガキなどの手法及び形態からみて、編年試案Ⅰ-6期以前に比定し得るものが殆ど存在しないという在りよう自体が極めて特徴的である。この結果については今後の検討を要す。F53-1は搬入品である。K89の形態を香長平野の編年観でみればミガキを施すのが常であるが、本例は施さない。ミガキ自体は宮崎遺跡において僅かに認められる。皿では、平底の周縁部に低い高台を貼付し、体部が大きく外傾して直線的に立ち上がる器形が土師器・須恵器共に存在する。香長平野では、類例を僅かに田村遺跡群[28]に求められるが、資料母群に対し極僅少と言える。搬入品F53-1はその手法・形態・胎土・焼成より所謂畿内産土師器の範疇で捉えられ[29]、平城Ⅲ期頃に位置付けられよう。なお回転台の非使用を断定できる在地の土師器が存在しないことは、香長平野と共通する。

⑿ 小籠遺跡SK 130、SK 136

供膳具に須恵器が存在しない。土師器の個別的な器形や法量では編年試案Ⅱ-1期との明確な差異化ができないが、次のような点を指摘することができる。まず杯Aにおいて、本遺物群は器高の高い杯Aが存在する。この器形は底部の分割成形が明瞭化し、体部の回転ナデ痕も顕著である。高台を持つ杯は、下ノ坪遺跡P14・15では平底の杯とは一線を画す独自の形態を有しているが、小籠遺跡では上記の器高の高い杯Aと共通化している。下ノ坪遺跡出土で全容の判る1点は、小籠遺跡の同器形及び共通性を持つ杯Aのどれよりも体部が深く、高台は低い。また小籠遺跡では下ノ坪遺跡SA 4、P14・15と共通の杯A、皿Aでも回転ナデ痕の顕著なものを若干認める。以上より小籠遺跡SK 130・136出土遺物群を編年試案と比較すると、Ⅱ-1期に後続する「Ⅱ-2期」に相当する。なお本遺構から出土している搬入黒色土器椀については下記の搬入品の項で触れる。

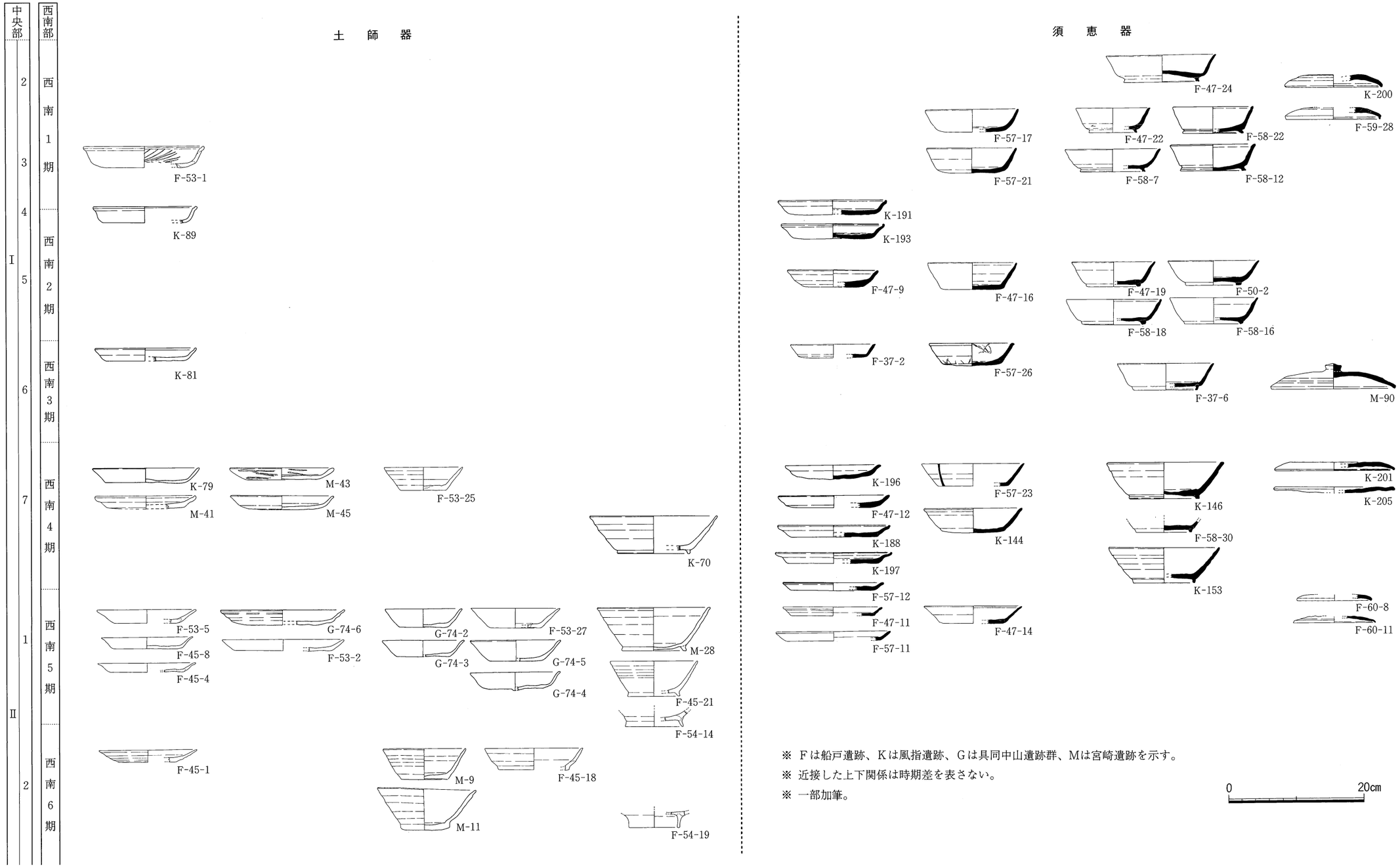
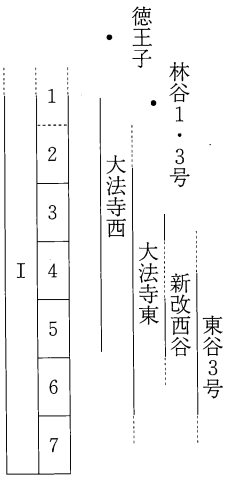


Fig. 143　四国西南部における変遷試案図

2．窯跡

須恵器窯跡より出土している資料と編年試案との比較を試みた。南四国で資料数などにおいて比較に適すると思われるものを選択した結果、徳王子窯以外は土佐山田町須江古窯跡群に属するものとなり、地域的に限られたものとなったが表22を得た。ただ、実見できた遺物は一部である。しかし、現在南四国最多の須恵器窯跡を擁する須江古窯跡群がⅠ-2期以前より操業を開始し、Ⅰ-3～5期に活況を呈していたことは了解できよう。中には操業期間が長くなっている窯跡があるが、灰原のみの遺存など、遺跡の状態は一様ではない。

表22　南四国中央部の窯跡出土資料との対比(30)



3．搬入品

南四国地域外の製品とみられるものを挙げる。散発的な出土であり、また必ずしも産地を特定できるものではないが、他地域との関係を考える上での資料となる。今次そのような資料として認識できたものは、何れも所謂畿内系として捉えられるものであった。以下に検討に適する搬入品を伴出した遺物群ごとにまとめる。

①　下ノ坪遺跡 SK 27、SD 40

共にⅠ-6期に位置付けた。搬入品は土師器杯、高杯（614、616、910、916、927）である。916は都城の手法分類のｃ手法後ミガキを施すものである。これら杯の手法及び形態は、都城の土器編年では平安京Ⅰ期中頃に位置付けられよう。なお在地産土師器椀Ａ（914、915）の形態もこの年代観を補強する。(31)

②　下ノ坪遺跡 SB 21

Ⅰ-7期に位置付けた。搬入品は土師器Ⅲ（353、354）で、平安京Ⅰ期新頃に相当しよう。

③　下ノ坪遺跡 SB 20

Ⅰ-7期に位置付けた。搬入品は黒色土器杯（309）で、森分類の畿内系黒色土器Ⅰ類、同編年Ⅰ～Ⅲ期に相当しよう。(32)

④　小籠遺跡 SK 130・136

先述のように、編年試案Ⅱ-1期に後続するⅡ-2期に位置付けることができた。搬入の黒色土器椀は、報告されているように森分類の畿内系黒色土器Ⅲ類でＣ段階、都城の土器編年では平安Ⅱ期中～新に相当しよう。

Ⅶ．画期

編年試案でみた変化に前項の各遺跡の様相も加え、供膳具からみた画期について検討する。

1段階

編年試案Ⅰ-2～Ⅰ-3期である。まず杯Ａ、杯Ｂ、ⅢＡといった器形は土師器・須恵器共に一定の定着をみている。土師器杯Ｃの存在や各器形の暗文、須恵器蓋の形態等から、相当忠実にいわゆる畿内系の土器を模倣していると言えよう。規格的法量分化については、須恵器にそれを想定でき

る資料があるが、土師器では、強い規格性を示す証左はない。また須恵器杯Cのような先段階の系譜をひく器形が残っている。本段階の前半では須恵器杯C-2が主要器形の一角を占めるが、後半では杯Aとの区別が不明瞭になっていく。土師器の調整では回転ケズリを施すものを認めるが、断続ケズリのものも併存する。なお、本段階の土師器の出土量は次段階と比較すると少ないことから、製作手法や法量を検討できるレベルが、同じく次段階との比較において、その資料量的裏付けに準じたものになっていることを断っておく。更に、先行する土師器の資料群が現在確認できないことも、本段階の様相把握を次段階と比べると難しくしている。一方、これら出土比率とも関連して、本段階の土師器の概要については、少量・多器形と表現できる。また本段階頃の下ノ坪遺跡と北部の土佐山田北部遺跡群、土佐国衙跡といった香長平野内での比較で、土器の形態・手法・素地等が異なる例を見出せる。赤彩土師器の分布については各遺跡間の差異が大きいようである。窯跡出土須恵器との比較では表22のように、既に須江古窯跡群が操業しているとみられる。

以上から本段階は、総括的にみると律令的土器様式[33]として評価された様相が既にある程度浸透しながらも、個別的な器形・手法では先段階の系譜をひくものの残留や、比較的多様な形態上のディティール等、やや多様で初期的な様相を残す段階と言えよう。また土師器については、須恵器との同軌性が既にある程度以上看取される。

2段階

Ⅰ-4～Ⅰ-7期である。前半のⅠ-4～Ⅰ-5期では供膳具の多くを須恵器が担っていることが、表20をはじめ各遺跡資料より確認できる。須恵器杯C、土師器杯Cが消滅しており、下ノ坪遺跡では赤彩土師器が激減する。土師器杯皿Aは、非塗彩で須恵器と同じ調整とプロポーションに口縁部b形態とミガキをもつ、「定型化」したものになる。供膳具は須恵器・土師器共に杯A・B、皿A、高杯を中心に構成され、法量分化も須恵器・土師器共に明確な規格性が看取できる。換言すれば本段階前半は、器形・法量分化・手法共に規格性が最も顕著で様相が整然としている時期と言える。また現段階の資料では、同時期より遺物の出土が開始或いは急増する遺跡が目立つ。一方、須江古窯跡群出土須恵器との比較では、同窯群の操業は活況を呈しているといえる（表22）。

以上より本段階前半は、南四国における律令的土器様式の頂点を示していると言えよう。そして同期の各遺跡資料を総合すると、その様相は当地域としての最盛期に至った律令的須恵器生産体制を軸として達成されたものとみられる。

後半の様相は変化しているが、前半期の様相を基盤とした枠組みの中で理解することができる。Ⅰ-7期は当地域における律令的土器様式の終焉期であると共に、大きな画期をなす次期の土器様式の台頭期である。

3段階

Ⅱ期に相当する。前段階との間に本稿で扱う時期の中で最大の画期が存在する。当地域の律令的土器様式として捉えた様相を劇的に払拭し、平安時代前期における新しい土器様相が成立する。具体的には、供膳具における須恵器の消滅と、後述の回転台土師器4類への移行として現われている。

本段階に入って顕在化する土師器の外反する口縁部（g形態）や、やや内湾する体部、同杯Bの底部周縁端部に付く先細りの高台（6形態）は新しく登場してきた上位器種の影響を含むものと解

することができる。土師器供膳具を概観すると、継続される調整の省略化或いは欠落と共に、回転力のより顕著な利用、器厚の減少、底部と体部の「分割」的成形の進行を指摘することができる。[34] 後者は素材の精選、練度の向上、焼成法等に言及するまでもなく、土器製作技術の体系的発展を示すものである。さらに後述するように、発色にみる変化もそれらに同調して現れている。換言すれば本画期は、当地域で律令的土器様式を成立させた初期段階よりの基礎的な土師器製作技術である、回転台土師器製作技術の継承的発展とも捉えることができよう。また本段階の土師器供膳具にあらわれた形態・法量・ミガキ手法の変化はとりもなおさず製品に対する需要の変化への対応の結果であり、さらに踏み込めばその変化は、一方で土器生産において律令的須恵器生産を終息せしめ、他方では生産性向上を指向した土師器製作技術の発展を促すような要因を内在したものであったといえよう。さらに時代区分を超えてこの後に視野を広げると、当地域に連綿と続く回転台使用の土師器の一群に繋がる基本的技術の確立期の一つを、本段階に求めることもできるのではないだろうか。

Ⅱ期の推移については、小籠遺跡 SK 130・136に後続する遺物群も今次調査で出土しているが、報告に至っていない。次巻「下ノ坪遺跡Ⅲ」に期したい。見通しとしては、「播磨系須恵器模倣」[35]の土師器椀の出現をもって次の画期を設定でき、それまでをⅡ期として把握することができる。[36]

Ⅷ. 各視点からの様相

1．杯皿の形状

本稿での各期を通観すると、土器の形態及びそれより窺える手法自体に特徴を見出せる。ここでは巨視的な視点で属性を把握したい。以下には須恵器・土師器の同軌性が認められる事にも、当地域の様相が現れている。なお、平底の器形を前提として検討する。

まず、平らな底部から屈曲して斜直する箱形を基本とする全形的形態を「B相」とする。口縁部がやや外反したり、体部がやや内湾して立ち上がるものを

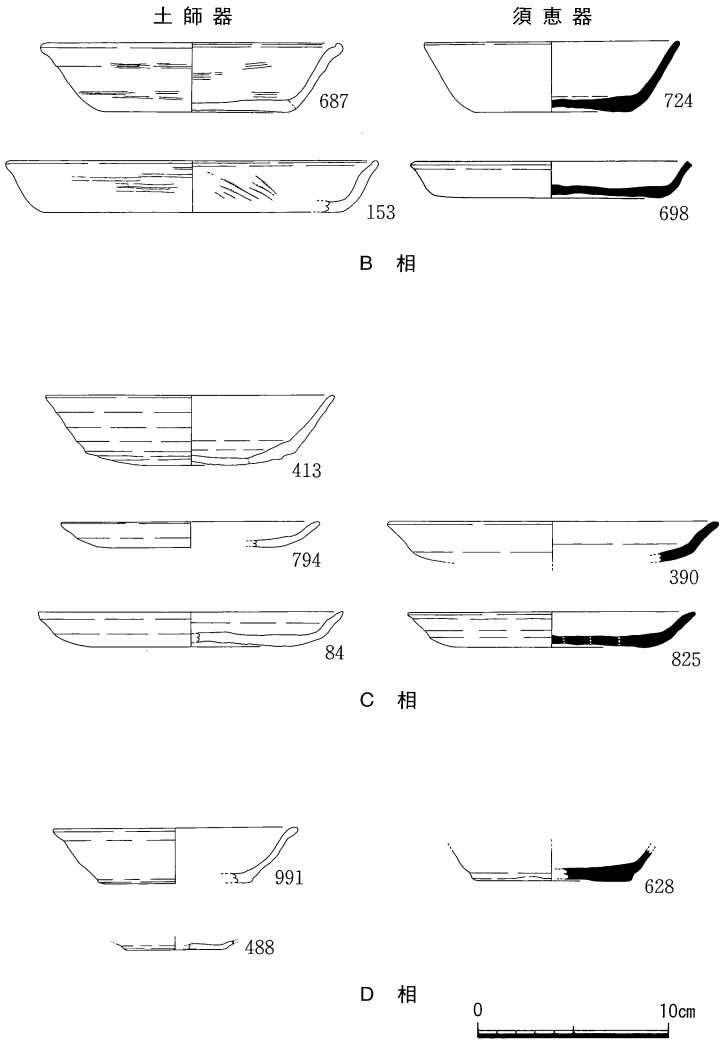


Fig. 144　杯・皿の形状類型例

含める。杯A・皿Aの基本的形態で、高台を持つ器形にも通底するとみてよい。既述の2段階前半の須恵器・土師器にその典型を求める。本相を広義に解すると、律令期の系譜上にある供膳具全ての普遍的形態にまで敷衍することもできようが、ここでは後述のC、D相を呈さず、それらに対置できる概念とする。なお本相の名称については、1段階の属性となる形態について‘A相’を仮想してのものである。

次に、口縁部の回転ナデが強くなり、器形に影響を与えるに至ったものを「C相」とする。具体的には口縁或いは体部の外反、やや顕著な回転ナデ痕としてあらわれる。やや突出気味であったり、立ち上がり外面を丁寧に成形しない底部を伴う場合がある。本相はⅠ-4期に萌芽を認め、Ⅰ-6期以降形態・量共に顕著となる。

3つめに、立ち上がり部外面に段を有するものを「D相」とする。初現は明確にできないが、Ⅰ-7期以降顕在化する。本属性は底部の分割的成形の進行と、立ち上がり部の調整の簡略化の表れとして理解することもできる。しかし、同部に丁寧な連続ナデを加え、整美に仕上げた個体が存在する。それとB相との相違とを重視すれば、本相を有する土器群の存在を許すに至った、或いは成立せしめた背景が想定され、その形態については当該期頃より始まる新しい器種構成における上位器種からの影響も考えられる。

2．回転台使用の土師器

西日本における「回転台土師器」[6]の研究史は東日本に較べ浅いものの、'80年代前半より土器生産との関連に論及する研究が発表され、視点としての重要性が周知されるに至った[37]。ここでは本稿資料中の在地産土師器小型供膳具（杯・皿・椀・蓋）における回転台の使用に関してまとめる。まず概要を先記すると、同資料中では回転台の非使用を断定できる例は見当たらない。断続ケズリを施す一群は、遺存度の問題もあり判断を保留しなければならなかった。換言すれば本稿該当時期においては、回転台土師器について論ずる事が、現段階では在地土師器供膳具についてのそれと同義となる場合が多い。さて、当地域の回転台土師器を理解するにあたっては、以下のような分類が有効である。

回転台土師器1類

須恵器と共通する成形・調整手法と、土師器の独自性即ち口縁部形態・ミガキを併せ持つもので、律令期前半の土師器の主軸をなす。画期1段階に属するものは、底部或いは杯部外面の回転ヘラケズリを証左として、362、944、951を挙げることができる。現時点での回転台土師器の初現である。上記のように断続ケズリを施す赤彩土師器が共伴し、画期の項で述べた同段階の多様性の一面をなしている。

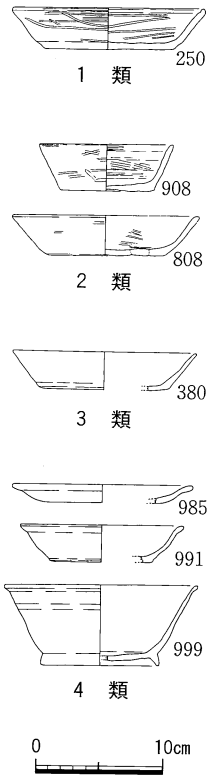


Fig. 145 回転台土師器の類型例

2段階に属するものは資料量も多く、須恵器と同じ回転ナデ・回転ヘラ切り痕及び全体形より、須恵器と共通の成形・調整によることが確認できる。一方で原則的に杯皿の全面に施すミガキや、

口縁端部の形態に土師器としての明確な独自性を看取できる。これらは安定した出土量と手法・形態の斉一性より、当地域の律令期の土師器の典型として捉えられる。

回転台土師器２類

ミガキと焼成以外に須恵器との差異が存在しないものである。２段階後半、Ⅰ-６～７期に確認できる。

回転台土師器３類

焼成を除くと律令期の系譜をひく須恵器と全く同じものである。Ⅰ-７期に出現する。

回転台土師器４類

編年試案Ⅱ期の供膳具の主流を占めるもので、須恵器供膳具は殆ど共伴しない。形態も３類から離れ、もはや律令期の土器の形態とは言えない。具体的には低平・小径化した皿や、口縁部のｇ形態、底部のＤ相といった特徴があらわれている。

３．赤色塗彩土師器

既述のように、今次まとまった量が出土した赤色塗彩土師器（以下赤彩土師器）に関しては、幾つかの特性が看取される。赤彩土師器は下記のごとく、現状では土佐、伊予、讃岐では一般的な遺物ではなく、従ってその全容の把握も困難であるが、地方における律令期の土器様式を性格付ける上で、重要な構成要素の一つになるものと考える。ここでは今次報告及び香長平野の同器種についてまとめ、隣県に関する管見も加えて大略的様相を摑み、課題を認識したい。原則的に、今次報告例との比較の有意性が高い奈良時代頃のものに限って検討する。また個々の時期についての詳細は省略する。

(1)　南四国中央部

既述したような南四国での当該期遺跡の調査例より、赤彩土師器の出土例をまとめたのが、表23である。今次報告以外は少数の出土であり、香長平野では国衙推定地や土佐山田町の所在する一帯では確認されず、物部川沿岸から東方の香宗川流域にかけて偏在している。また、本県中西部の佐川町や[38]、仁淀川下流域にも少数の出土例がある。出土器形については、土師器の群について述べた項と同様である。今次SK 30出土の皿は刷毛塗りであることを示すが、他の多くの個体では不明瞭である。素地については次の３種、及びその他に分けて捉える。1) Ⅰ群、2) Ⅱ群、3) 共伴する

表23　南四国の赤彩土師器[39]

	Ⅰ群	Ⅱ群	他の土師器と同	その他
下ノ坪遺跡	杯Ａ・Ｂ・Ｃ、皿Ａ・Ｂ、蓋、高杯、鍋	皿、壺	皿Ａ	皿Ｂ-１、皿Ｂ-２、壺
十万遺跡 ST３				皿Ｂ-１
深渕北遺跡				皿Ｂ
曽我遺跡	皿Ｂ、蓋			杯Ｂ、皿Ｂ
田村遺跡				皿、蓋（Ⅰ群か）

他の土師器と区別できないもの。Ⅰ、Ⅱ群については既に述べた。さて素地の発色を見ると、非塗彩土師器には存在しない10 YR 8/2灰白色付近を示すものと、橙色系を示すものに分けられる。以下、前者を灰白色系、後者を橙色系と称す。灰白色系の多くは1) で占められ、2)、3) は橙色系である。

(2) 伊予（燧灘沿岸）

今治市八町遺跡、同四村日本遺跡、東予市幸の木遺跡等に出土例がある。[40,41,42] 伊予では松山平野でも出土が報告されているが、[43] 遺物を実見していない。まず八町遺跡、四村日本遺跡では、全出土遺物に対する赤彩土師器の点数は少数と言える。器形は杯、杯Ｂ、皿、皿Ｂが報告されており、八町遺跡では実見した細片44点の中に高杯もあった。素地は両遺跡の既報告例を合わせて、灰白色系５点、橙色系３点である。回転台の使用については使用を肯定できるもの１点、使用を否定できるもの３点で、残りは不明である。

幸の木遺跡は整理段階で遺物を拝見した。相当量の赤彩土師器が出土している。「Ⅰ区」出土の赤彩土師器片のうち、器形判別可能なものには、皿Ｂ-２、蓋、皿Ｂ-１、杯Ａ、高杯（確認点数順）がある。同出土遺物群の素地に今次の基準を適用してみると、発色では灰白色系のものが橙色系の４倍強、胎土の精・粗では、粗なものが精良なものの４倍近くを数える。また「Ⅲ区」から出土している杯Ａには回転台使用のものが存在する。

(3) 讃岐（中讃）

中讃地域の森広遺跡 SD 7801、前田東・中村遺跡 SE 01で一定量の赤彩土師器が出土している。[44,45] 下川津遺跡、[46] 川津一ノ又遺跡等[47]では確実な報告例がなく、出土は偏っていると言える。森広遺跡 SD 7801で図示されている土師器供膳具から黒色処理されたものを除いた28点のうち、赤彩土師器は10点を数える。そのうち素地の観察ができた９点中の２点が灰白色系、７点が橙色系の素地で、砂粒を多く含むものとそうでないものがある。器形は皿７点、杯Ａ２点、杯Ｂ１点で、口縁端部の形態や皿の全体形には比較的多様性がある。回転台の使用については、その非使用を断定できる例はあるが、使用を断定できる例はない。共伴している須恵器の形態は土佐の本稿編年試案（以下本稿編年試案）ではⅠ-３期頃にあたる。次に前田東・中村遺跡 SE 01では、報告されている土師器供膳具10点のうち８点が赤彩土師器である。器形は皿Ａ４点、皿Ｂ４点である。素地は灰白色系５点、橙色系２点、分類不能１点である。回転台の使用については、その非使用を断定できる例はあるが、使用を断定できる例はない。共伴している須恵器の形態・手法は、本稿編年試案ではⅠ-３～４期にあたる。なお、川津元結木遺跡では赤彩の椀が出土しているが、上記の様相から考えて、本項で扱う赤彩土師器とは異なる背景を持つものと捉えておくのが適当と考えられる。[48]

(4) 阿波

鮎喰川下流域の庄遺跡、鮎喰遺跡、高畑遺跡、矢野遺跡、吉野川北岸の黒谷川宮ノ前遺跡、阿南市立善廃寺に比較的まとまった出土例がある。[49,50,51,52,53] まず資料を概観すると、少なくとも奈良時代においては赤彩土師器が土師器中で高率を占めることと、「平安中」[54] まで赤彩の杯類が継続的に一定量出土していることが、四国内で異彩を放つ。しかし、検討する時期についてはここでも本項冒頭の枠組みに準ずることとする。このような様相により、器形は皿Ａ、皿Ｂ、杯Ａ、杯Ｂ、蓋、高杯等主要なものが揃っており、杯皿Ａでは法量分化も認められる。奈良時代前半に位置付けられる資料群

では杯Ａが比較的多く、蓋も目立つ。「奈良後半」では高畑遺跡を見る限り、皿Ａがやや比率を増し、次いで杯Ａが多い。次に素地については徳島県立埋蔵文化財総合センター展示品の実見によるもので、あくまでも断片的になるが、庄遺跡出土で「奈良前」に位置付けられている皿Ａと、高畑遺跡出土で「奈良後」の皿Ａに灰白色系の素地を認める。他の橙色系と比較するとこれらの素地はやや粗で、微細な気孔が顕著である。数量的には橙色系の方が明らかに多い。回転台については、非使用のものから使用のものへの変遷が提示されている。[55]

(5)　小結

最初に、筆者の力量等の制約によりここで何らかの結論を出すことはできず、課題の提示に終わることを断っておく。さて各出土例を総覧して、次のような点を列挙できる。まず、阿波が赤彩土師器についてやや他と異なる様相を示している。そしてひとまず阿波を除けば、赤彩土師器の出土する遺跡について現段階ではつぎのように認識できる。第１は一定量の出土がある遺跡である。第２はごく少数が出土している遺跡である。第３は赤彩土師器が出土していない遺跡である。第１の遺跡の性格や立地を考えると、何れも寺院や地域の拠点ないしは在地支配層と中央権力との接点とみられ、また水上・陸上交通の要衝に位置する遺跡である。次に遺物自体に目を移して検討する。まず、既述のように赤彩土師器を観察してみると、地域或いは遺跡によって数比に差はあるものの、各々の地域での非塗彩土師器に存在しない発色或いは胎土の素地を持つものがある。灰白色系として捉えたグループはその主たるものである。その素地色については、同時期の非塗彩土師器のみならず、時期を超えた在地の酸化焔焼成の土器の中にも普遍性を見出せない場合、意図されたものであるか、或いは特殊な製作法の結果であると仮定できる。素地を白くする理由としては、施釉製品の例を持ち出すまでもなく、鮮やかな発色の追求に求められるであろう。土佐の香長平野では、素地の発色のみならず胎土も特殊な一群が認められ、赤い器としての仕上がりを強く意識した生産が想定できる。そして四国の上記のような遺跡で、そのような効果を素地から意図したものと、従来の素地に塗彩を加えたものが併存していることになる。ところで、このように赤彩土師器を検討する場合、その製作手法を克明に解明することが本来の前提条件であるが、現段階では十分と言えない。例えば塗料の塗布を行う段階や、塗布後の焼成の有無等は本件の基礎的問題であるが、[56]現在の資料からは断定することができない。いずれ遺存状態の極めて良好な資料が出土すれば、黒斑との関係等から判断できるであろうし、最終的には化学的裏付けや生産遺構からの検証が望まれる。なお塗布の方法については、刷毛塗りを確認できる個体が４県全てに存在する。

以上の事柄を踏まえて、赤彩の意味について考えてみたい。本稿で検討する赤彩は、畿内を軸として律令期に展開する器形に広く採用される一方で、その畿内においては行われないことは周知の通りである。このような問題に関しても先学による研究があり、鶴間正昭氏は汎本土的に資料を網羅し、その性格を官衙主導の儀式で使用される儀器に、手法的系譜を在地の伝統的赤彩土器に求めた。[57]武田恭彰氏は備中の律令期土器様相に関して考察を進める中で、赤彩の意味について「特殊な器に対する在地の伝統が反映された」と解釈すると同時に、赤彩土師器を含めた備中の土器様相に「他の地域を凌」ぐ律令的な土器様式の完成度を見出している。[58]また、「畿内産土師器」の橙色の発色を意識したものであるとの解釈も各所で見受けられる。このような先学の成果から四国の赤彩

土師器の背景を推考してみる。まず、赤彩自体に在地の伝統的背景をみる解釈は、四国では先行期に赤彩土師器の全域的な盛行がみられず、無理がある。次に「畿内産土師器」の発色の模倣という解釈について検討してみる。確かに、平城京跡より出土している土師器の多くは表面の発色はややにぶいものの、内部は彩度の高い橙色を示す。頻繁に赤彩を施される器形が畿内に発信源を求められるものであることを考えると、この解釈は合理的である。さて、ここで四国の赤彩土師器について得られた知見と留意点を列挙する。

① 盛行期の開始時期については同時ではないものの、一定の符号を看取することができる。これはおそらく、各地域の「律令化」の進展と関連するものと思われ、先学の成果とも軌を一にする。

② 出土比率と存続時期において、阿波が様相を異にする。

③ 赤彩土師器と非塗彩土師器は共存している。

④ 灰白色系として捉えた一群が、比率の差はあれ、何れの県でも存在する。言うまでもなく、この素地は先行する時期の土師器に系譜を求めることはできない。

これらを総覧すると、「畿内産土師器」の模倣という解釈の合理性は否定しないものの、それだけでは不十分であることも無視し難い。例えば③は赤彩と非塗彩の土師器の性格が異なることを示している。④については、単に橙色を求めるのみならば従来の土師器に彩色するものだけで事足りるのであり、さらに踏み込んで表24等から判断すれば、非塗彩でもかなりの橙色を示すものがあり、在地の非塗彩土師器と「畿内産土師器」の“橙色度”の格差についても客観的な比較・検討の必要性を感じる。同様に「畿内産土師器」の模倣という仮説に立って、回転台の使用等にみられる土師器の在地性と対比すれば、色彩への固執が突出する感がある。以上より、四国の赤彩土師器について確認及び推考をすれば、その用途には特殊性があり、背景には主として在地的伝統ではなく、各地方の「律令化」に伴う必要性を考えるべきである。またその製作法においては、灰白色系の一群の存在を単なる偶然の群発的事象と捉えるには不自然さがあり、何らかの関連を考慮しておくべきであろう。そう仮定する場合、少なくとも畿内の中枢からの直接的伝播ではない、地方における情報の授受が問題になるのであり、課題とする価値はあろう。また、上で確認したような論拠に立てば、例えば②のような様相差を抽出することが、各地域の律令制の浸透・展開・消長についての手掛りともなり得ることを示している。

4．土師器の発色

今次報告分を主とした赤彩を除く土師器の色調を表24-1に集計した。表24-2は各遺物群を編年試案に沿って時期ごとにまとめ、その比率を視覚化したものである。この結果を評価するにはいくつかの問題点を認識しておくことが前提となる。第1に、色の序列化である。左端に「赤い」色を、右方にそれから遠ざかる色を配した。両端に近いものは問題ないが、中庸部分の明度・彩度による序列化の正当性に疑義の余地がある。第2に多数の遺物の色を同列に論じられるかという点である。今次調査では遺物の色に異なった影響を与えるような埋没状態の差を認めず、その意味で少なくとも今次出土遺物内での検討は有意である。第3に普遍性である。他遺跡との間には上記のような条件差が存在する可能性がより高い。表では遺物を実見できた2遺跡を挿入した。比較資料として量的に貧弱であるが、表に表れた今次資料との同軌性を評価しておく。なお、今回資料化できなかっ

段階	編年試案		遺構／色調	2.5YR 5/8 明赤褐	2.5YR 6/8 橙	2.5YR 6/6 橙	5YR 5/8 明赤褐	5YR 5/6 明赤褐	5YR 6/8 橙	5YR 6/6 橙	5YR 7/8 橙	5YR 7/6 橙	7.5YR 7/8 黄橙	7.5YR 7/6 橙	7.5YR 6/6 橙	7.5YR 6/4 にぶい橙	7.5YR 7/4 にぶい橙	7.5YR 8/6 浅黄橙	7.5YR 8/4 浅黄橙	10YR 7/6 明黄褐	10YR 7/4 にぶい黄橙	10YR 7/3 にぶい黄橙	10YR 7/2 にぶい黄橙	10YR 8/6 黄橙	10YR 8/4 浅黄橙	10YR 8/3 浅黄橙	2.5YR 8/4 淡黄	2.5YR 8/3 淡黄	5Y 7/8 橙	5Y 7/1 灰白
1	Ⅰ	2	SD26	1		1				1		4					2													
			SB9						1	3																				
		3	SX2					2		1		1																		
			SB13						1	2				1																
2			SK20									1																1		
		4	SK22							1				1			1													
			白猪田		1					2		3																		
		5	SK30						1	4		1		3	1	1	1	1			1				2					
			SB18							1				1				1				1			1					
		6	SD40		1				1	5		3		3			1													
			SK27							2		1		4	3				1		5									
			SK33			1				3					2						1									
			SB16							4		1		1			1	1						1						
		7	SB19						1	2				1							1									
			SK34						1	3	3	1		1			1	3		1	2				1					
			SK21		1	1				1		1		3				1	1		2	1			1	2				
			SB20						1	1		1	1	1			1					1	1						1	1
			SB22							3	1		1	3	1						1	1	1		1					
			SB21		1				1	3	1	1		4	`						1				1					
3	Ⅱ	1	SA4									3			1						1				1					
			P14・15							1			1	5	1	2	5				1	2			2		1			
		2	小籠					1	2	12	1	6		18	2	1	2	1	5	2	4				1					

表24-1　出土点数

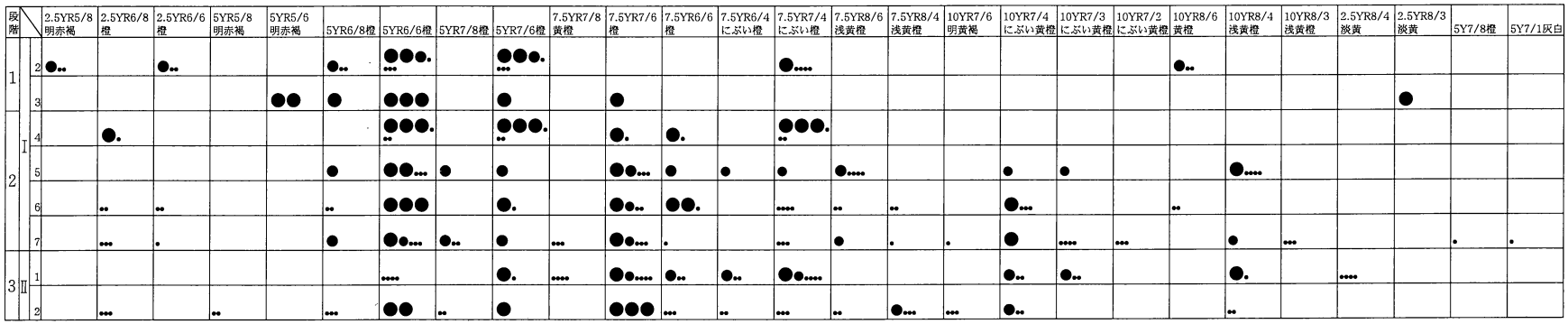


表24-2　各期ごとの比率

表24　土師器の発色

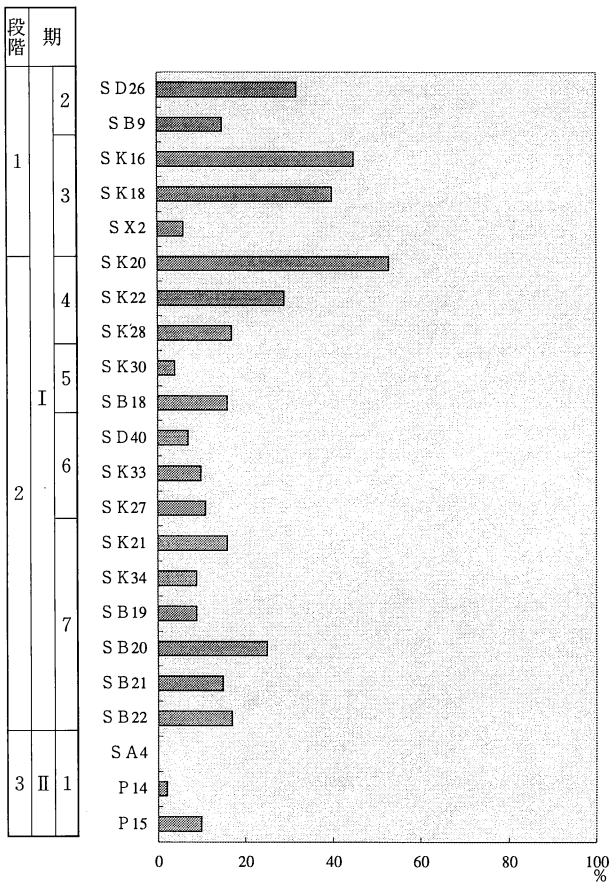
＊色調は巻頭凡例に準ずる。
＊白猪田は白猪田遺跡ＳＤ１、小籠は小籠遺跡ＳＫ130・136をさす。
＊赤彩、搬入は除く。
＊●＝10%、●＝5%、•＝1%

た土佐山田北部遺跡群（既述）の出土遺物からは、色における傾向差を窺える。以上を踏まえて、表より次のようなことが読み取れる。まず時期の下降に従って、赤色傾向から非赤色（淡・黄）傾向への傾斜が読み取れる。既述の第２段階までは色相5 YR に最大の重心があり、同段階前半までは赤彩土師器にも匹敵する2.5 YR に属するものも一定量を数える。同段階中頃以降は10 YR に属するものが安定して含まれるようになり、３段階では7.5 YR に重心が移っている。このような推移は焼成に関係するものと見ることができると共に、画期の項の動向とも、少なくとも齟齬を来たしていない。

５．杯と蓋

杯と蓋について、土師器・須恵器を総合して時期的出土傾向をみたのが表25～27である。杯Ｂについては１段階～２段階前半において、他期に例を見ない高率を示す遺物群が存在し、２段階末にも一定率を示す群がある。蓋も多くは杯Ｂと同調する遺物群が多いが、SB 22、SA 4 の率は杯Ｂとの関係でやや目立つ。これら杯Ｂと蓋の出土比率の推移は、杯Ａのそれと比較するとその特徴が一層明らかである。この結果から、２段階前半以前において杯Ｂと蓋のセットが比較的多く必要とされる場合があったのではないかという仮説を立て、今後検証したい。SK 22・28の項で触れた蓋の多量廃棄という問題についても課題である。なお、須恵器杯Ｂ及び蓋と須恵器胎土Ｉ群の関係については素地・胎土の項で触れた。

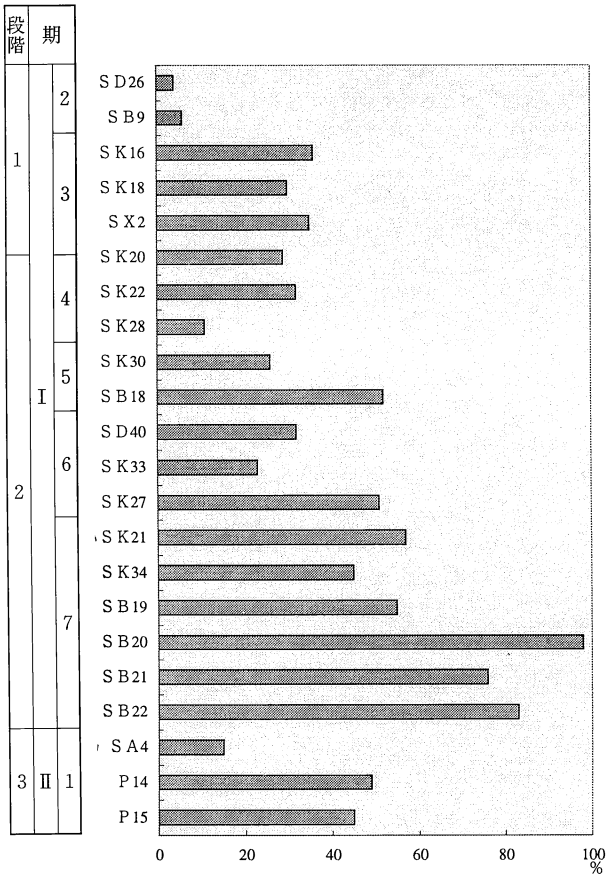
表25　杯Ｂ出土比率



遺　構	杯Ｂ	杯皿椀高杯	比率（%）
SD 26	8	25	32
SB 9	8	54	15
SK 16	5	11	45
SK 18	4	10	40
SX 2	2	31	6
SK 20	9	17	53
SK 22	25	85	29
SK 28	5	29	17
SK 30	4	107	4
SB 18	5	31	16
SD 40	3	41	7
SK 33	4	39	10
SK 27	5	47	11
SK 21	11	68	16
SK 34	7	80	9
SB 19	5	53	9
SB 20	13	52	25
SB 21	5	34	15
SB 22	5	30	17
SA 4	0	20	0
P 14	1	53	2
P 15	3	31	10

※杯皿椀高杯の口縁部総計に対する杯Ｂ底部の点数。

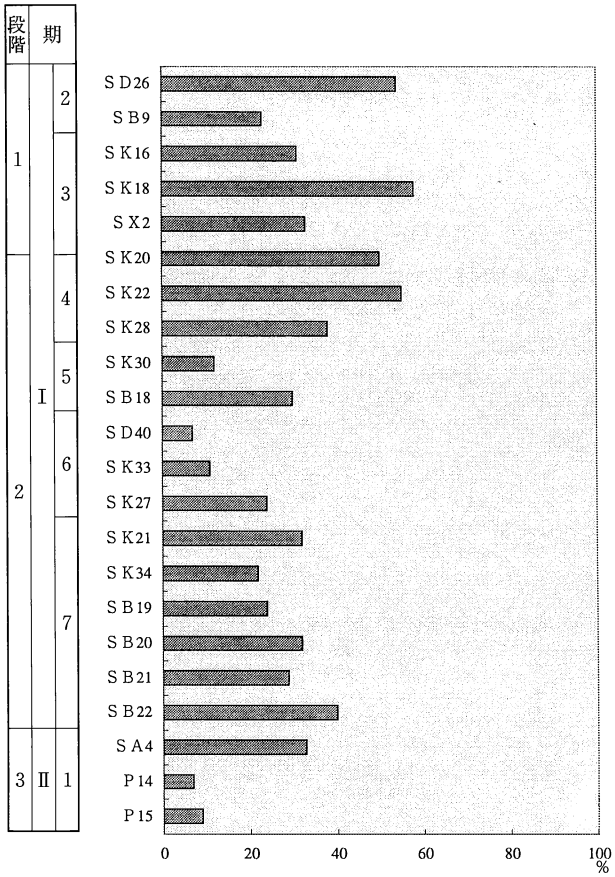
表26　杯A出土比率



遺　構	杯A	杯皿椀高杯	比率（%）
SD 26	1	25	4
SB 9	3	54	6
SK 16	4	11	36
SK 18	3	10	30
SX 2	11	31	35
SK 20	5	17	29
SK 22	27	85	32
SK 28	2	18	11
SK 30	28	107	26
SB 18	16	31	52
SD 40	13	41	32
SK 33	9	39	23
SK 27	24	47	51
SK 21	39	68	57
SK 34	36	80	45
SB 19	29	53	55
SB 20	51	52	98
SB 21	26	34	76
SB 22	25	30	83
SA 4	3	20	15
P 14	26	53	49
P 15	14	31	45

※杯皿椀高杯の口縁部総計に対する杯A底部の点数。

表27　蓋出土比率



遺　構	蓋	供膳具	比率（%）
SD 26	29	54	54
SB 9	16	70	23
SK 16	5	16	31
SK 18	14	24	58
SX 2	15	46	33
SK 20	17	34	50
SK 22	106	191	55
SK 28	11	29	38
SK 30	14	121	12
SB 18	13	44	30
SD 40	3	44	7
SK 33	5	44	11
SK 27	15	62	24
SK 21	32	100	32
SK 34	23	103	22
SB 19	17	70	24
SB 20	25	77	32
SB 21	14	48	29
SB 22	20	50	40
SA 4	10	30	33
P 14	4	57	7
P 15	3	34	9

※母数は杯皿椀蓋高杯の口縁部総計。

Ⅸ. まとめ

以上で得られた知見を要略し、視覚化するために表28を作成した。西弘海をはじめとする諸先学によって評価されてきた「律令的土器様式」に照らすと、本稿で検討してきたように、南四国では8世紀中頃から後半寄りの時期をピークとする律令的様相の変遷を追うことができた。それは都城の土器様式とは異なる内容を含むばかりでなく、四国という限定された地域の中でも同様とは言えず、「土佐型」の語を冠しておくのが適当であろう。そして各地の様相を比較する中で、地方における律令期の様相が立ち上がってくるものと考える。

表28　奈良～平安時代前期の概要

搬入品	段階	期		概要
	1	Ⅰ	2	奈良時代的様相と先代的様相の混在。
			3	過渡期。
	2		4	土佐型の律令的土器様式定型化。
			5	律令的土器様式最盛期
平安Ⅰ中→			6	律令的土器様相の最終形。
平安Ⅰ新→			7	過渡期。
	3	Ⅱ	1	新たな土器様相の開始。
平安Ⅱ中～新→			2	
			3	

さて、以下では回転台土師器及び平安時代前期の画期に関連する事項を主としてまとめと考察を行う。既述の事項を反復することにもなるが、今後の出発点として重要と考えるからである。まず、汎西日本的に古代の土器様相を概観する場合、土師器における畿内中枢部での「左手手法」の固守と、それ以外の広範な地域での回転台土師器の盛行という対置がなされる。畿内及びその周辺地域についての各研究では、回転台土師器出現について、その時期を畿内周辺において9世紀代に、背景を古代的土器生産の弛緩としての須恵器生産の衰退に求めた。その後、畿外即ち前記の地域以外の地域でも資料の蓄積と検討がなされ、畿外での出現時期を8世紀中頃までに求めることとなった。(59) 南四国では出原恵三氏が白猪田遺跡SD1出土遺物中に回転台土師器の存在を指摘し、いみじくも「律令的土器様式の一翼」を担っているものであるとの位置付けを示した。(60) さて今次報告では、既述のように8世紀前半に遡る回転台土師器を確認すると共に、その後の消長について一定の把握をすることができた。それによると南四国中央部においては、8世紀における律令的土器様式の展開の中で、畿内との同軌性が高い左手手法による土師器は定着していない。さらにその様相から考えると、今次出土遺物からは断定できないが、左手手法による律令的土師器は一度も定着していない可能性がある。因みに四国の他県では、8世紀中葉～後半頃に位置付けられている土師器に、畿内同様の手法を示唆するものが確実に存在する。一方、南四国中央部における回転台土師器の出現は、従来言われることの多かった律令的土器生産の崩壊・須恵器生産の衰退に伴うものではなく、当地域の律令期の土師器そのものが回転台使用によるものなのである。そして律令的土器生産の衰退期ではなく、まさに当地域の律令的土器様式のピークを迎える時期に、手法・形態共に最も整然とした律令期の回転台土師器群が成立するのである。上記した土佐型の律令的土器様相とは、このような南四国中央部の様相を考慮してのものであり、当地域における土器生産体制、ひいては律令体制の実相に関して重要な示唆を与えるものである。ところでこのような一見従前の回転台土師器に関する文脈になかった結果が導かれた原因の一つとして、これまでの回転台土師器に関する論議の中で、時期毎の性格付けや地域毎の様相についての認識が必

ずしも充分でなかったことが挙げられよう。例えば9世紀後半以降の回転台土師器と8世紀のそれは異なる内容を含むものとして認識するべきである。本稿で回転台土師器1類・2類としたものは当地域における律令期の回転台土師器であり、3類は律令的土器生産崩壊期の、4類は平安時代前期の新たな土器様相の主軸をなす器種である。このような区分自体は、今次南四国中央部において捉えられたものに過ぎないが、回転台土師器についてもその背景について考える場合は、各地域で前提となる区分を設定した上で検討する必要があろう。次に、2段階から3段階、編年試案Ⅰ期からⅡ期への画期について触れる。既述したように、ここには本稿で扱った時期中最大の画期が存在した。小森俊寛氏は都城の土器様相の変遷を概括し、「先行する律令的土器様式の終焉期であり、平安京を主要な舞台として新たに成立する土器様式の台頭期でもある」平安京Ⅰ期新からⅡ期古に「大きな画期」を見出すと共に、その画期を経て「平安時代前半期において平安京を中心に展開し発展した土器・陶磁器類の様相」を「前期平安京的土器様式」として評価した。[61] 南四国の土器編年試案と都城の土器編年を、共伴している搬入品を手掛りに比較すると、上記した各々の画期はよく同調している。各々の内容は異なるが、画期の到来自体は都城と軌を同じくしていると言える。そうすると、都城と南四国で把握できた土器様相の画期に象徴される社会的背景の変化は、少なくとも汎西日本的且つ同時的な現象ではなかったかという仮説を得られよう。最後に、今後各地域で様相が検討され、地域間の比較が可能になって、互いの差異或いは相似の背景を検討できるようになる段階を期待しておきたい。そうして地方と畿内、地方と地方の比較検討が行われて、律令期或いは古代の実相が明らかになるものと考える。

長々と述べてきたが、以上で本稿を閉じる。拙稿を記すにあたり、未熟な筆者に対して懇切丁寧なご指導を頂いた方々のお名前を記し、深く感謝申し上げたい。
片桐孝浩、勝浦康守、金田明大、国下多美樹、佐藤隆、佐藤竜馬、柴田昌児、鈴木忠司、武田恭彰、谷若倫郎、玉田芳英、出原恵三、中島恒次郎、中野良一、橋本久和、前田光雄、松田直則、百瀬正恒、森　隆、山中章、吉成承三（敬称略）、四国中世土器研究会の諸氏、高知県埋蔵文化財センターの諸氏。また、図表作成においては山本純代、森綾子両氏の補助を得た。

註）

（1）小森俊寛「概説」『古代の土器5－1　7世紀の土器（近畿東部・東海編）』古代の土器研究会　1997年
（2）菱田哲郎「近畿地方西部・山陰・山陽」『古代の土器研究 ―律令的土器様式の西・東5　7世紀の土器―』古代の土器研究会　1997年
（3）渡部明夫・森格也・古野徳久「打越窯跡出土須恵器について」『研究紀要Ⅴ』（財）香川県埋蔵文化財調査センター　1997年
（4）『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第10冊 金蔵寺下所遺跡 西碑殿遺跡』香川県教育委員会・（財）香川県埋蔵文化財調査センター・日本道路公団　1994年
（5）中島恒次郎「古代前期における食器製作の技法」『太宰府陶磁器研究 ―森田勉氏追悼論文集―』森田勉氏遺稿集・追悼集刊行会　1995年
（6）森　隆「畿内に於ける古代後半の土器様相」『土器からみた中世社会の成立』シンポジウム実行委員会　1990年

(7) 武内雅人「古代末期紀伊国の土器様相」『考古学研究』第31巻第1号　1984年

(8) 細い暗文が都城の土師器の属性の一つに挙げられることは、金田明大氏にご教示頂いた。

(9) 松田直則「土佐における古代末から中世の土器様相 ―模倣系土器の展開を中心にして―」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』日本中世土器研究会　1989年

(10) 廣田典夫『土佐の須恵器』 1991年

(11) 廣田佳久「南四国の須恵器 ―周辺地域における須恵器の変遷―」『王朝の考古学』雄山閣　1995年

(12) 高橋啓明「総括」『曽我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年

(13) 出原恵三「まとめ」『白猪田遺跡 ―久礼田地区県営担い手育成基盤整備事業に伴う発掘調査報告書―』高知県南国市教育委員会　1997年

(14) 下ノ坪遺跡の北西約6㎞に所在する。『小籠遺跡Ⅱ ―あけぼの道路建設工事に伴う発掘調査報告書―』(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1996年

(15) 下ノ坪遺跡の東約5.8㎞の香宗川河畔に所在する。『高知県香美郡 十万遺跡発掘調査報告書』香我美町教育委員会　1988年

(16) 下ノ坪遺跡の北西約5.5㎞に所在する。廣田佳久『土佐国衙跡発掘調査報告書 第11集 ―金屋地区の調査―』高知県教育委員会　1991年

(17) 下ノ坪遺跡の北西約6.1㎞に所在する。『土佐山田北部遺跡群 ―山田北部県営ほ場整備事業に伴う埋蔵文化財試掘調査報告書―』土佐山田町教育委員会　1992年

(18) 下ノ坪遺跡の北西約6.3㎞に所在する。『白猪田遺跡発掘調査報告書』南国市教育委員会　1997年

(19) 『土佐国衙跡発掘調査報告書 第4集 ―府中・太郎三郎ヤシキ地区の調査―』高知県教育委員会 1983年

(20) (14) に同じ。

(21) 『土佐国衙跡発掘調査報告書 第8集 ―松ノ下・金屋地区の調査―』高知県教育委員会　1988年

(22) 廣田佳久『土佐国衙跡発掘調査報告書 第10集 ―金屋・神ノ木戸地区の調査―』高知県教育委員会 1990年

(23) (21) に同じ。

(24) 出原恵三「風指遺跡」『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ 風指遺跡 アゾノ遺跡』高知県教育委員会　1989年

(25) 『後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ 具同中山遺跡群』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1992年

(26) 『船戸遺跡 ―中村・宿毛道路関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ―』高知県教育委員会・(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター　1996年

(27) 廣田佳久『竹シマツ遺跡 宮崎遺跡』高知県大方町教育委員会　1992年

(28) 「Loc. 39C」『田村遺跡群 第9分冊 高知県空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』高知県教育委員会　1986年

(29) 林部均「西日本出土の飛鳥・奈良時代の畿内産土師器」『考古学研究』第39巻第3号 考古学研究会 1992年。以下これに従って畿内産土師器の語を用いる。

(30) (10)に同じ。林谷1・3号窯跡については土佐山田町教育委員会保管資料を実見した。中山泰弘氏には貴重なご教示を頂いた。

(31) 『古代の土器1　都城の土器集成』『古代の土器3　都城の土器集成Ⅲ』古代の土器研究会編　1994年

(32) 森　隆「西日本の黒色土器生産(上)」『考古学研究』第37巻第2号 考古学研究会　1990年

(33) 西弘海『土器様式の成立とその背景』西弘海遺稿集刊行会　1986年

(34) 出原恵三氏は (14) で、「分割成形技法」を提唱した。この手法的特徴は3段階、Ⅱ期の土師器杯で顕著になることは確かであるが、今回の律令期からの連続的な変遷の中では、漸進的な発展が認められた。

(35) (9)に同じ。

(36) 当該期の土器編年については吉成承三氏による研究がある。「土佐の古代末から中世前期にかけての土器様相 ―高知平野を中心に―」『中近世土器の基礎研究XII 基本資料の再検討と今後への展望』日本中世土器研究会　1997年

(37) 森　隆「回転台土師器の研究史素描」『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会　1994年

(38) 廣田佳久『上美都岐遺跡』佐川町教育委員会　1997年

(39) (15)に同じ。『深渕北遺跡発掘調査概要報告書』野市町教育委員会　1995年。『曽我遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年。田村遺跡は'98年2月現在発掘調査中である。

(40) 『八町1号遺跡 ―2次調査区―』今治市教育委員会　1995年。遺物の実見に際しては、廣田秀久氏に便宜を図って頂いた。

(41) 『四村日本遺跡 ―県道今治丹原線の建設に伴う埋蔵文化財調査報告書　第1集―』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター　1998年

(42) 『幸の木遺跡・久枝遺跡埋蔵文化財発掘調査　現地説明会資料』(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター

(43) 栗田正芳「愛媛県における古代土器 ―石井幼稚園遺跡を中心に―」『第8回四国中世土器研究会資料』四国中世土器研究会　1996年

(44) 片桐孝浩「讃岐出土の東北系土器について ―特に黒色土器について―」『研究紀要Ⅲ』(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1995年

(45) 『前田東・中村遺跡 第1分冊』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・建設省四国地方建設局　1995年

(46) 『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団　1990年

(47) 『中小河川大束川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津一ノ又遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1997年

(48) 片桐孝浩『中小河川大束川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告　川津元結木遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター　1992年

(49) 『庄・鮎喰遺跡』徳島県教育委員会　1985年

(50) 勝浦康守「庄遺跡」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要6』徳島市教育委員会　1996年

(51) 『徳島県立国府養護学校プール建設工事に伴う高畑遺跡発掘調査概要報告書』徳島県教育委員会　1990年

(52) 『四国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告9 黒谷川宮ノ前遺跡』徳島県教育委員会・(財)徳島県埋蔵文化財センター・日本道路公団 1994年

(53) 立善廃寺、矢野遺跡は徳島県立埋蔵文化財総合センターの展示品による。

(54) 徳島県立埋蔵文化財総合センター展示室の表記による。

(55) 早渕隆人「黒谷川宮ノ前遺跡における古代の土器様相について」(52)に同じ。

(56) 谷若倫郎氏よりご教示頂いた。

(57) 鶴間正昭「奈良時代赤色塗彩土師器の様相とその意味」『古代学研究』第122号 古代学研究会 1990年

(58) 武田恭彰「備中に於ける律令期土器様相の諸問題」『古代吉備』第18集 1996年

(59) 『中近世土器の基礎研究X』日本中世土器研究会 1994年

(60) (13)に同じ。

(61) 小森俊寛「概要」『古代の土器2 都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会 1993年

4．下ノ坪遺跡出土の八稜鏡、「緑釉単彩陶器」、古代掘立柱建物

池　澤　俊　幸

Ⅰ．はじめに

ここでは特に注目される２点の遺物についての覚え書きを記す。また、掘立柱建物の消長についての試案を、簡単に示しておく。

Ⅱ．四仙騎獣八稜鏡

国内の出土例として長岡京、太宰府宮ノ本遺跡、発掘調査ではないが香川県綾南町羽床出土鏡が知られる。[1,2,3] 伝世品では正倉院第34号、35号、36号の各鏡があり、今次出土例と同じ文様を配する同型鏡で国内より出土又は伝世したものは、以上６面となる。本鏡については、既に東京国立博物館蔵の中国出土品と天津市蔵品をも含めた戸原和人氏の研究や、宮ノ本遺跡出土例に際しての狭川真一氏の考察があり、それらに委ねる。[4,5] 今次出土鏡は大きく欠損しているため法量に関する比較検討が不可能なこともあって、検討材料が多くはないが、長岡京出土鏡との比較を中心とした印象を記しておく。

まず残存部であるが、戸原氏が「麒麟」と判断した部分を中心に、左方に「鶴」の頭部、右方に「鳳凰」の尾の端部を含む部分である。下ノ坪遺跡出土鏡（以下下ノ坪鏡）は変色が目立つが、著しい錆膨れ等は見られず、鋳造時の微細な気泡や縁辺部の加工・調整痕も観察できる。しかし長岡京出土鏡との比較では、一見して文様の描出が鈍い。該当部分を互いに合わせると、３つの頂点は一致するが、それ以外の部分で下ノ坪鏡の方が僅かに肉痩せしているような感がある。また厚さについて、紐脇より麒麟頭部前方を通って「花枝」、稜縁部に至る線上で双方を計測したが、同値或いは0.6㎜までの範囲で下ノ坪鏡が凌駕している。紐穴の方向はやや異なる。下ノ坪鏡の破断面は全体と同様に錆化しており、廃棄時より破損していたものとみられる。破損によりできた角部は若干摩耗しているが、風化によるものか使用によるものかは判断できない。しかし、破断面の加工はみられない。

他の同型鏡とは写真での比較になるが、文様描出では下ノ坪鏡の方が正倉院35号、36号より鈍く、宮ノ本鏡より明瞭に見える。紐穴の方向は正倉院の３面と下ノ坪鏡は若干異なる。

ここで出土例をまとめてみると、出土遺構は掘立柱建物と墳墓で、環境的には都城と太宰府という中央権力の拠点と、西日本における讃岐と土佐中央部の地方拠点ということになる。第Ⅵ章の化学的調査の結果では、下ノ坪鏡も未分析の綾南町出土鏡を除く６面と同じく、「私的に製作された」とされるグループに分類されている。狭川氏は太宰府での出土に際しての同様の結果から、在地の工房での製作と都城からの搬入の両面の見解を示した。南四国では現在のところそうした工房を想定できる例がなく、下ノ坪鏡は他地域から搬入されたものと考えておくことが妥当である。下記の「緑釉単彩陶器」や二彩陶器と同じく、地方の拠点遺跡に文物が持ち込まれる背景について考える上で、注目すべき出土例と言うことができよう。

Ⅲ.「緑釉単彩陶器」

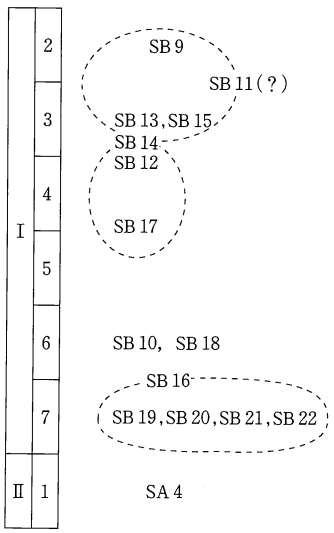
SB 10の柱穴より、火舎とみられる緑釉陶器片（180）が出土した。名称については竈、炉などの呼称もある。出土片は両端が透かしにあたる部分で、穿孔部にも若干の釉が残っている。外面に2条の弱い横位の凹線を認める。釉が残る部分は黄緑色を呈し、素地は観察表のごとく密で白く、軟質である。石英質の砂粒や雲母細片を少量含む。内面器表がやや変色して灰黄褐色を呈するのは、被熱や煤けによるものとみられる。長岡京出土の「緑釉単彩陶器」群と実際に比較すると、素地、釉調がほぼ同一のものがある。なお「緑釉単彩」の呼称の妥当性についての検討は、ここでは省略する。

「緑釉単彩陶器」は、「技術的には多彩釉陶器と共通する面を多く持つが、器種構成が特異で、奈良時代以来の鉛釉陶器とは趣を異に[6]」する一方で、後の量産型緑釉陶器とは器形・技法の両面で「連続性を看取することは難し[7]」いことが周知されている。出土例は平安京Ⅰ期中を中心とする短期間に限定され、空間的には都城及び寺院を主とする近畿地方の限られた遺跡より出土し、近畿以外では下野国分寺に例があるのみという[8]。このような遺物が下ノ坪遺跡より出土した背景についてここで明らかにすることはできないが、近隣に目をやると深渕遺跡（Fig. 2）より二彩陶器片が出土し、律令期の遺構も検出されている[9]。「緑釉単彩陶器」や二彩陶器は限定的な階層によって限定的な用途に使用されたものと考えられ、非量産品で流通ルートに乗るものではない。このような事例より物部川下流東岸地域は、地方の拠点遺跡と都城よりの文物流入について考える上で、現段階では南四国はもちろん全国的に見ても突出した要素をはらむ地域と言えよう。

Ⅳ. 掘立柱建物の消長

表題についての試案のみ提示しておく。建物の存続期間については、柱痕や柱抜き取り痕と柱穴埋土の遺物を分離して検討すれば、それについての情報を得られる場合があろうが、今次はそのような条件が必ずしも揃わなかった。その条件の下で、出土遺物と切り合い関係及び位置関係より推考した時期を編年試案に沿って示したのが表29である。SB 12は出土遺物より判断することが困難であるが、SB 9と共存することはできず、それに後続する時期に位置付けた。SB 10は「緑釉単彩陶器」や黒色土器が出土しており、SB 20に切られている。SB 10とSB 18の時期については、基本層準との切り合い関係と出土遺物の時期を比較した場合、疑問点も残る。SB 15・16は出土遺物に大きな時期幅があるように見えて判断に躊躇するが、その原因としては互いの柱穴が重複しており、しかも遺物を正確に分離できていないことが考えられる。SB 15では、検出面で川原石の集中があったことも含めて、新相の遺物は混入と捉えておく。そしてSB 16については古相の遺物を混入と捉えておく。なお、両棟付近の包含層では遺物の集中がみられ、その時期は両棟出土遺物の古相を示すものが多い。結局、両棟の時期比定においては、SB 16出土の完形の土師器杯4点と

表29　掘立柱建物消長試案



両棟の切合い、及び基本層準との切合いを重視した。なお、表29の年代観に関しては、258ページの表28を手掛かりにできる。今次は建物の配置や設計の基準、周辺の条里や他遺跡との関係に言及できないが、別稿を用意している。

V．結び

八稜鏡の比較・検討については上原真人氏、戸原和人氏、中島皆夫氏、成瀬正和氏、百瀬正恒氏、山本信夫氏の、「緑釉単彩陶器」については国下多美樹氏、百瀬正恒氏のご教示やご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。

註）

（1）『長岡京市文化財調査報告書　第14冊』長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所　1985年

（2）『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ』太宰府市教育委員会　1993年

（3）片山昭悟『奈良時代の鏡研究 出土地・伝世地を訪れて』 1997年

（4）戸原和人「長岡京出土の八稜鏡」『長岡京古文化論叢』中山修一先生古稀記念事業会編 同朋舎　1986年

（5）狭川真一「八稜鏡について」『太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ』太宰府市教育委員会　1993年

（6）平尾政幸「緑釉陶器の変質と波及」『古代の土器研究 ―律令的土器様式の西・東３ 施釉陶器―』古代の土器研究会　1994年

（7）小森俊寛「概要」『古代の土器２ 都城の土器集成Ⅱ』古代の土器研究会編　1993年

（8）高橋照彦「東国の施釉陶器」（6）に同じ。

（9）『深渕遺跡発掘調査報告書』野市町教育委員会　1989年

第Ⅵ章　自然科学分析

1．高知県下ノ坪遺跡出土の金属製品、赤彩土器の化学的調査

成　瀬　正　和（宮内庁正倉院事務所）

高知県香美郡野市町下ノ坪遺跡より出土した四仙騎獣八稜鏡破片１点と佐波理容器口縁部破片１点の金属材質、および赤彩土器13点について赤色の由来となる物質とその塗彩技法を知る目的で、蛍光Ｘ線分析[1]、Ｘ線回折[2]、顕微鏡観察[3]などの科学的調査を行った。

1　四仙騎獣八稜鏡

いわゆる緑青錆は表面にあまり析出していないが、全体に錆化しオリーブ色を呈している。鈕を含む３分の１ほどの破片である。

蛍光Ｘ線分析の結果、銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）、ヒ素（As）を主成分とし、このほか鉄（Fe）、

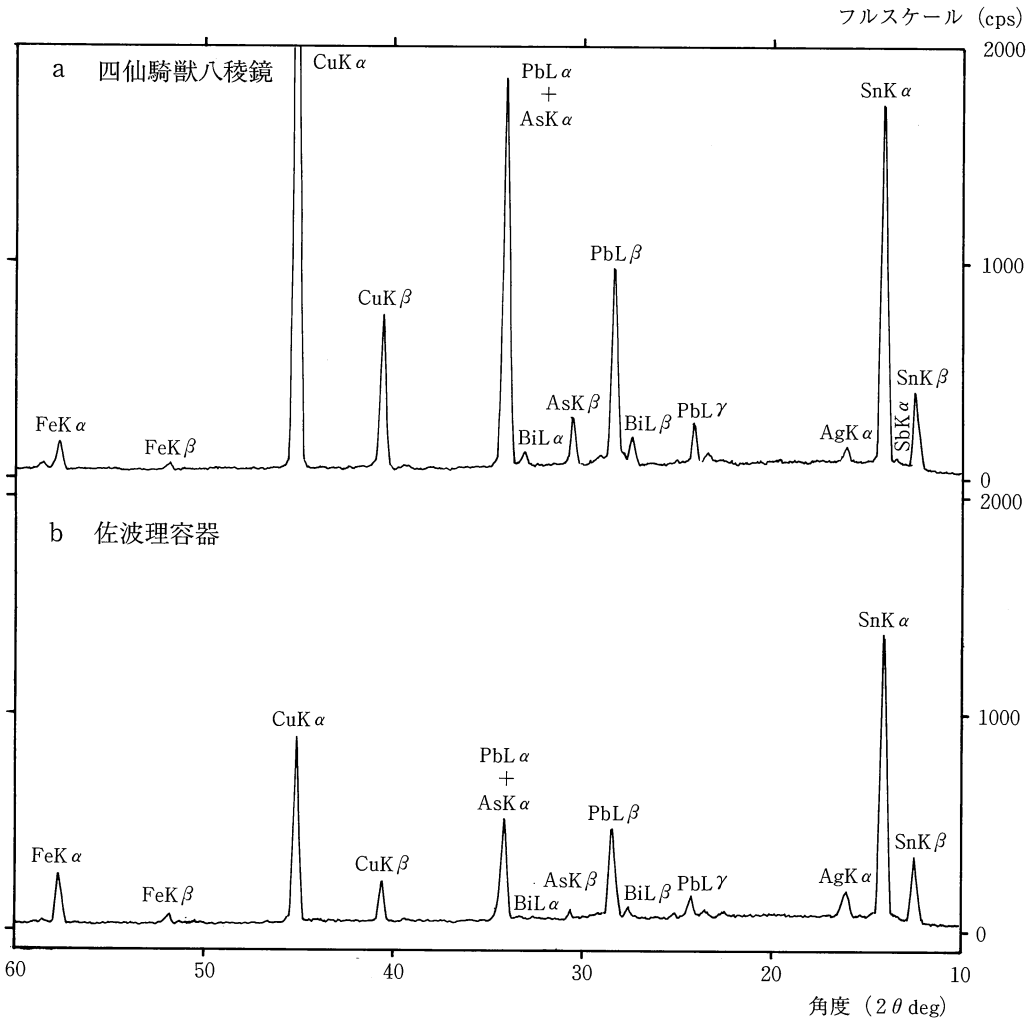


Fig. 146　蛍光Ｘ線スペクトル図

銀（Ag）、ビスマス（Bi）などを少量含む材質であることが明らかとなった（Fig. 146）。標準試料との比較により、表面における微量成分の見かけ上の含有量は銀（Ag）約0.5％、鉄（Fe）約0.4％、ビスマス（Bi）約１％、アンチモン0.5％と見積もることができる。

筆者はこれまで、正倉院の鏡34面について蛍光X線分析を終えているが、化学組成よりこれを大きく三つに分類している。[4]

A：銅（Cu）約70％、スズ（Sn）約25％、鉛（Pb）約５％からなる一群。

B：銅（Cu）約80％、スズ（Sn）約20％、ヒ素（As）１～３％からなる一群。

C（その他）：銅（Cu）70～75％、スズ（Sn）15～25％、鉛（Pb）1％以上、ヒ素（As）１～３％

A群はこの化学組成が、前漢から盛唐に至る中国鏡の標準的化学組成と一致することから唐よりもたらされた鏡と考えている。B群はこの化学組成が天平６年（734）の興福寺西金堂あるいは天平宝字４年（760）の法華寺阿弥陀浄土院の造営に関わる官営工房式の鏡原料配合比とほぼ等しく、またわが国古代の銅原料にはヒ素（As）が含まれることが特徴であることを考慮して、わが国の官営工房製と考えている。C群はヒ素（As）が含まれるものの、鉛（Pb）などを含み、わが国官営工房の鏡の特徴とは異なることから、私的に製作された鏡と考えている。

下ノ坪遺跡の四仙騎獣八稜鏡をこれに当てはめると一応C群に相当する。

わが国で四仙騎獣八稜鏡は正倉院に３面伝わり（厳密に言えば１面は杉本神社床下からの出土品）、また出土品としては京都府長岡京市長岡京跡左京六条二坊出土鏡、福岡県太宰府市宮ノ本遺跡（第７次調査）出土鏡、香川県綾歌群綾南町羽床下白梅出土鏡の３面が知られており、そこに新たに下ノ坪遺跡の一面が加わった。このうち羽床下白梅出土鏡を除く、６面については蛍光X線分析を行う機会に恵まれた。[5]

これらの鏡は互いに非常によく似た化学組成とは言えないが、銅（Cu）、スズ（Sn）の他に鉛（Pb）、ヒ素（As）などを少量含み、C群の範疇で捕らえることが可能である点では一致している。出土品についてはもちろん錆の影響があり、今回行った様な非破壊的な方法では地金の正しい化学組成を求めることはできないが、それでも６面の鏡の中に同じ溶湯から作られた鏡はないものと考えられる。

検出元素から見ると、下ノ坪遺跡出土鏡をはじめとする出土鏡３面はいずれもビスマス（Bi）が認められたが、正倉院の３面からはいずれもビスマス（Bi）は検出されなかった。ただしこの違いは直ちには原料や、製作地の情報に結びつくものではない。

2　佐波理容器破片

佐波理容器破片は口径に沿って幅５～10㎜程度、長さ７㎝、厚さ2.4～0.9㎜ほどの小さな破片である。これだけでは、この容器が皿なのかあるいは鋺なのかわからない。

蛍光X線分析により銅（Cu）、スズ（Sn）、鉛（Pb）を主成分とし、このほか鉄（Fe）、ヒ素（As）、銀（Ag）、アンチモン（Sb）、ビスマス（Bi）などを少量を含む材質であることが明らかとなった（Fig. 147b）。破片が小さいため、充分な測定面積が得られず、したがって表面における各元素の見かけ上の含有量を算出することも難しいが、銀（Ag）は１％近く以上含まれるようである。

筆者はこれまで正倉院佐波理約1,500点のうち約300点についてその科学的調査を行ってきた。その結果、佐波理の標準的化学組成は、銅（Cu）約80％、スズ（Sn）約20％であることがわかってきた。もちろん鉛（Pb）あるいはヒ素（As）をどちらかあるいは両方、１～数％程度含み、その分スズ（Sn）や銅（Cu）が少ないものもある。[6]

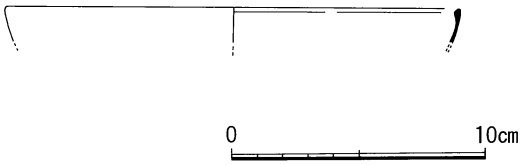


Fig. 147　下ノ坪遺跡Ｈ区Ⅳ層出土佐波理容器実測図

下ノ坪遺跡の佐波理は銅（Cu）、スズ（Sn）のほか、おそらく鉛（Pb）を数％程度含むタイプである。

3　赤彩土器

杯13点については表面に塗彩された赤色の由来となる物質を明らかにするため、蛍光Ｘ線分析とＸ線回折を実施し、また顕微鏡による観察を行った。縄文時代～古代の土器に赤色彩色が施されている場合、それは酸化状態の鉄（Fe）を含む化合物が用いられたことによるものか、朱（硫化水銀）が用いられたことによるものか、いずれかである。

蛍光Ｘ線分析では、いずれの試料からも、鉄（Fe）、ルビジウム（Rb）、ストロンチウム（Sr）などが検出された。水銀（Hg）は検出されていないことから、赤色は鉄（Fe）に由来するものと言える。しかしＸ線回折では、赤色の由来となる化合物として、873、939、949、952の４点からわ

表30　赤彩土器の分析結果

図版番号	蛍光Ｘ線分析	Ｘ線回折	赤色物質	器　　種
	鉄（Fe）	赤鉄鉱		
48	＋	－	鉄系赤色物質	（高台付底部）
676	＋	－	鉄系赤色物質	皿ＡⅠ
868	＋	－	鉄系赤色物質	皿Ａ（底部）
873	＋	＋	鉄系赤色物質	器種不明
939	＋	＋	鉄系赤色物質	皿Ａ
944	＋	－	鉄系赤色物質	杯Ａ
949	＋	＋	鉄系赤色物質	高杯（口縁部）
952	＋	＋	鉄系赤色物質	皿Ｂ-１
Ｄ区166	＋	－	鉄系赤色物質	杯Ｂ（底部）
Ｄ区167	＋	－	鉄系赤色物質	皿Ｂ-１（底部）
Ｄ区168	＋	－	鉄系赤色物質	皿Ｂ-１（底部）
Ｄ区169	＋	－	鉄系赤色物質	高杯（脚部）
Ｄ区187	＋	－	鉄系赤色物質	杯（口縁部）

＊Ｄ区は「下ノ坪遺跡Ⅰ」[7]掲載

ずかに赤鉄鉱が検出されたのみで、ほかからは検出されなかった。表には赤彩土器についての蛍光X線分析およびX線回折の結果を示した。縄文時代の赤彩土器の場合、塗彩が焼成前、焼成後のいずれでも、器面にある程度の赤色物質が付着している場合、通常X線回折によって赤鉄鉱が検出される。すなわち縄文の赤彩土器の場合、鉄が発色の由来となる物質としては、基本的にはベンガラが用いられているものと考えられる。これに対し、下ノ坪遺跡例は、充分な量の赤色物質が残存している場合でも、赤鉄鉱の検出は不可能か、もしくはごくわずかで、ベンガラを塗彩したものであるとは必ずしも言えない。古代の赤彩土器に用いられた赤色物質および塗彩技法については、さらに研究を進める必要がある。

本調査をすすめるあたり以下の方々にはお世話になりました。記して感謝いたします。京都大学上原真人・高知県埋蔵文化財センター池澤俊幸・野市町教育委員会小松大洋（敬称略）

（注）

（1）蛍光X線分析　試料に含まれる元素の種類とその量を知るための装置である。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機工業(株)製蛍光X線分析装置を用い、X線管球；クロム対陰極、分光結晶；フッ化リチウム、検出器；シンチレーション計数管、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；10～65°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。試料の測定は、全くの非破壊で行った。

（2）X線回折　試料に含まれる結晶性化合物すなわち鉱物など明らかにするための装置である。宮内庁正倉院事務所設置の理学電機(株)製文化財測定用X線回折装置を用い、X線管球；クロム対陰極、フィルター；バナジウム、印加電圧；27.5kv、印加電流；10mA、検出器；シンチレーション計数管、発散および受光側スリット；0.34°、照射野制限マスク（通路幅）；4㎜、ゴニオメーター走査範囲（2θ）；30～100°の条件で行った。その他の諸条件は適宜設定した。試料の測定は、全くの非破壊で行った。

（3）顕微鏡観察　赤彩土器の表面観察に用いた。オリンパス製顕微鏡SZH11を用い、×7.5～×64倍（ズーム）で観察を行った。

（4）成瀬正和（1995）正倉院宝物の化学組成を通してみた奈良時代の銅製品　第5回鋳造研究会発表要旨

（5）成瀬正和（1993）宮ノ本遺跡第7次調査出土四仙騎獣八稜鏡とその同型鏡について太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ　太宰府市教育委員会

（6）成瀬正和（1989）正倉院の銅製品 ―化学的調査から―　金属博物館紀要14

成瀬正和（1997）正倉院佐波理の化学組成　日本文化財科学会第14回大会発表要旨

（7）高知県香美郡野市町教育委員会（1997）

2．下ノ坪遺跡　竪穴住居址出土の骨同定報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1．骨格の種類

(1)　試料

試料は、弥生時代後期前葉の８点（試料番号１～８）である（表31）。各資料とも細片化したものが多く、集中して出土したものはないようである。

(2)　方法

ルーペを用いて骨格の特徴を観察し、種類・部位を同定する。

(3)　結果及び考察

同定結果を表31に示す。限られた試料であるが、魚骨片と獣骨片が多かった。これらは細片が多く、種名を特定できた試料は少ない。また、全ての獣骨には強く加熱を受けた痕跡があり、試料番号13のように黒色に変色しているのもあった。一方、試料番号７は鹿骨の角幹を縦方向に割いたものを素材としたヤス状の刺突具である。接合後に別個体の先端部が２本見られたので、少なくとも２本以上の個体が存在していたものと考えられる。本地域の弥生時代後期の資料として貴重である。

表31　骨同定結果

試料番号	採取地区・遺物番号など	時代性	種　類	部　位	備　考
1	D区 ST 6	弥生後期前葉	シカ or イノシシ	中手・足骨片(？)	
2	D区 ST 7 Ⅱ層	弥生後期前葉	不明獣骨片	不明	
3	F区 ST 8 中央P炭層	弥生後期前葉	ヒト(？)	指趾骨片	
4	H区 ST 10 中央P覆土下	弥生後期前葉	不明獣骨片		
5	J区 ST 11	弥生後期前葉	ヒト(？)	肢骨片	
6	J区 ST 11 Ⅱ層	弥生後期前葉	不明魚骨片	鰭片	
7	H区 ST 12	弥生後期前葉	鹿角	角幹	ヤス状の刺突具
8	H区 ST 12	弥生後期前葉	シカ or イノシシ	肢骨片	先端の尖るのは加工痕？

報告書抄録

ふりがな	しものつぼいせきに
書名	下ノ坪遺跡Ⅱ
副書名	農業農村活性化農業構造改善事業上岡地区区画整理工事に伴う発掘調査報告書
巻次	3
シリーズ名	高知県野市町教育委員会発掘調査報告書
シリーズ番号	第6集
編著者名	小松大洋
編集機関	高知県野市町教育委員会
所在地	〒781-5292 高知県香美郡野市町西野2706　TEL 08875-6-3910
発行年月日	西暦　1998年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
下ノ坪遺跡（しものつぼいせき）	〒781-5292 高知県香美郡（こうちけんかみぐん） 野市町上岡（のいちちょうかみおか）	39324	200024	33度 33分 10秒	133度 41分 43秒	平成7年 1月5日 ～ 平成8年 7月16日	(C, E, F, H, J区) 4,060m²	土地区画整理工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下ノ坪遺跡	集落跡 官衛	弥生 古墳 古代	竪穴住居 溝 土坑 土壙墓 掘立柱建物 ピット	弥生土器 土師器 須恵器 石包丁 鉄器 ガラス小玉 四仙騎獣八稜鏡	南四国最大級の掘立柱建物群 竪穴住居址よりガラス小玉100点以上出土 香川県からの搬入土器多量

下　ノ　坪　遺　跡　Ⅱ

（野市町埋蔵文化財発掘調査報告書第６集）

1998年３月

編　集
発　行　　高知県野市町教育委員会
　　高知県香美郡野市町西野2706
　　電話（08875）6－3910

印　刷　　西村謄写堂